

よしおか
きょうりき
富山市吉岡遺跡・経力遺跡
発掘調査報告書

—珠泉ニュータウン造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2002

富山市教育委員会

よしおか きょうりき
富山市吉岡遺跡・経力遺跡
発掘調査報告書

— 珠泉ニュータウン造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 —

2002

富山市教育委員会

序

富山市は、富山県のはば中央にあって、北は日本海に面し、東は3,000m級の立山連峰を望み、西には呉羽山丘陵を仰ぐ風光明媚な土地であります。恵まれた大自然の中、多くの先人たちが育んできた貴重な文化財は、富山の歩んできた歴史を知るためのかけがえのない財産であります。これを保護し、未来へ継承していくことは、私たちが果たすべき責務といえます。

現在、富山市には約600か所にもおよぶ遺跡が確認されています。近年、大規模開発に伴い、遺跡の発掘調査が数多く行われることで、先人たちが歩んだ歴史の一端が明らかになってきました。

近年、富山市南部におきましては各種開発に伴う発掘調査が随所で行われ、特に古代・中世において農地の開墾がさかんに行われたことを裏付ける集落遺跡が数多く見つかっています。

このたび、珠泉ニュータウン造成事業に先立ち発掘調査を行いました吉岡遺跡・経力遺跡は、このような開墾集落のひとつで、平安時代の建物跡や畠址、戦国時代の建物跡や石組み井戸などが検出されました。

また、縄文時代晩期末の住居跡なども川べりから検出され、この地に約2,300年前から長い期間にわたって人々が生活していたことがわかりました。

このような調査成果をまとめた本書が、私たち共有の財産である埋蔵文化財を理解していただく上で参考になれば幸いです。

最後に、発掘調査にご理解とご協力をいただきました地元熊野地区、吉岡・経力町内の皆様をはじめ、株式会社オスカーホーム、前田建設工業株式会社、富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、有限会社山武考古学研究所及び関係機関の方々に厚く御礼申し上げます。

平成14年3月

富山市教育委員会

教育長 大島 哲夫

例　　言

1. 本書は、珠泉ニュータウン造成事業に伴う吉岡遺跡・経力遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 遺跡は富山県富山市吉岡・経力地内に所在する。
3. 遺跡の調査面積・調査期間・担当調査員は次の通りである。

第1次調査

調査担当 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

調査員 堀沢祐一

調査期間 平成12年4月11日～同年8月7日

調査面積 1,575m²

第2次調査

調査担当 山武考古学研究所

調査員 折原洋一 小村正之 千葉孝之

調査期間 平成12年12月22日～平成13年7月31日

調査面積 7,118m²

第3次調査

調査担当 山武考古学研究所

調査員 武部喜充

調査期間 平成13年10月31日～同年11月15日

調査面積 500m²

4. 本書の編集は、折原洋一が行い、執筆は次の通りである。

II-1 調査に至る経緯 古川知明（埋蔵文化財センター主任学芸員）

VI-1 繩文時代晩期の遺跡立地について 古川知明（埋蔵文化財センター主任学芸員）

V 吉岡遺跡（第1次調査地区） 堀沢祐一（埋蔵文化財センター学芸員）

その他 折原洋一（山武考古学研究所）

5. 墓石土器については国立歴史民俗博物館館長 平川南教授・東京大学大学院 新井重行氏に判読をお願いした。

6. 本遺跡の出土資料等は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが保管している。

7. 発掘調査において下記の諸氏、諸機関に御指導・御協力を賜った。記して感謝の意を表するものである。

富山県教育委員会 富山県埋蔵文化財センター 平川南 新井重行 外山政子 三浦京子

株式会社オスクーホーム 前田建設工業株式会社 有限会社新成田総合社 株式会社東日本重機

間成測量株式会社 株式会社日本テクニカルセンター パリノ・サーヴェイ株式会社

凡　　例

1. 掘図中の方位は、座標北を示す。

2. 遺構・遺物等の縮尺は次の通りである。

土坑・井戸 1/60 握立柱建物跡・竪穴住居跡 1/80 窟 1/40 石組垣 1/30

土師器・須恵器・かわらけ・陶磁器 1/4 繩文土器・石器・木器 1/3

3. 掘図中のスクリーントーンは次の通りである。



燒　土



摩耗痕



敲打痕



赤　彩



縞　層



研　痕



目 次

| | | |
|----------------------------------|----|--|
| 序 | | |
| 例言・凡例 | | |
| I 位置と環境 | | |
| 1 地理的環境 | 1 | |
| 2 歴史的環境 | 1 | |
| II 調査の経過 | | |
| 1 調査に至る経緯 | 3 | |
| 2 調査の経過 | 4 | |
| 3 調査の方法 | 4 | |
| 4 基本土層 | 4 | |
| III 経力遺跡 | | |
| 1 第2地区 | 9 | |
| 2 第3・4地区 | 11 | |
| 3 第5・6地区 | 28 | |
| IV 吉岡遺跡(第2次調査) | | |
| | | |
| V 吉岡遺跡(第1次調査地区) | | |
| 1 調査の概要 | 84 | |
| 2 基本層序 | 84 | |
| 3 遺構 | 84 | |
| 4 遺物 | 88 | |
| VI まとめ | | |
| 1 縄文時代晩期の遺跡立地について | 90 | |
| 2 第12地区縄文時代晩期終末期の遺物・遺構について | 91 | |
| 3 弥生時代 | 93 | |
| 4 古代 | 93 | |
| 5 中世 | 94 | |

挿図目次

| | | | |
|---------------------------|----|------------------------------|----|
| 第1図 吉岡・経力遺跡とその周辺の遺跡 | 2 | 第18図 第3・4地区弥生時代出土遺物(1) | 18 |
| 第2図 基本上層図(1) | 4 | 第19図 第3・4地区弥生時代出土遺物(2) | 19 |
| 第3図 基本土層図(2) | 5 | 第20図 第3地区SB1 | 20 |
| 第4図 吉岡遺跡・経力遺跡位置図 | 6 | 第21図 第4地区ピット群・SX1 | 21 |
| 第5図 調査区配置図 | 7 | 第22図 第3・4地区井戸 | 22 |
| 第6図 第2地区全体図 | 8 | 第23図 第3・4地区中世穴 | 23 |
| 第7図 第2地区弥生・古墳時代遺物 | 9 | 第24図 第3・4地区溝断面図 | 24 |
| 第8図 第2地区古代遺物 | 9 | 第25図 第3・4地区中世出土遺物(1) | 26 |
| 第9図 第2地区中世遺物 | 9 | 第26図 第3・4地区中世出土遺物(2) | 27 |
| 第10図 第3・4地区全体図 | 10 | 第27図 第5・6地区全体図 | 28 |
| 第11図 第3地区弥生時代穴(1) | 11 | 第28図 第6地区ピット群 | 29 |
| 第12図 第3地区弥生時代穴(2) | 12 | 第29図 第5・6地区井戸 | 29 |
| 第13図 第4地区弥生時代穴(1) | 13 | 第30図 第5・6地区穴(1) | 30 |
| 第14図 第4地区弥生時代穴(2) | 14 | 第31図 第5・6地区穴(2) | 31 |
| 第15図 第4地区弥生時代穴(3) | 15 | 第32図 第5・6地区溝断面図 | 32 |
| 第16図 第4地区弥生時代穴(4) | 16 | 第33図 性格不明遺構 | 33 |
| 第17図 第3地区弥生時代溝 | 16 | 第34図 第5・6地区中世遺物(1) | 34 |

| | | |
|------|-----------------------------|-------|
| 第35図 | 第5・6地区中世遺物(2) | 34 |
| 第36図 | 第7・8・調整池地区全体図 | 36 |
| 第37図 | 第7・8・調整池地区縄文～弥生遺物 | 37 |
| 第38図 | 第7・8・調整池地区古墳遺物 | 37 |
| 第39図 | 第7・8・調整池地区古代SI1 | 38 |
| 第40図 | 第7・8・調整池地区古代SI2 | 39 |
| 第41図 | 第7・8・調整池地区古代SI3(1) | 39 |
| 第42図 | 第7・8・調整池地区古代SI3(2) | 40 |
| 第43図 | 第7・8・調整池地区古代掘立柱建物跡(1) | 41 |
| 第44図 | 第7・8・調整池地区古代掘立柱建物跡(2) | 42 |
| 第45図 | 第7・8・調整池地区SX1 | 43 |
| 第46図 | 第7・8・調整池地区遺構外古代遺物 | 43 |
| 第47図 | 第7・8・調整池地区中世SB2 | 43 |
| 第48図 | 第7・8・調整池地区[中世SB7] | 44 |
| 第49図 | 第7・8・調整池地区SD3出土遺物 | 44 |
| 第50図 | 第7・8・調整池地区遺構外中世遺物 | 44 |
| 第51図 | 第9・10地区全体図 | 45 |
| 第52図 | 第9地区SK2 | 46 |
| 第53図 | 第10地区SI1 | 47 |
| 第54図 | 第9地区掘立柱建物跡 | 48 |
| 第55図 | 第12地区全体図 | 50 |
| 第56図 | 第12地区1号石組炉(1) | 51 |
| 第57図 | 第12地区1号石組炉(2) | 52 |
| 第58図 | 第12地区2号石組炉 | 52 |
| 第59図 | 第12地区配石 | 53 |
| 第60図 | 第12地区穴 | 54 |
| 第61図 | 第12地区SK6・8出土遺物 | 55 |
| 第62図 | 第12地区縄文土器(1) | 61 |
| 第63図 | 第12地区縄文土器(2) | 62 |
| 第64図 | 第12地区縄文土器(3) | 63 |
| 第65図 | 第12地区縄文土器(4) | 64 |
| 第66図 | 第12地区縄文土器(5) | 65 |
| 第67図 | 第12地区縄文土器(6) | 66 |
| 第68図 | 第12地区縄文土器(7) | 67 |
| 第69図 | 第12地区縄文土器(8) | 68 |
| 第70図 | 第12地区縄文土器(9) | 69 |
| 第71図 | 第12地区縄文土器(10) | 70 |
| 第72図 | 第12地区土製品 | 70 |
| 第73図 | 第12地区石器(1) | 73 |
| 第74図 | 第12地区石器(2) | 74 |
| 第75図 | 第12地区石器(3) | 75 |
| 第76図 | 第12地区石器(4) | 76 |
| 第77図 | 第12地区石器(5) | 77 |
| 第78図 | 第12地区石器(6) | 78 |
| 第79図 | 第12地区縄文包含層遺物分布図 | 79・80 |
| 第80図 | 第12地区SK1 | 81 |
| 第81図 | 第12地区SK2 | 81 |
| 第82図 | 第12地区中世木製品 | 82 |
| 第83図 | 第1次調査A区B区C区遺構配置図 | 85 |
| 第84図 | 第1次調査烟址 | 86 |
| 第85図 | 第1次調査出土遺物 | 88 |
| 第86図 | 縄文時代晩期遺跡の分布 | 90 |
| 付図1 | 第1次調査地区SD・SK・烟址 (A・B区) | |
| 付図2 | 第1次調査地区SD05・SK01 (B・C区) | |

写真図版

- | | | |
|-----------|--------|-------------------|
| P L 1 - 1 | 第2地区全景 | - 3 調整池地区西半部全景 |
| - 2 | 第3地区全景 | - 4 調整池地区東半部全景 |
| - 3 | 第4地区全景 | P L 4 - 1 第9地区全景 |
| P L 2 - 1 | 第6地区全景 | 2 第10地区全景 |
| 2 | 第5地区全景 | P L 5 第12地区全景 |
| P L 3 - 1 | 第7地区全景 | P L 6 - 1 第3地区SK9 |
| - 2 | 第8地区全景 | - 2 第3地区SK17 |

| | | | |
|---------|------------------|---------|------------------|
| - 3 | 第4地区SK5 | P L15-1 | B区全景 |
| - 4 | 第4地区SK6 | - 2 | C区全景 |
| - 5 | 第4地区SK7 | P L16-1 | SD01完掘状况 |
| - 6 | 第4地区SK13・14 | - 2 | SD02完掘状况 |
| P L7-1 | 第3地区SB1 | - 3 | SD03土层堆積状况 |
| - 2 | 第4地区SE1 | - 4 | SD04土層堆積状况 |
| - 3 | 第3地区SE1 | - 5 | SD04青磁出土状况 |
| - 4 | 第3地区SE1著出土状况 | - 6 | SD04珠淵焼出土状况 |
| - 5 | 第5地区SE2 | - 7 | A区烟址検出状况 |
| - 6 | 第5地区SE3 | - 8 | A区烟址完掘状况 |
| P L8-1 | 第5地区SE4 | P L17-1 | B区基本層序 |
| - 2 | 第6地区SE1 | - 2 | 包含層遺物出土状况 |
| - 3 | 第6地区SE5 | - 3 | 包含層遺物出土状况・遺構検出状况 |
| - 4 | 第5地区SX1 | - 4 | 包含層遺物出土状况 |
| - 5 | 第7地区SI1 | - 5 | B区烟址遺物出土状况 |
| - 6 | 第7地区SI1瓶・配石 | - 6 | 烟址土層堆積状况 |
| P L9-1 | 第7地区SI2 | - 7 | 烟址須恵器出土状况 |
| - 2 | 第8地区SI3 | - 8 | 烟址土師器出土状况 |
| - 3 | 第7地区SB1 | P L18-1 | SD05遺物出土状况 |
| - 4 | 第8地区SB3・4 | - 2 | SD05土層堆積状况 |
| - 5 | 第8地区SB5 | - 3 | SD05漆碗出土状况 |
| - 6 | 第7地区SB6 | - 4 | SD05石鐵出土状况 |
| P L10-1 | 第7地区SB2 | - 5 | SD05の西側遺構完掘状况 |
| - 2 | 調整池地区SB7 | - 6 | SK01土師器出土状况 |
| - 3 | 第9地区SK2 | - 7 | SK02土層堆積状况 |
| - 4 | 第10地区SI1 | - 8 | SK01土層堆積状况 |
| - 5 | 第9地区SB1 | P L19 | 遺物(1) |
| - 6 | 第9地区SB2 | P L20 | 遺物(2) |
| P L11-1 | 第12地区1号石組炉 | P L21 | 遺物(3) |
| - 2 | 第12地区1号石組炉遺物出土状况 | P L22 | 遺物(4) |
| P L12-1 | 第12地区2号石組炉 | P L23 | 遺物(5) |
| - 2 | 第12地区2号石組炉遺物出土状况 | P L24 | 遺物(6) |
| - 3 | 第12地区1・2号配石 | P L25 | 遺物(7) |
| P L13 | 米軍撮影航空写真 | P L26 | 遺物(8) |
| P L14-1 | 測査区全景 | P L27 | 遺物(9) |
| - 2 | A区全景 | | |

I 位置と環境

1 地理的環境

本遺跡は、富山県中央に位置する富山市の南部に所在し、JR富山駅より南方へ6km、北陸自動車道富山インターチェンジより東南方向へ2kmに位置する。

富山市南部は常願寺川扇状地と神通川扇状地と下流の氾濫原により構成され、吉岡・経力地区は常願寺川扇状地と神通川扇状地が複合する部分の扇状地先端部に存在し、本地区は扇状地から氾濫原に移行する傾斜変換点付近となる。周辺には熊野川・上川・二股川等の中小河川が網の目のように分流・合流をしながら北流し、神通川へと流れ込んでいる。

遺跡周辺は、標高が40~42mで、全体として北西方向に下る緩やかな傾斜を有し、遺跡北方の標高25~40mの地域では自噴井と呼ばれる湧水点が数多く存在し、遺跡の北に接して存在する経力の湯をはじめとして、的場の湧水・本郷の湯・刀尾神社境内の功徳水・重要文化財浮田家住宅前の清水等が知られている。本遺跡内の西部にも沼地である地点が存在し、今回の発掘においても極めて浅い井戸群が検出されており、地下水位が高い地域であったことが理解できる。

2 歴史的環境

本地域では、縄文時代より中世に至るまでの遺跡が存在しているが、各時代においてその分布の偏りが見られる。

縄文時代では、周辺においてあまり多くの遺跡が知られてないが、本遺跡の西方に接する悪王寺遺跡、西方2kmに任海宮田遺跡で晩期の資料が得られており、本遺跡近隣の熊野川・土川流域に同期の集落が集中している。

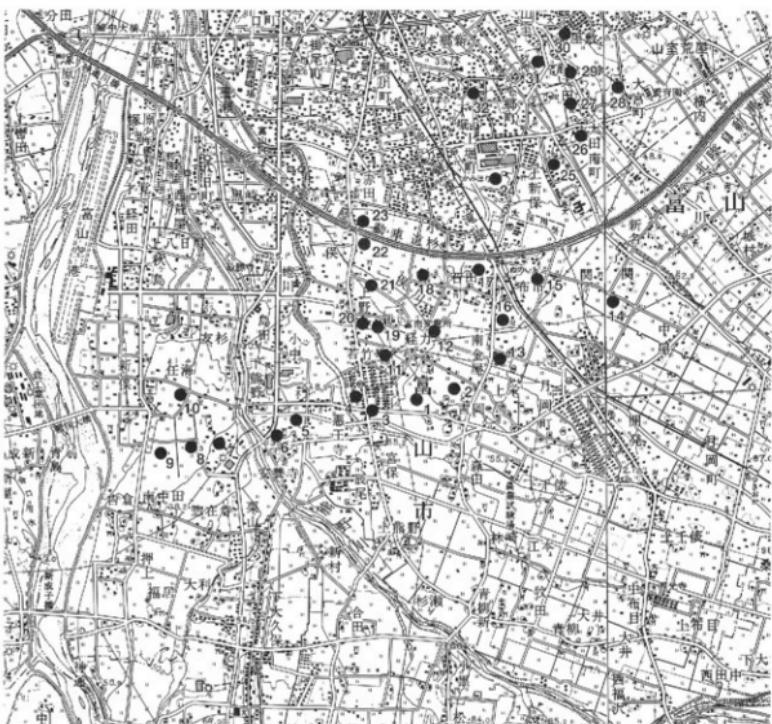
弥生時代では、黒瀬大屋遺跡において後期の資料が得られているにすぎず、同時代の遺跡が極めて希薄な地域と言える。

古墳時代では、神通川沿いに所在する任海宮田遺跡、本遺跡北方に所在する上新保遺跡等で少量の資料が得られているが、弥生時代同様に希薄な分布状況と言える。

古代では、任海宮田遺跡・任海鎌倉遺跡・任海砂田遺跡・吉倉B遺跡・友杉遺跡・上野井田遺跡・上新保遺跡等で発掘調査が実施されている。任海宮田遺跡を中心とする任海遺跡群では多くの堅穴住居跡とともに「城長」「観音寺」「寺」「墾田」等の墨書き土器やメノウ製帯飾り等が出土し、寺院や官衙等の公的施設が存在したこと匂わせる。上野井田遺跡では小規模な調査面積であるが、堅穴住居跡が検出されており、遺跡面積から想像すると大規模な集落が存在した可能性も考えられる。上新保遺跡は本遺跡と同様に扇状地端部に位置し、100軒を越える堅穴住居跡を中心とした集落跡とともに畠跡が検出されており、この畠跡はプラント・オ・パール分析により陣種を主に栽培されていることが推定されている。以上のように本遺跡周辺の古代は古墳時代以前と大きく異なり、集落数が増大し、開発が進んだことが明らかである。しかしながら、これらの集落は8~10世紀代にかけての期間に限定され、11世紀代の遺跡は皆無となり、再び遺跡の存在が確認されるのは中世に入る12世紀代からである。中世の遺跡としては吉倉A遺跡・吉倉B遺跡・南田中A遺跡・上新保遺跡等数多く存在している。また、後白河法皇宣「賀茂別當神社文書 寿永3年(1184)」上賀茂神社領越中新保御厨とあり、滑川新保とともに比定地候補のひとつにあげられている。なお、新保御厨は永徳2年(1490)まで賀茂神社と関係があったとされている。

本遺跡の北西にある布市という地名は、康永3年（1344）に越中守護となった桃井直常が觀応の乱で足利他に破れた後に余生を過ごした地という伝承が残されており、上新保遺跡地内に在住するも桃井家はその末裔という。この桃井家の屋敷地内を上新保遺跡の調査で発掘を行ったところ江戸期に遡る大規模な建築遺構が検出されている。布市にある曹洞宗太平山興国寺は興国6年（1344）直常開基を伝え、周辺の中世寺社七宮七寺があったと伝えられている。なお、布市には「古新保」という小字が存在し、新保の地名に関係すると考えられる。

吉岡・経力遺跡の東方には、中世に遡る飛騨街道が存在する。主要幹線である飛騨街道は飛州往来・飛州街道と呼ばれ、富山～小泉～布市～小黒～坂本～能津の道程で、小泉から布市の間は小泉～大町～下堀～上堀～布市となり、布市～能津までは布市往来・布市道と呼ばれていた。



- 1 吉岡遺跡
- 2 経力遺跡
- 3 若竹町遺跡
- 4 惠王寺遺跡
- 5 下熊野遺跡
- 6 安養寺遺跡
- 7 任海遺跡
- 8 任海遺跡
- 9 吉倉B遺跡
- 10 任海宮田遺跡
- 11 上野遺跡
- 12 石田遺跡
- 13 布市遺跡
- 14 閣遺跡
- 15 布市北遺跡
- 16 興國寺館遺跡
- 17 石田打宮遺跡
- 18 石田北遺跡
- 19 上野遺跡
- 20 上野龜田遺跡
- 21 二俣遺跡
- 22 二俣北遺跡
- 23 二俣寺跡
- 24 上新保遺跡
- 25 本郷水上遺跡
- 26 太田南町遺跡
- 27 太田本郷城跡
- 28 大宮町遺跡
- 29 太田中田II遺跡
- 30 太田悲見遺跡
- 31 太田中田I遺跡
- 32 本郷椎木遺跡

第1図 吉岡・経力遺跡とその周辺の遺跡

II 調査の経緯

1 調査に至る経緯

経力遺跡・吉岡遺跡は、富山市教育委員会が実施した市内遺跡分布調査（昭和63年度～平成3年度）により新たに発見された遺跡である。昭和63年12月に遺跡地図にNo.524経力遺跡、No.525吉岡遺跡として登載し周知の埋蔵文化財包蔵地とした。経力遺跡は中世を主体とする散布地約44,000m²、吉岡遺跡は奈良・平安時代を主体とする散布地約221,000m²を確認していた。

平成9年10月、約12haに及ぶ経力・野熊地区住宅団地計画について奥人不動産販売株式会社・株式会社太陽興発から協議がなされた。計画地内には経力遺跡の全部20,000m²及び吉岡遺跡の北半部65,000m²が含まれていたため、試掘確認調査が必要と回答した。

協議の結果、両社の協力を得て市教委が調査を行うこととなり、平成9年10月から11月にかけて実施した。調査の結果、経力遺跡においては4地区で計7,530m²の遺跡が所在することを確認した。弥生時代の穴、古代・中世の掘立柱建物・溝・穴・烟址等を検出し、各時代の上器・鉄製品等が出土した。吉岡遺跡においては3地区で計18,000m²の遺跡が所在することを確認した。縄文時代後～晩期の穴、弥生時代の穴、平安時代の掘立柱建物、堅穴住居、穴・溝・烟址等を検出し、各時代の土器等が出土した。吉岡遺跡の一部では、縄文時代と平安時代の文化層が重複しているのが認められた。この試掘確認調査結果は平成9年12月に両社に通知した。

その後平成11年1月に至り、フジコシミサワホーム株式会社・株式会社オスカーホームが事業を引継ぐこととなったため、再度調整を行った。この間文化庁から発掘調査基準の方針が示され、盛土による宅地部分等については発掘調査を要しないという考え方に基づき、保護層30cm以上を盛土した宅地部分を除外した公共下水排水工事部分・道路・調整池について発掘調査を行うこととなった。

調整の結果必要とされた発掘調査面積は、経力遺跡1,877m²、吉岡遺跡延べ6,557m²の計8,434m²であり、現地調査は平成12年4月に着手し、平成13年11月に完了する計画となった。調査は工事用基幹進入路となる吉岡遺跡1,600m²を市教委がまず着手し、その後市の監理のもと民間発掘調査機関が調査を進めることとなった。

この調査方針について合意した旨を記した協定は、平成12年4月フジコシミサワホーム㈱と㈱オスカーホームのそれぞれが市と締結した。その後この事業はすべて㈱オスカーホームが行うこととなった。

発掘調査の区分については表1に示したとおりである。

(古川)

表1 発掘調査実績

| 遺跡名 | 区分 | 面積 | 担当 | 調査期間 | 検出遺構 | 遺物 |
|------------------|------------------|---------------------|----------|------------------------|--|--|
| 経 力 遺 跡 | 第2地区 | 318m ² | 山武考古学研究所 | H13.29 ～13.46 | 掘 (古代) | 弥生土器・土師器・須恵器 |
| | 第3・4地区 | 1,202m ² | 山武考古学研究所 | H13.29 ～13.49 | 掘立柱建物跡・井戸・穴・溝 (中世)、 掘 (古代)、穴 (弥生時代) | 弥生土器・珠・滑石・八尾鏡・白磁・上 輪滑・箸・曲物 |
| | 第5・6地区 | 357m ² | 山武考古学研究所 | H13.29 ～13.31 | 井戸・穴・溝・性格不明遺構 (中世) | 珠・滑石・青磁・土師器 |
| 吉 岡 遺 跡 | 第1次調査区 | 1,575m ² | 富山市教育委員会 | H12.4.11 ～12.8.7 | 穴・溝・焼 (古代)、溝 (中世) | 織文土器・石器・弥生土器・土師器・須恵器・ 白磁・青磁・珠・滑石・八尾鏡・白磁・珠・滑石・青 磁 |
| | 第7・8地区 調整池地区 | 2,094m ² | 山武考古学研究所 | H13.4.4 ～13.7.31 | 掘立柱建物跡・溝 (中世)、堅穴住 居・掘立柱建物跡・焼 (古代) | 縄文土器・石斧・十輪器・須恵器・珠・滑石・ 青磁・土師器 |
| | 第9・10地区 1面・2面 | 1,176m ² | 山武考古学研究所 | H13.4.4 ～13.6.11 | 掘立柱建物跡・溝 (中世)、堅穴住 居・焼 (古代)、穴 (縄文) | 縄文土器・十輪器・須恵器・珠・滑石 |
| | 第11地区 | 72m ² | 山武考古学研究所 | H12.12.22 ～12.12.26 | 穴・溝・焼 (古代) | 十輪器 |
| | 第12地区 | 657m ² | 山武考古学研究所 | H13.4.4 ～13.7.5 | 穴・焼 (中世)、穴 (弥生)、卯・配 石 (縄文) | 縄文土器・弥生土器・石斧・石皿・凹 石・土師器・須恵器・珠・滑石・箸・下臍 |

2 調査の経過

吉岡・経力遺跡は、第1次から第3次にわたる発掘調査が実施されており、1次調査は富山市教育委員会により、第2・3次調査は山武考古学研究所が担当している。

第1次調査

平成12年4月11日～同年8月7日

第2次調査

平成12年

12月期 第11地区調査を開始、終了する。

平成13年

2月期 第2～6地区の表土除去を開始、終了する。第4～6地区の調査を開始する。

3月期 第4～6地区の調査を終了する。第2・3地区の調査を開始する。

4月期 第2・3地区の調査を終了する。第7・9・10・12地区の調査を開始する。

5月期 第7・8・9・10・12地区の調査を継続する。

6月期 第7・8・12地区の調査を継続する。第9・10地区の調査を終了する。

7月期 第7・8・12地区の調査を終了する。調整池地区西半部を終了し、第2次調査を終了する。

第3次調査

平成13年

11月期 調整池地区東半部を調査開始・終了し、吉岡・経力遺跡の全ての発掘調査を終了する。

3 調査の方法

遺跡は、吉岡遺跡と経力遺跡に大きく分かれるが、調査の都合上調査区を第1地区から第12地区の通しNoとした。なお、遺構・遺物のまとまりから見ると各地区は第2地区、第3・4地区、第5・6地区、第7・8地区と調整池地区、第9・10地区、第12地区、第1次調査地区と第11地区の7群となる。

調査区は、調査の便宜を図るために各地区に合わせた基準杭を設定し、基準杭上に公共座標を落した。

発掘は、表土除去を重機を用いて行い、遺物包含層は人手により掘り下げ、遺構は土層観察用の畔を残しながら人手により掘り下げた。また、写真撮影及び図面実測は必要に応じて随時実施し、調査終了時に調査区全体の航空写真を撮影した。写真はモノクロ及びリバーサル、6×7判のモノクロの計3種を用いた。実測図は堅穴住跡・井戸・穴を1/20、畳を1/40の縮尺とした。

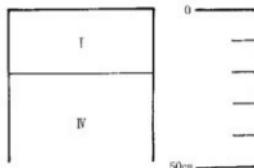
4 基本土層

基本土層は、調査区により若干の相違が認められる。遺構確認面は各区とともにⅢ層及びⅣ層となる。

第5・6地区基本土層 第2図

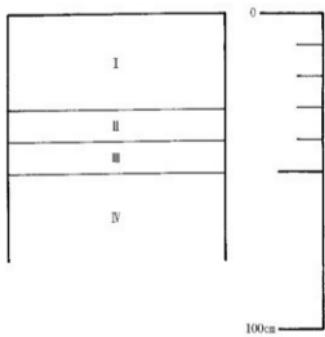
I層 繾作土

IV層 黄褐色砂質 粘性悪く、縫まり良好。古代確認面。

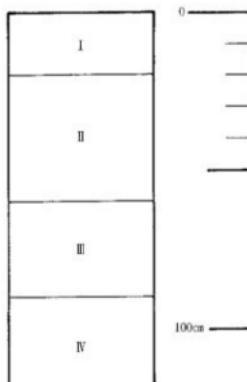


第5・6地区基本土層

第2図 基本土層図(1)



第2～4・7・9・10・11地区基本土層



第12地区基本土層

第3図 基本土層(2)

第2～4・7・9・10・11地区基本土層 第3図

I層 耕作土

II層 黒色土層 粘性、締まりともに良好。中世古代遺物包含層。

III層 暗褐色土層 粘性、締まりともに良好。古代遺物包含層。

IV層 黄褐色砂質 粘性悪く、締まり良好。古代確認面。

第12地区基本土層 第3図

I層 耕作土

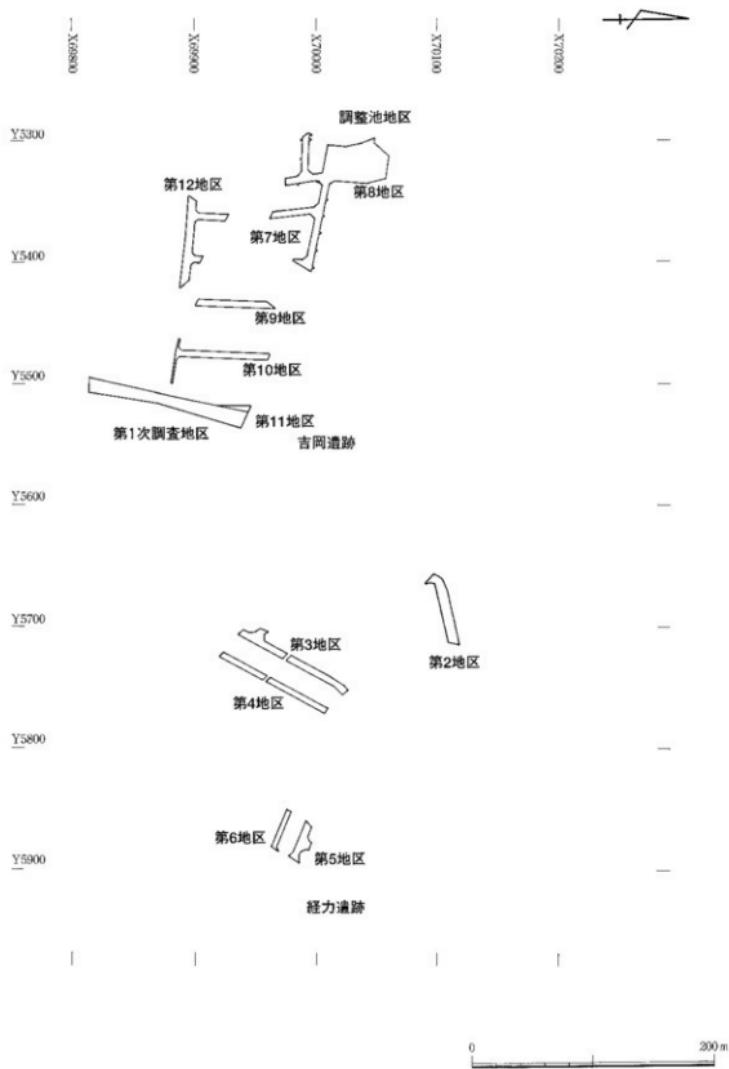
II層 灰褐色土層 粘性、締まりともに良好。

III層 黒色土層 粘性、締まりともに良好。中世古代縄文遺物包含層。

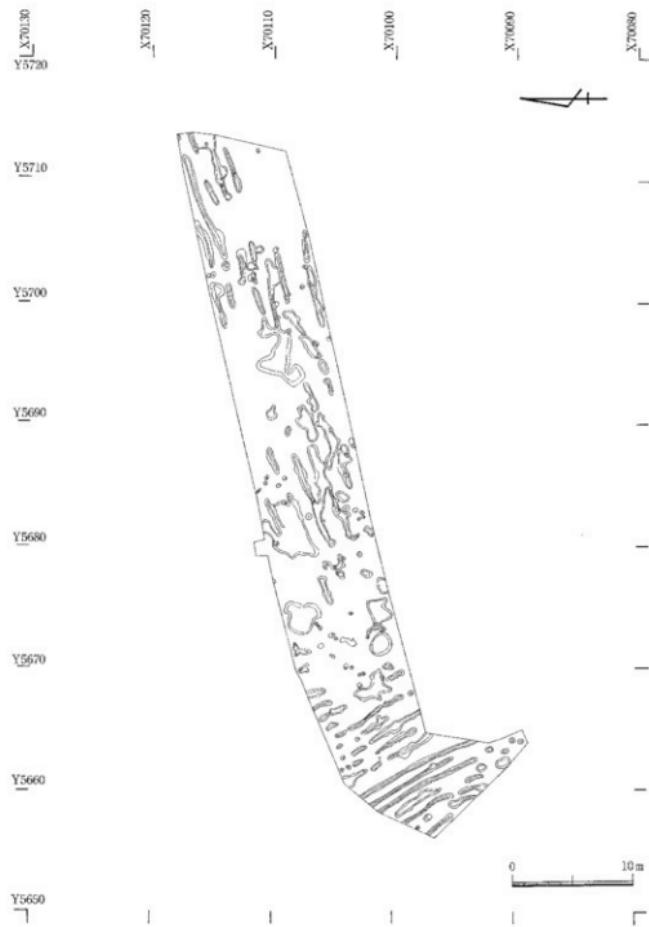
IV層 黄褐色土 粘性、締まりともに良好。中世縄文確認面。



第4図 吉岡遺跡・経力遺跡位置図



第5図 調査区配置図



III 経力遺跡

はじめに

経力遺跡は、第2地区から第6地区までの計5地区において調査が行われているが、各地区間の距離や地形および遺構・遺物の関連性より第2地区、第3・4地区、第5・6地区の三地区にまとめることができ、本報告ではこの単位で取り扱う。

1 第2地区

概要

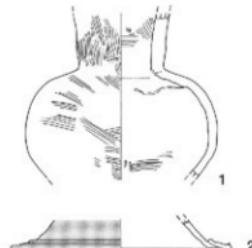
第2地区は、経力遺跡の西部に位置する。地目は水田で、地形的には本地區の西端部が一段低くなり、かつては微高地の縁辺部を成していたものと考えられる。調査では、古代の烟灰と弥生～古墳時代・古代・中世の遺物が包含層中より少量出土したにすぎない。

弥生～古墳時代

本時代では、土器が包含層中より少量出土したにすぎず、遺構は皆無である。

弥生～古墳時代遺物 第7図

1は、古墳時代前期の壺で、外面に刷毛目調整が、内面に撫でおび刷毛目調整が施されている。2は法仏式～月影式にかけての高坏の脚部と思われ、外面は磨き、内面は横撫でが施される。外面全面に赤彩が施された痕跡が存在する。



第7図 第2地区弥生～古墳時代遺物

古代

本時代では、烟灰が検出され、土師器・須恵器が出土している。

烟灰 第6図

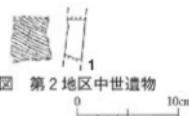
調査区全面より検出されている。幅は幅20～60cm、深さが10～20cmで、底面は凹凸が激しい。柵の距離は50～100cmとなるが、遺存状態の良好な西部では50cm前後が多い。柵の方向は2方向認められ、西部の傾斜面においては北西から南東、それ以外の平坦面では東北東から西南西となる。



第8図 第2地区古代遺物

古代遺物 第8図

1は須恵器壺の胴部片で、外面に叩き目、内面に同心円當て目が存在する。



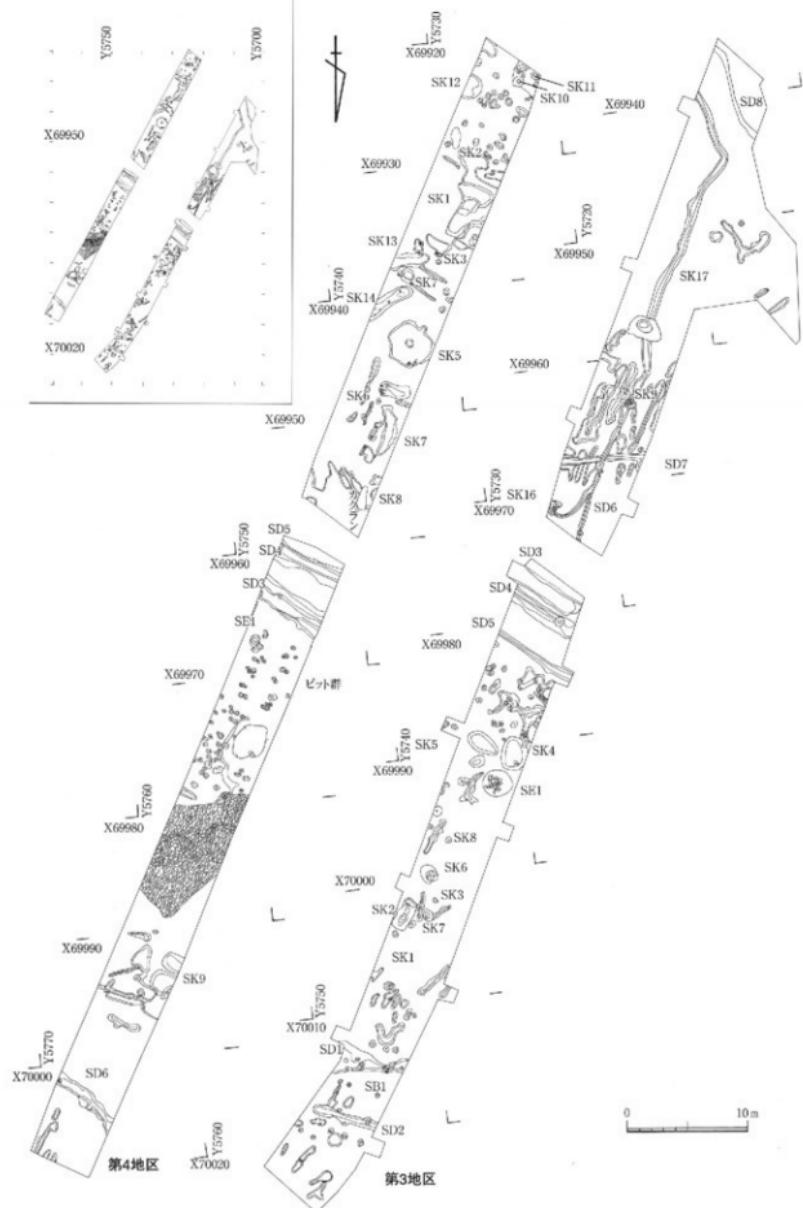
第9図 第2地区中世遺物

中世

本時代では、珠洲焼が包含層中より少量出土したにすぎず、遺構は皆無である。

中世遺物 第9図

1は珠洲焼壺の胴部片で、外面に叩き目、内面に無文當て目が施される。



第10図 第3・4地区全体図

2 第3・4地区

概要

第3・4地区は、経力遺跡の南部に位置する。地目は水田で、地形的には第3地区の西方が一段低くなり、ほぼ南北方向に走る低い崖が存在する。この崖は第3地区の南端部で接し、ここより南東方向へと屈曲し走行する。また、調査より第3・4地区の北部には浅い窪地がほぼ東西方向に走向することが確認されている。

以上から第3・4地区は舌状形の微高地に位置していたものと推定される。調査では、弥生・古代・中世の遺構・遺物が検出・出土している。

弥生時代

本時代では、第3・4地区の南部を中心に穴群が検出されており、中央部より北側では遺構・遺物とともに希薄な分布となる。

穴

第3地区

SK1 第11図

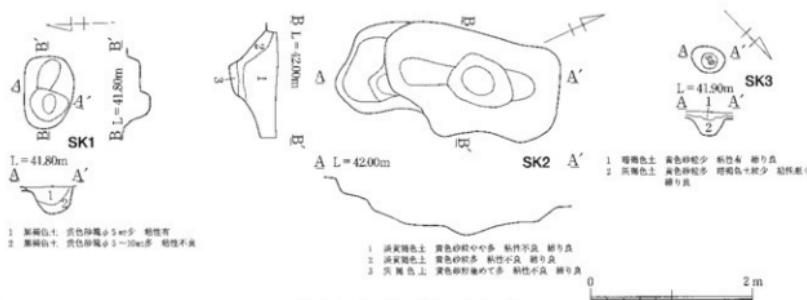
第3地区の北部に位置する。長軸長87cm×短軸長60cmの不整橢円形を呈する。深さは最深部で34cmで、底面は二段となり、西部が深くなる。遺物の出土はないが、覆土の様相より弥生時代に構築されたものと考えられる。

SK2 第11図

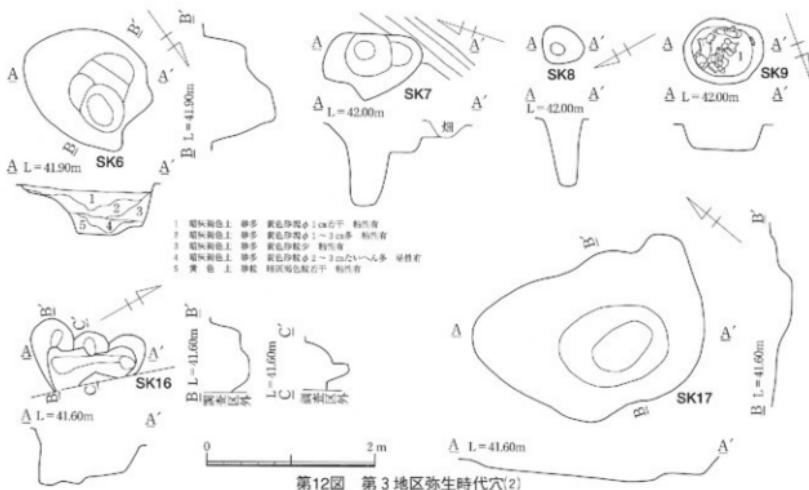
第3地区の中央部やや北よりに位置する。長軸長267cm×短軸長137cmの不整形を呈する。深さは最深部で63cmで、底面は中央部に向かい緩やかに傾斜している。遺物は少量の土器が覆土中より出土しており、それにより弥生時代に構築されたものと考えられる。

SK3 第11図

第3地区的中央部やや北よりに位置する。長軸長40cm×短軸長31cmの橢円形を呈する。深さは最深部で20cmで、断面形は掘り鉢状を呈する。遺物は少量の土器が覆土中より出土しており、それにより弥生時代に構築されたものと考えられる。



第11図 第3地区弥生時代穴(1)



第12図 第3地区弥生時代穴(2)

S K 6 第12図

第3地区的中央部やや北よりに位置する。長軸長157cm×短軸長128cmの不整形を呈する。深さは最深部で80cmで、壁は傾斜がきついが、東壁の中位と北壁の下位にテラス状の平坦面を有し、底面には凹凸が見られる。遺物の出土は無いが、覆土の様相より弥生時代に構築されたものと考えられる。

S K 7 第12図

第3地区的中央部やや北よりに位置する。上面で長軸長117cm×短軸長82cmの卵形を呈し、中位以下は長軸長58cm×短軸長54cmの不整円形を呈する。深さは最深部で95cmで、断面は柱穴状となる。遺物の出土は無いが、覆土の様相より弥生時代に構築されたものと考えられる。

S K 8 第12図

第3地区的中央部やや北よりに位置する。長軸長50cm×短軸長44cmの卵形を呈する。深さは最深部で79cmで、断面は柱穴状となる。遺物の出土は無いが、覆土の様相より弥生時代に構築されたものと考えられる。

S K 9 第12図 P L 6 - 1

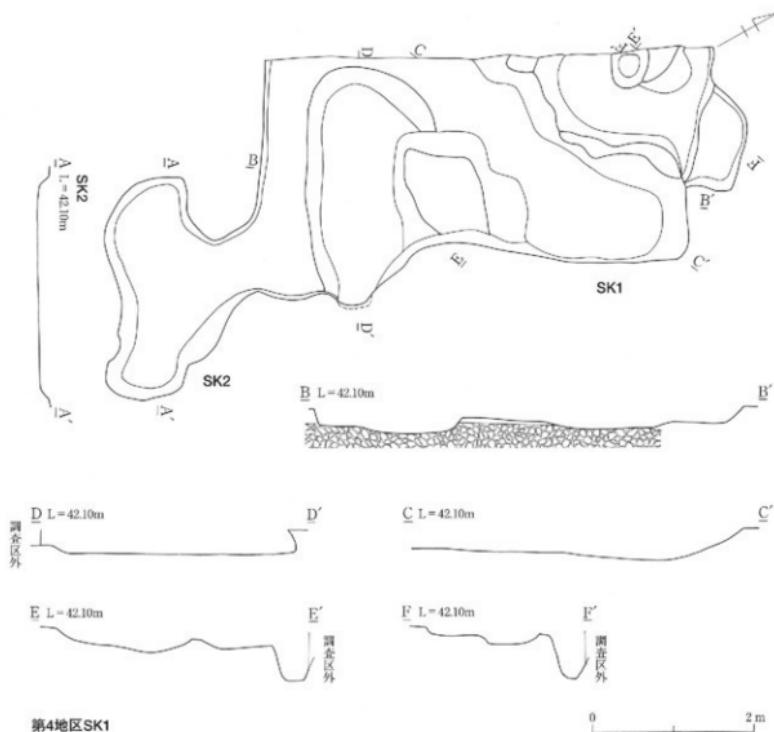
第3地区的南部に位置する。長軸長95cm×短軸長77cmの楕円形を呈する。深さは30cmで、断面形は鍋底状を呈する。遺物は覆土中位から底面にかけて壺の破片が乱雑な状態で出土し、その多くは接合している。遺物より弥生時代中期に構築されたものと考えられる。

S K 16 第12図

第3地区的南部の中央よりに位置する。長軸長130cm×短軸長84cmの不整形を呈する。深さは73cmで、壁はほぼ直立し、底面は凹凸が著しく、南西部へと深くなる。遺物の出土は無いが、覆土の様相より弥生時代に構築されたものと考えられる。

S K 17 第12図 P L 6 - 2

第3地区的南部に位置する。長軸長270cm×短軸長181cmの不整形を呈する。深さは33cmで、断面形は皿状を呈する。遺物は穴西部の覆土中より鉢が出土している。弥生時代中期に構築されたと考えられる。



第13図 第4地区弥生時代穴(1)

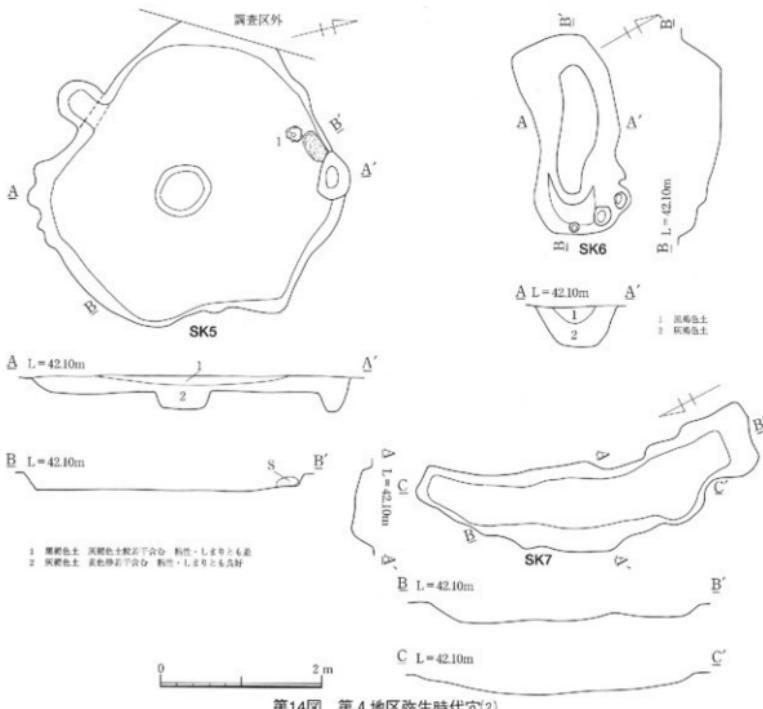
第4地区

S K 1 第13図

第4地区的南部に位置する。穴西部は調査区外に延びるため全体像は不明である。確認できる規模は長軸長594cm×短軸長320cm以上となる。平面形状は不整形で、複数の穴の重複した状況と思われる。深さは10~60cmと浅く、底面は凹凸が著しい。穴の南半部は疊層を掘りこみ、北半部は黄色砂層を掘りこんでいる。南部でSK2と重複するが、両者の新旧関係は不明である。遺物は覆土中より少量の弥生式土器細片が出土している。遺物より弥生時代に構築されたものと考えられる。

S K 2 第13図

第4地区的南部に位置する。長軸長270cm×短軸長148cmの不整形を呈する。深さは12cmと浅く、鍋底状断面となる。穴は疊層を掘りこんでいる。北部でSK1と重複するが、両者の新旧関係は不明である。遺物は覆土中より少量の弥生式土器片が出土している。遺物より弥生時代に構築されたものと考えられる。



第14図 第4地区弥生時代穴(2)

S K 5 第14図 P L 6 - 3

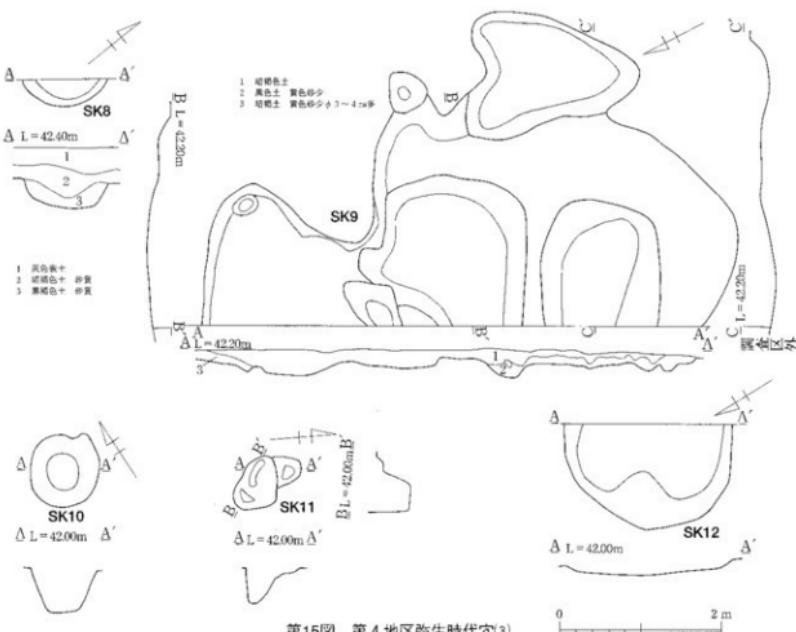
第4地区的南部に位置する。長軸長390cm×短軸長350cmの五角形を呈する。壁は高さ20cmで直立気味に立ち上がる部分が多いが、一部はやや緩やかな傾斜で立ち上がる。底面は平坦で、水平となる。穴内の中央部と北部縁際には小穴が存在する。中央部の小穴は長軸長66cm×短軸長61cmのはば円形を呈し、深さ24cmの鍋底状断面となる。北部縁際の小穴は長軸長58cm×短軸長38cmの楕円形を呈し、断面形は深さ26cmのU字状となる。遺物は穴北部の底面より甕底部と少量の土器片が出土している。また、北部の小穴に西に接して底面上より河原石が検出されている。遺物より弥生時代に構築されたものと考えられ、形状等から住居跡の可能性も指摘できる。

S K 6 第14図 P L 6 - 4

第4地区的南部に位置する。長軸長246cm×短軸長116cmの不整形を呈し、全体にやや弧を描いている。深さは最深部で49cmを測る。壁は傾斜して立ち上がり、底面は中央部に向かい浅く窪む。遺物の出土は無いが、覆土の様相より弥生時代に構築されたものと考えられる。

S K 7 第14図 P L 6 - 5

第4地区的南部に位置する。長軸長423cm×短軸長109cmの規模を有し、全体にやや弧を描いた三日月状の平面となる。深さは最深部で25cmを測り、横断面は中華鍋状となり、縦断面は皿状となる。遺物の出土は無いが、覆土の様相より弥生時代に構築されたものと考えられる。



第15図 第4地区弥生時代穴(3)

S K 8 第15図

第4地区の南部の中央部より位置する。穴の大部分が調査区外に延びるため平面の規模・形状は不明である。深さ20cmの鍋底状断面となる。遺物の出土は無いが、覆土の様相より弥生時代に構築されたものと考えられる。

S K 9 第15図

第4地区の北部に位置する。穴西部は調査区外に延びるため全体像は不明である。確認できる規模は長軸長665cm × 短軸長385cm以上となる。平面形状は不整形で、複数の穴の重複した状況と思われる。深さは7~36cmと浅く、底面は凹凸が著しい。遺物の出土は無いが、覆土の様相より弥生時代に構築されたものと考えられる。

S K 10 第15図

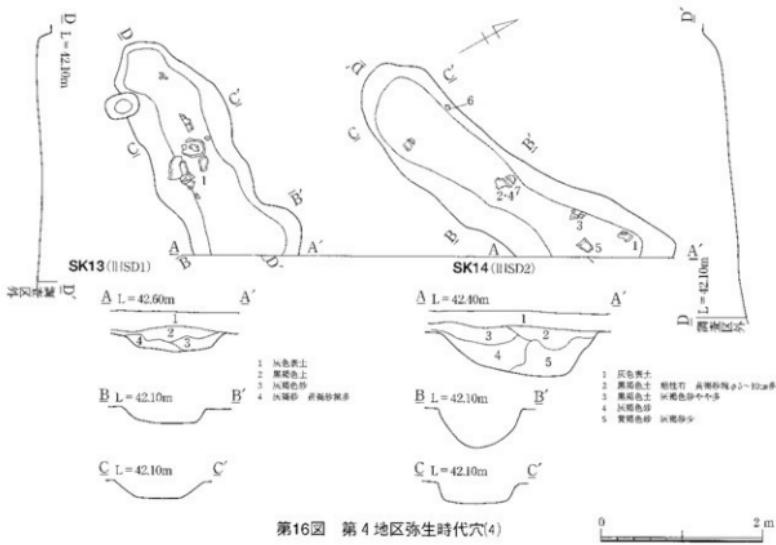
第4地区的南端部に位置する。長軸長91cm × 短軸長81cmの不整形円形を呈する。断面形は深さ55cmの鍋底状となる。遺物の出土は無いが、覆土の様相より弥生時代に構築されたものと考えられる。

S K 11 第15図

第4地区的南端部に位置する。長軸長95cm × 短軸長55cmの不整形を呈する。断面形は深さ43cmの柱穴状となる。遺物の出土は無いが、覆土の様相より弥生時代に構築されたものと考えられる。

S K 12 第15図

第4地区的南端部に位置する。穴東部が調査区外になるため規模・形状は不明である。断面形は深さ7cmの皿状となる。遺物の出土は無いが、覆土の様相より弥生時代に構築されたものと考えられる。



第16図 第4地区弥生時代穴(4)

S K13 (II SD 1) 第16図 P L 6 - 6

第4地区的南部に位置する。穴東部が調査区外となるため規模・形状で不明な点があるが、長軸長300cm以上×短軸長110cmの溝状を呈している。深さは最深部で21cmで、横断面は皿状となる。底面は東に向かい緩やかに傾斜して下がる。遺物は底面～覆土下層にかけて破損した状態で壺1個体分が出土している。遺物より弥生時代に構築されたものと考えられる。

S K14 (II SD 2) 第16図 P L 6 - 6

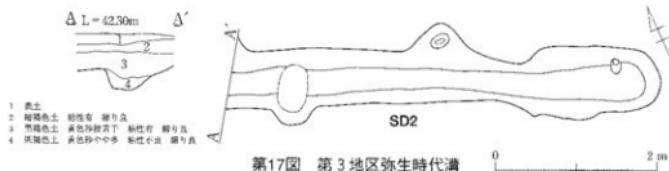
第4地区的南部に位置する。穴東部が調査区外となるため規模・形状で不明な点があるが、長軸長430cm以上×短軸長100cmの溝状を呈している。深さは最深部で53cmで、横断面はU字状となる。底面は東に向かい緩やかに傾斜して下がる。遺物は底面～覆土下層にかけて土器が出土している。遺物より弥生時代に構築されたものと考えられる。

溝

第3地区

S D 2 第17図

第3地区的北部に位置する。S B 1に切られる。溝西部が調査区外へと延びる。断面形は幅65cm×深さ25cmの逆台形となる。遺物の出土は無いが、覆土の様相より弥生時代の所産と考えられる。



第17図 第3地区弥生時代溝

弥生時代出土遺物

第3地区

S K 2 出土遺物 第18図

1は、弥生時代中期小松式の甕口縁部片である。内面は櫛状工具による絞杉状刺突文を有し、外面は刷毛目後横撫でが施されている。胎土は緻密で、色調は明橙褐色である。2は弥生式土器の甕底部片である。内面は撫でが、外面は刷毛目後撫でが施されている。胎土は礫を少量含み、色調は暗橙褐色である。

S K 3 出土遺物 第18図

1は、弥生式土器の甕底部片である。内面は刷毛目、外面は刷毛目後撫でが施されている。胎土は礫を含み、色調は黒褐色である。2は弥生時代後期の甕口縁部片である。口縁部には内外面ともに口縁部に横撫で、胴部に刷毛目が施される。胎土は礫を含み、色調は橙色である。3は壺の胴上部～頸部片である。頸部は強く屈曲する。胴部外面は条痕文が施され、胴上部に刺突文が見られる。胎土は礫を含み、色調はにぶい黄橙色である。

S K 10 出土遺物 第18図

1～3は、弥生時代中割小松式である。1は甕口縁部片である。外面は横撫で後爪形状の刺突文、内面は刷毛目後縦状工具による刻みを施す。胎土は緻密で、色調は明橙褐色である。2は甕口縁部片である。外面は口唇部に刻み、内面口縁部に櫛による刺突文を施す。胎土は緻密で、色調は明橙褐色である。3は甕である。口縁部は外反し、口唇部端部は平線で沈線状に凹む。胴部は中位に最大径を有す。外面は全体を刷毛目後胴部に磨きを施す。内面は口縁部に横撫で後櫛状工具による絞杉状の刺突文、胴部上半部に刷毛目後部分的に撫で、胴下半部に撫でを施す。外面胴部下半に煤と龍目痕が認められる。胎土は緻密で、色調は明橙褐色である。

S K 17 出土遺物 第18図

1は、弥生時代中期小松式の甕胴部片と思われる。外面は刷毛目、内面はナデを施す。胎土は緻密で、色調は明橙褐色である。2は弥生式土器の甕底部片である。上げ底となる。外面は櫛状工具による搔き取り、内面は撫でを施す。胎土は礫を含み、色調は明橙褐色である。3は弥生式土器と思われ、深鉢である。外面は磨き後、口縁部と胴中位に平行沈線文、胴上位に沈線による連弧文を施す。内面は撫で後口縁部に磨きを施す。胎土はやや緻密で、色調はにぶい黄橙色である。

第4地区

S K 1 出土遺物 第18図

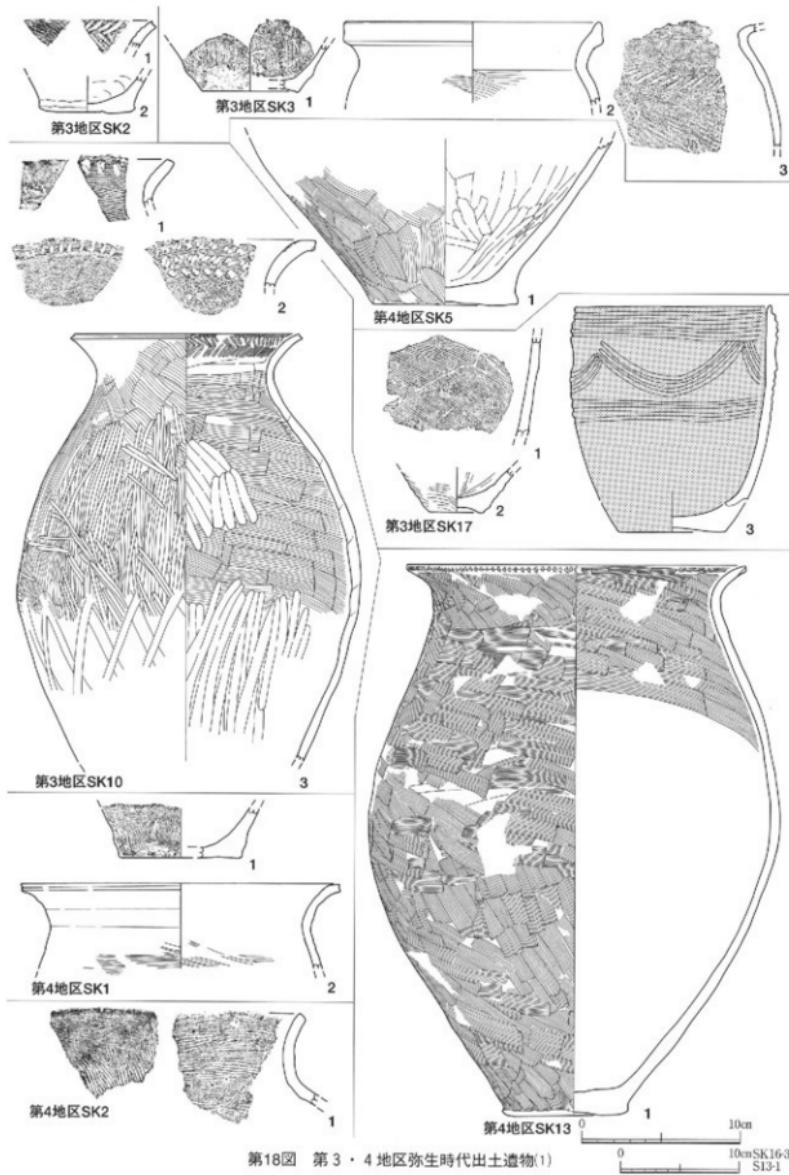
1・2は、弥生時代中期小松式と思われる。1は甕底部片である。外面は刷毛目、内面はナデを施す。胎土は礫を含み、色調はにぶい黄橙色である。2は甕口縁部片である。口縁部は外反し、口唇部は平線で沈線状に凹む。内外面ともに口縁部は横撫で、胴部は刷毛目を施す。胎土は緻密で、色調はにぶい黄橙色である。

S K 2 出土遺物 第18図

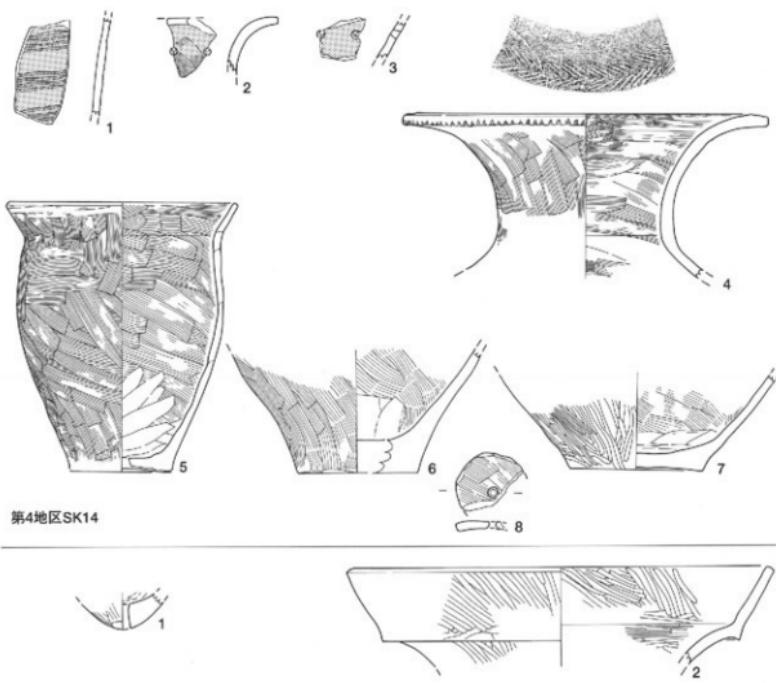
1は弥生式土器の甕口縁部片である。内外面ともに刷毛目を施す。胎土は緻密で、色調はにぶい黄橙色である。

S K 5 出土遺物 第18図

1は弥生式土器の甕底部片である。上げ底気味となる。外面は刷毛目、内面は横撫でを施す。胎土は緻密で、色調はにぶい橙色である。



第18図 第3・4地区弥生時代出土遺物(1)



第19図 第3・4地区弥生時代出土遺物(2)

S K 13出土遺物 第18図

1は、弥生時代中期小松式の壺である。口縁部は外反、胴部は中位に最大径を有し、底部は上げ底氣味となる。外面は刷毛目後、口唇部に櫛状工具による刻み目を施す。内面は胴上部～口縁部に刷毛目、胴中位以下に篦撫でを施す。底部は篦撫でを施す。胎土は緻密で、色調はにぶい橙色である。

S K 14出土遺物 第19図

1～3は弥生式土器である。1は壺頭部片である。外面に押し引き文が施される。外面に赤彩が施される。胎土には礫が含まれ、色調は黄橙色である。2・3は壺口縁部片である。口縁部は外反し、孔を有す。外面は刷毛目を施す。内外面に赤彩を施す。胎土は礫が含まれ、色調は橙褐色である。4～7は弥生時代中期小松式である。4は壺の口縁部片である。口縁部は大きく外反する。内外面刷毛目後、口唇部外面に櫛状工具による刻み目、内面口縁部上位に櫛状工具刺突による綾杉文を施す。胎土は緻密で、色調はにぶい橙色である。5は壺である。口縁部はくの字状に外反し、胴部は最大径を上位に持ち、底部は上げ底となる。外面は刷毛目後口縁上端に横ナデを施す。内面は刷毛目後胴部下端に篦撫でを施す。胎土は緻密で、色調はにぶい黄橙色である。6は壺底部片である。外面は胴部に刷毛目、底部に篦撫でを施す。内面は刷毛目後胴下端に

撫でを施す。胎土は緻密で、色調はにぶい黄橙色である。7は壺底部片である。上げ底である。外面は胴部に磨き、底部に撫でを施す。内面は胴部に刷毛目、見込みに撫でを施す。胎土は緻密で雲母を含む。色調は黄橙色である。8は土器片再利用の紡錘車である。

遺構出土品生遺物 第19図

1・2は弥生時代の土器と思われる。1は壺底部片である。外面は胴部に刷毛目、孔部周辺に籠撫でを施す。内面は籠撫でを施す。胎土は礫を含み、色調はにぶい黄橙色である。2は壺の口縁部片である。有段の口縁部となる。内外面に磨きが施される。胎土は礫を含み、色調は橙色である。

古代

本時代では、第3・4地区ともに畠址と少量の遺物が存在するにすぎない。

畠址 第10図

第3・4地区ともにほぼ全面に柵が検出されている。第3地区の南部中央寄りが比較的良好な状態で検出されているが、他は部分的に残存するだけで遺存不良である。遺存良好な部分での柵は幅20~90cm×深さ5~40cmで、柵間の距離が10~30cmとなり、北北東~南南西に走向している。

中世

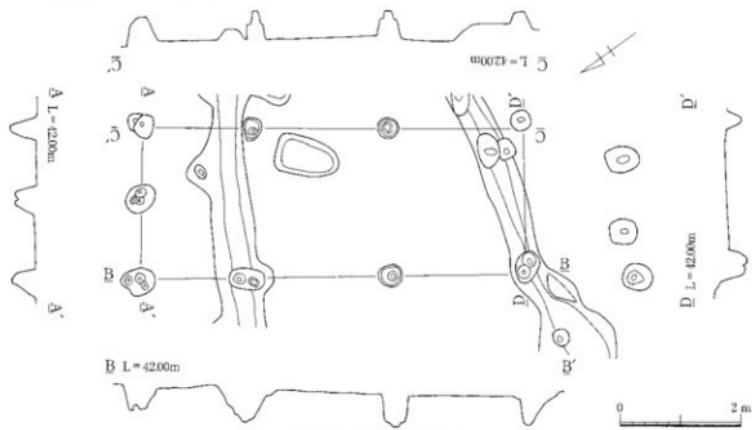
本時代では、掘立柱建物跡を中心とした集落が検出されている。

掘立柱建物跡

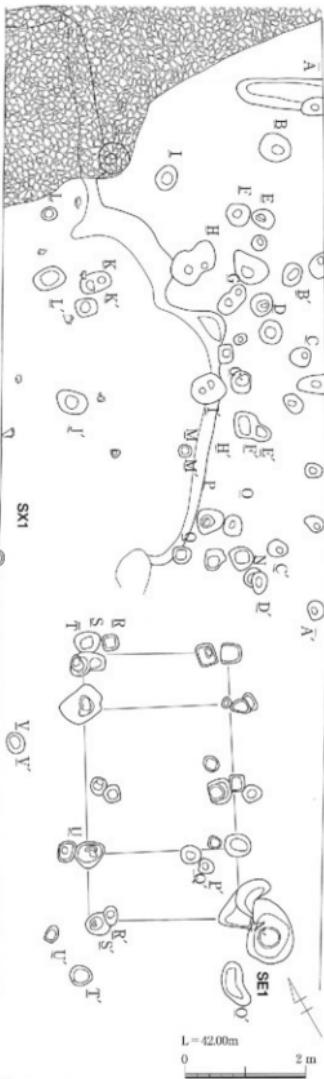
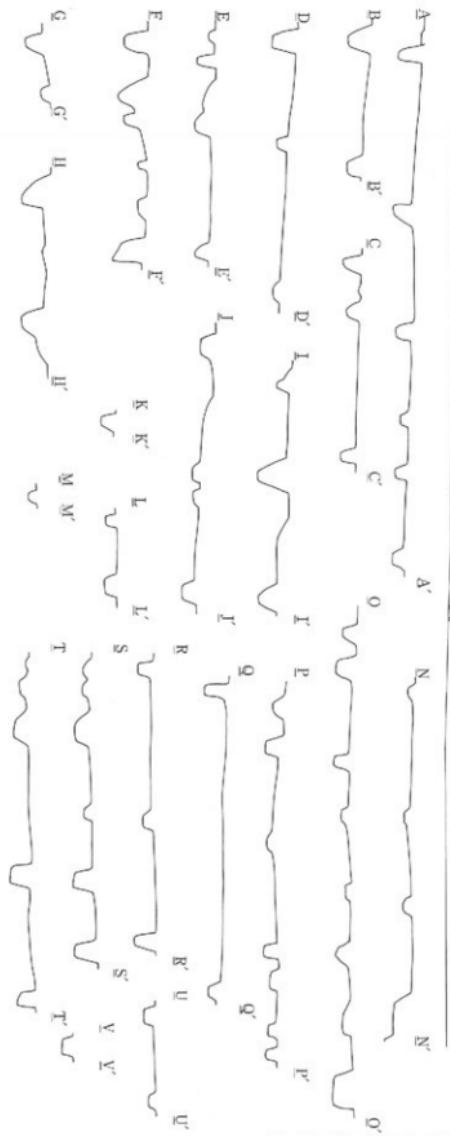
第3地区

SB1 第20図 PL 7-1

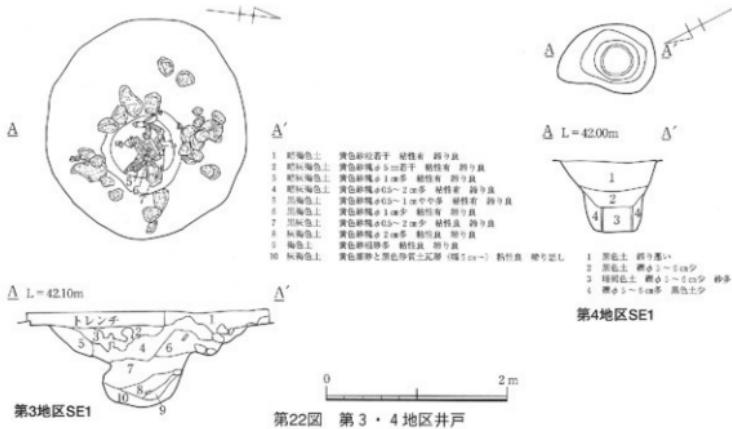
第3地区的北部に位置する。調査範囲では桁行き6.40m×梁行き2.50m以上の規模を有す1間×2間の建物跡が確認されたにすぎないが、建物自体は西側の調査区外に延びる可能性が大きい。柱間距離は桁行きが1.70m、梁行きが2.40mとなる。



第20図 第3地区SB1



第21図 第4地区ピット群・SX1



第4地区

ピット群 第21図

第4地区的中央部より柱穴が集中して検出されている。調査範囲が限定されており、かなり多くの建物跡が重複していると思われるため各建物跡を組むことができない。ピット群南部では比較的柱穴の配列が整っているが、明らかと言い難い。一部の柱穴には楚板や川原石が出土している。なお、ピット群とSE1・SX1が重複するが、新旧関係は不明である。

井戸

第3地区

S E 1 第22図 P L 7 - 3 · 4

第3地区的中央部に位置する。平面形状は上面で長軸長238cm×短軸長220cmの楕円形を呈し、中位より下部では径94cmの円形となる。断面形状は深さ90cmの漏斗状を呈す。井戸上部は黄色砂層を皿状に掘り込み、中位以下は自然縞層を円筒状に掘り込んでいる。井戸上位の皿状部では石組が部分的に残存しており、本来は地表面まで石組が成されていたと推定される。遺物は覆土中より珠洲焼・八尾焼・砥石・箸・加工木材が出土している。箸は底面中央より1膳が挿えて置かれた状態で出土している。

第4地区

S E 1 第22図 P L 7 - 2

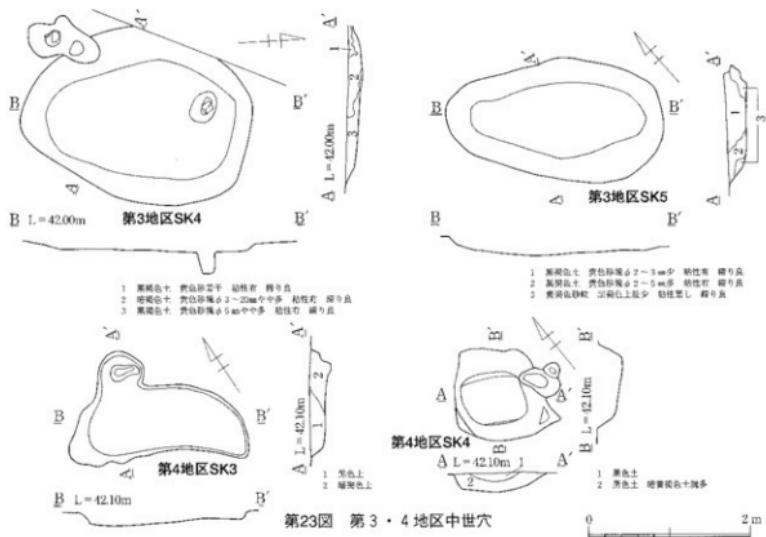
第4地区的中央部に位置する。掘り方を含めた平面形状は上面で長軸長110cm×短軸長76cmの不整形を呈し、下面では径43cmの円形となる。断面形状は深さ76cmの漏斗状を呈す。底面の中央部には底を抜いた曲物が設置され、その外方を砂利により裹出し、固定している。遺物は曲物だけである。

穴

第3地区

S K 4 第23図

第3地区的中央部に位置する。長軸長281cm×短軸長224cmの卵形を呈し、深さ20cmの皿状断面となる。底面の北部に長軸長39cm×短軸長28cmの楕円形を呈し、深さ25cmの小ピットが存在する。遺物は覆土中より八尾



焼が出土している。

S K 5 第23図

第3地区の中央部に位置する。長軸長266cm×短軸長154cmの卵形を呈し、深さ23cmの皿状断面となる。遺物の出土は皆無であるが、覆土の様相より中世の所産と考えられる。

第4地区

S K 3 第23図

第4地区の南部に位置する。長軸長222cm×短軸長130cmの不整形を呈し、深さ27cmの鍋底状断面となる。遺物の出土は皆無であるが、覆土の様相より中世の所産と考えられる。

S K 4 第23図

第4地区的南部に位置する。長軸長113cm×短軸長111cmの不整長方形を呈し、深さ30cmの鍋底状断面となる。遺物の出土は皆無であるが、覆土の様相より中世の所産と考えられる。

溝

第3地区

S D 1 第10・24図

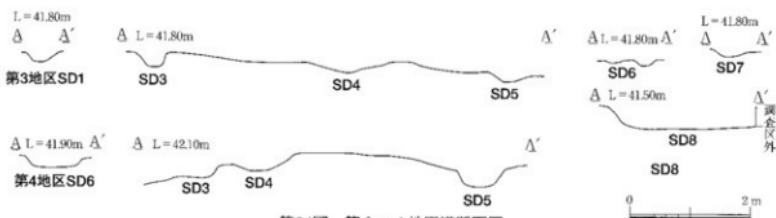
第3地区的北部に位置し、ほぼ東西方向に向かう。断面形は幅50cm×深さ15cmのU字状形を呈する。遺物の出土は皆無であるが、覆土の様相より中世の所産と考えられる。

S D 3 第10・24図

第3地区的中央部に位置し、西北西～東南東方向に向かう。断面形は幅50cm×深さ25cmの逆台形を呈する。遺物の出土は皆無であるが、覆土の様相より中世の所産と考えられる。

S D 4 第10・24図

第3地区的中央部に位置し、西北西～東南東方向に向かう。断面形は幅130cm×深さ18cmの皿状を呈する。



第24図 第3・4地区溝断面図

遺物は覆土より珠洲焼が出土している。中世の所産と考えられる。

S D 5 第10・24図

第3地区の中央部に位置し、西北西～東南東方向に走向する。溝南側は擾乱により不明である。幅220cm以上×深さ30cmとなり、底面が二段となることから2本の溝の重複の可能性がある。遺物は覆土より珠洲焼が出土している。中世の所産と考えられる。

S D 6 第10・24図

第3地区的南部半部を北北東～南南西方向にほぼ直線的に走向し、南西端で南方向に屈曲し、北東部で東へと分岐する溝とつながっている。断面形は幅32cm×深さ10cmの皿状となる。遺物の出土は無いが、覆土の様相より中世の所産と考えられる。S D 7・古代畑を切る。

S D 7 第10・24図

第3地区的南部中央寄りをほぼ東西方向を直線的に走向する。断面形は幅50cm×深さ15cmの皿状となる。遺物の出土は無いが、覆土の様相より中世の所産と考えられる。S D 6に切られ、古代畑を切る。

S D 8 第10・24図

第3地区的南端を北西～南東方向に走向する。溝の一部が検出されたにすぎず、遺構の全貌は不明である。壁は急な傾斜で立ち上がり、高さ30cmとなる。底面はほぼ水平で、半坦である。遺物の出土は無いが、覆土の様相より近世以降の所産と考えられる。

第4地区

S D 3 第10・24図

第4地区的中央部を西北西～東南東に走向する。第3地区 S D 5と連結すると推定される。南部が擾乱のため全体の規模・形状は不明だが、幅125cm以上×深さ35cm以上となる。セクションを見ると中世溝を近世の溝が大きく切っている状況で、中世溝の残りは不良である。

S D 4 第10・24図

第4地区的中央部を西北西～東南東に走向する。第3地区 S D 4と連結すると推定される。断面形は幅98cm×深さ29cmの皿状となる。覆土の様相より中世の所産と思われる。

S D 5 第10・24図

第4地区的中央部を西北西～東南東に走向する。第3地区 S D 3と連結すると推定される。断面形は幅78cm×深さ29cmの逆台形となる。遺物は覆土上部より珠洲焼片口片が出土している。覆土の様相より中世の所産と思われる。

S D 6 第10・24図

第4地区的北部を北西～南東に蛇行しながら走向する。第3地区 S D 2と連結すると推定される。断面形は幅94cm×深さ19cmの鍋底状となる。覆土の様相より中世の所産と思われる。

性格不明遺構

第4地区

S X 1 第21図

第4地区の中央部に位置する。ピット群と重なるが、新旧関係は不明である。遺構の西部は調査区外となるため全貌は不明であるが、長軸長930cm以上×短軸長360cm以上の不整形を呈する。壁はほぼ直立し、北部では礫層、東部では黄色砂層となり、南部においては消失している。底面はほぼ平坦で、北部で礫層、その他が黄色砂層となる。覆土中には多量の礫が存在し、人為的に投げこまれたと考えられる。遺物は珠洲焼・八尾焼・かわらけ・青磁が出上している。本遺構は中世の所産である。

中世出土遺物

掘立柱建物跡

第4地区

ピット群出土遺物 第25図

1は、珠洲焼甕脛部片である。外面は綾杉状叩きが施される。胎土は礫を含み、色調は灰色である。

井戸

第3地区

S E 1 出土遺物 第25図

1は、珠洲焼壺の口縁部片である。胎土は礫を含み、色調は灰色である。2は珠洲焼片口の口縁部片である。胎土は礫を含み、色調は灰色である。3は八尾焼甕の脣部片である。礫を含み、色調は赤橙色である。

4は流紋岩製の砥石である。5・6は箸で、井戸底より並んで出土している。檜製である。7は曲物の底である。クレ底で、檜製である。

第4地区

S E 1 出土遺物 第25図

1は、曲物の側板である。檜皮紐留めと思われるが、孔のみで、紐は消失している。内面に野引線が見られる。

土坑

第3地区

S K 4 出土遺物 第25図

1・2は、八尾焼壺である。胎土は礫を多く含み、色調は赤橙色である。

溝

第3地区

S D 4 出土遺物 第25図

1は珠洲焼の甕脣部片である。外面は綾杉状の叩き目、内面は撫文當て目を施す。胎土は黒色粒を含み、色調は灰色である。

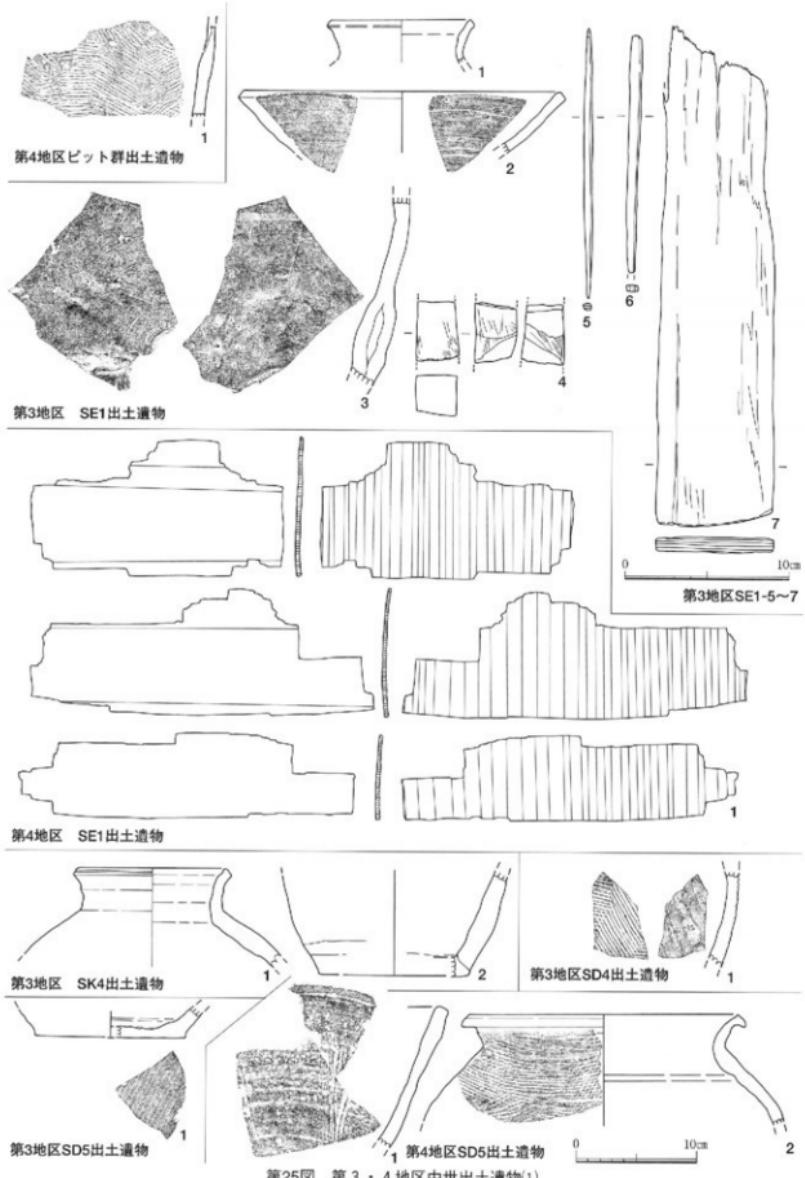
S D 5 出土遺物 第25図

1は珠洲焼の壺底部片である。底部は静止糸切りである。胎土は礫を含み、色調は灰色である。

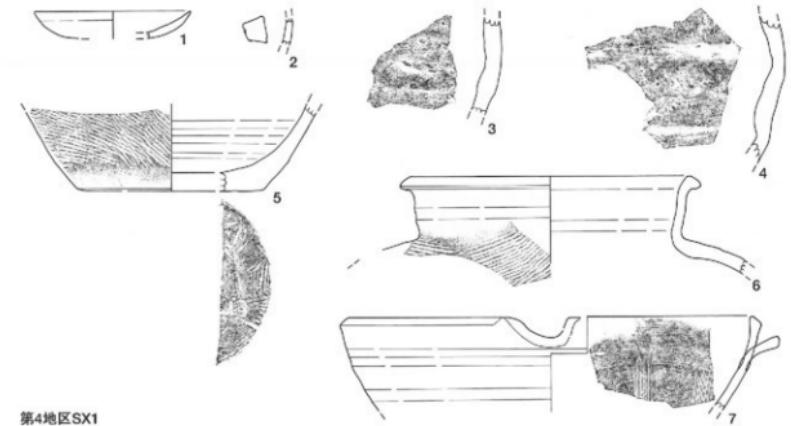
第4地区

S D 5 出土遺物 第25図

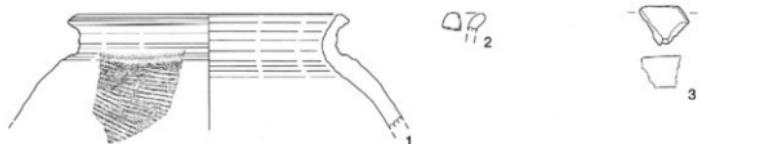
1は、珠洲焼片口である。内面には粗い卸目が見られる。胎土は礫を含み、色調は灰白色である。2は珠



第25図 第3・4地区中世出土遺物(1)



第4地区SX1



第3地区遺構外中世遺物



第4地区遺構外中世遺物

第26図 第3・4地区中世出土遺物(2)

0 10cm

洲焼壺である。外面は綾杉状の叩き目を施す。胎土は礫を多く、白色針状物を含む。色調は灰色である。

性格不明遺構

第4地区

S X 1 出土遺物 第26図

1は、白かわらけである。口縁部は横撫でを施す。色調は淡黄橙色である。2は青磁碗の胴部片である。3・4は八尾焼胴部片である。礫を多く含み、赤橙色を呈す。5は珠洲焼片口である。底部は静止糸切りである。礫を含み、灰色を呈す。6は珠洲焼壺である。外面は叩き目、内面は無文當て目を施す。礫を含み、灰色を呈す。7は珠洲焼片口である。白色針状物を含み、灰色を呈す。

遺構外中世遺物 第26図

第3地区

1は珠洲焼壺である。外面は叩き目、内面は無文當て目を施す。礫を含み、灰黒色を呈す。2は青磁碗?である。口縁部は外反する。3は流紋岩製砥石である。

第4地区

1は、白かわらけである。口縁部は横撫でを施す。2は八尾焼窯の口縁部片である。3は龍泉窯系青磁碗I~5類で、鍋蓮弁文碗である。4は龍泉窯系青磁碗I類の底部片で、墨付から内側は露胎となる。5・6は白磁皿II類で、口縁端部が口禿となる。

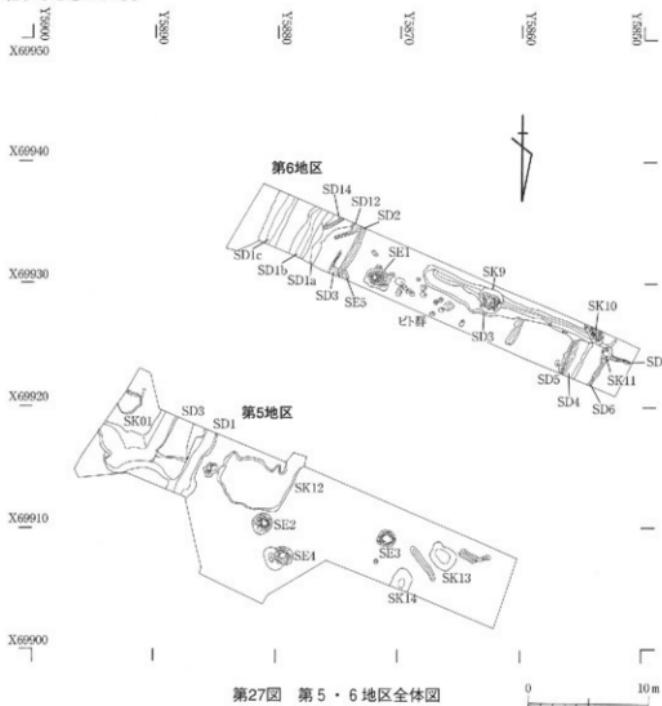
3 第5・6地区

概要

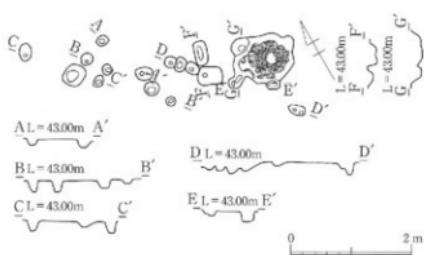
第5・6地区は経力遺跡の東端に位置する。本地区はほぼ平坦と言えるが、僅かながら南西方向に向かい海拔が低くなる傾向が見られる。遺構確認面は第5地区が疊層～黄色砂層上面、第6地区が黄色砂層となる。調査では中世の井戸5基・ピット群・穴6基・溝12条・性格不明遺構1基が検出されている。

中世

第5・6地区では井戸・溝が検出されており、遺構等の検出状況より遺跡の中心は両地区的東方の調査区外に存在するとと思われる。



第27図 第5・6地区全体図



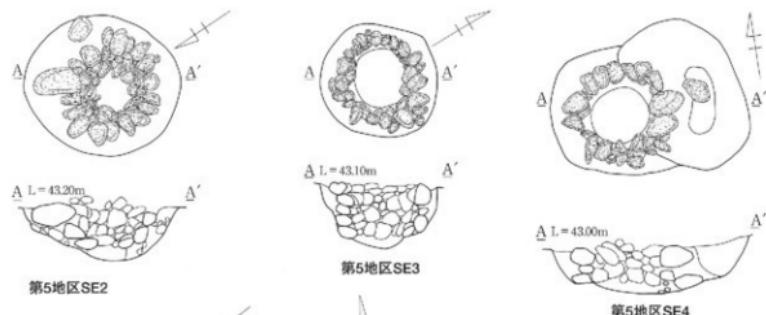
掘立柱建物跡

第6地区

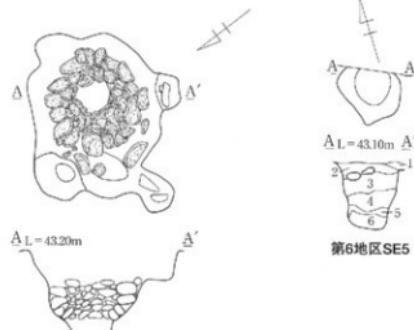
ピット群 第28図

第6地区の中央北部に位置する。柱穴と思われるピットが集中して検出されており、現状では建物跡として組み立てられないが、調査区外北方に延びる建物跡が存在することが予想される。

第28図 第6地区ピット群



第5地区SE2



第5地区SE3

第5地区SE4

第6地区SE5

1. 黄褐色土 砂（少）+ 黄色砂質土（多） ϕ 5~10mm 黑色土 ϕ 2~3mm 少 蒸生有り
2. 黄褐色土 黄色砂質 ϕ 5~30mm 少 しまりやや有り
3. 黄褐色土 黄色砂質 ϕ 5~30mm 多 しまり有り
4. 黄褐色土 黄色砂質 ϕ 20~30mm 多 硬化次 多 粘性 しまり有り
5. 黄褐色土 黄褐色土塊 ϕ 20mm 少 硬化次 少 粘性 しまり無し
6. 黄褐色土 黄褐色土塊 ϕ 2~5mm 小或多 粘性有り しまり無し

第29図 第5・6地区井戸



井戸

第5地区

S E 2 第29図 P L 7 - 5

第5地区の中央部に位置する。自然礫層を掘り込んだ石組井戸で、内側が上面で径80cm、底面で径40cm、深さ68cmとなる。石壁は河原石を用い内方下部へ傾斜するように構築されている。井戸下部の壁には石組が認められない。掘り方は長軸長192cm×短軸長175cmの楕円形を呈し、裏込めが存在する。遺物の出土は無い。

S E 3 第29図 P L 7 - 6

第5地区の中央部に位置する。自然礫層を掘り込んだ石組井戸で、内側が上面で径75cm、底面で径60cm、深さ75cmとなる。石壁は河原石を用い内方下部へやや傾斜するように構築されている。井戸下部の壁には石組が認められない。掘り方は長軸長142cm×短軸長137cmの楕円形を呈し、裏込めが存在する。遺物の出土は無い。

S E 4 第29図 P L 8 - 1

第5地区の中央部に位置する。自然礫層を掘り込んだ石組井戸で、内側が径79cm、深さ55cmとなる。石壁は河原石を用いほぼ直立気味に構築されている。掘り方は長軸長240cm×短軸長160cmの不整形を呈すが、東部は先行する穴の可能性がある。裏込めが存在する。遺物はかわらけが覆土より出土している。

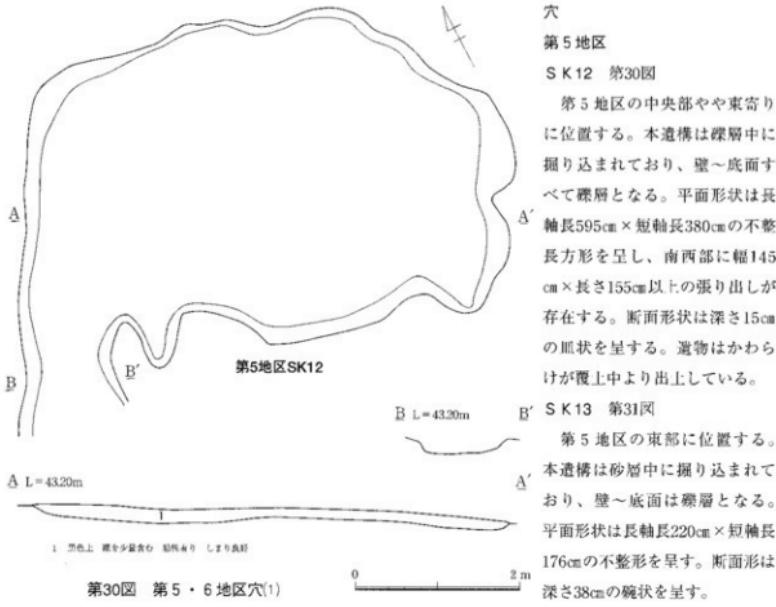
第6地区

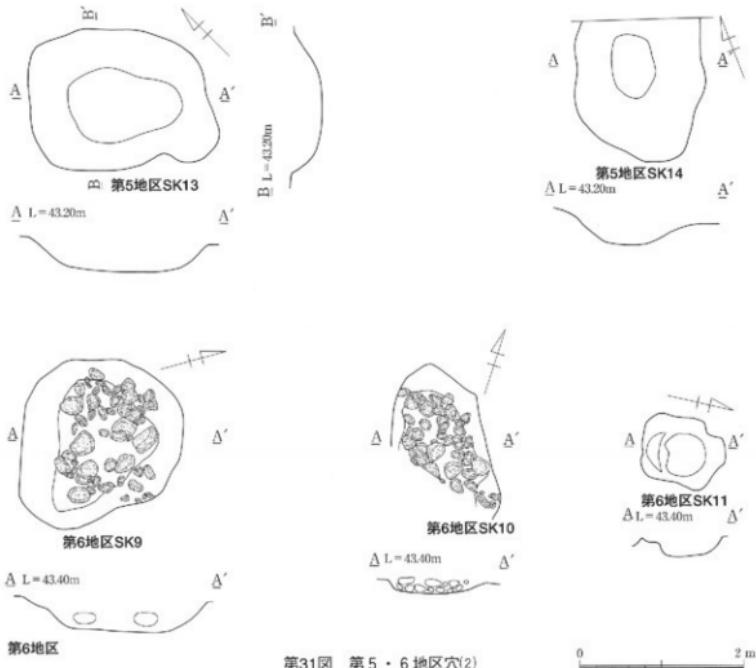
S E 1 第29図 P L 8 - 2

第6地区的中央部に位置する。黄色砂層を掘り込んだ石組井戸で、内径が上面で径80cm、底面で径40cm、深さ118cmとなる。石組は、井戸の中位に存在し、上部と下部は素掘りのままである。石壁は河原石を用い内方へ傾斜するように構築されている。掘り方は石組と同規模で、裏込めは無い。遺物はかわらけ・珠訓焼・砥石が出土しており、かわらけは覆土下層より裏返して置かれたような状態で出土している。

S E 5 第29図 P L 8 - 3

第6地区的中央部に位置する。黄色砂層を掘り込んだ素掘りの井戸で、径が上面で径73cm、底面で径45cm、深さ81cmの円筒形を呈する。遺物はかわらけ・砥石が覆土中より出土している。





第31図 第5・6地区穴(2)

遺物の出土は無い。

S K 14 第31図

第5地区の東部に位置する。穴北部が調査区外に延びるため一部不明な点があるが、平面形状は長軸長180cm以上×短軸長160cmの不整楕円形を呈すと思われる。断面形は深さ45cmの碗状を呈す。遺物の出土は無い。

第6地区

S K 9 第31図

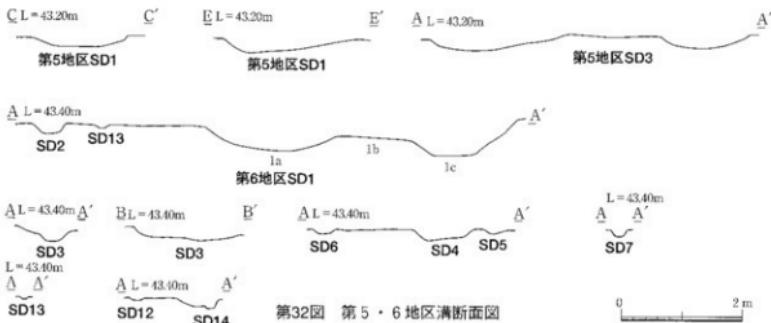
第6地区の中央部に位置する。S D 3を切る。平面形状は長軸長222cm×短軸長205cmの卵形を呈する。断面形は深さ40cmの皿状を呈す。覆土中には河原石の集石が存在する。遺物の出土は無い。

S K 10 第31図

第6地区的東部に位置する。S D 3を切る。穴の南部は調査区外に延びるため不明な点があるが、平面形状は長軸長185cm以上×短軸長115cm以上の楕円形を呈すると思われる。断面形は深さ18cmの皿状を呈す。覆土中には河原石の集石が存在する。遺物の出土は無い。

S K 11 第31図

第6地区的東部に位置する。S D 5・7と重複するが新旧不明である。平面形状は長軸長105cm×短軸長83cmの不整形を呈する。断面形は深さ25cmの鍋底状を呈す。遺物の出土は無い。



第32図 第5・6地区溝断面図

溝

第5地区

S D 1 第27・32図

第5地区的東部に位置し、北北東～南南西方向に走向する。第6地区 S D 1 と関係すると思われる。断面形は幅220cm×深さ15～28cmの皿状を呈する。遺物は覆土中よりかわらけが出土している。

S D 3 第27・32図

第5地区的東部に位置し、北北東～南南西方向に延びた後、調査区内で直角に曲がり、東南東へと延びる。第6地区 S D 1 と関係すると思われる。断面形は幅95～385cm×深さ24cmの皿状を呈する。遺物は覆土中よりかわらけの細片が出土している。

第6地区

S D 1 第27・32図

第6地区的東部に位置し、北北東～南南西方向に走向する。本溝は幅500cmの規模を有するが、横断面の形状は中央部に平坦面を持ち、その東西両側がやや深くなっていることより3条の重複を考えられ、各溝を西より S D 1 a・1 b・1 c と呼称する。S D 1 a は幅216cm×深さ40cmの皿状形を呈し、第5地区的 S D 1 と連結すると考えられる。S D 1 b は中央部のやや高い平坦面部分を底面と考えるが、規模・形状は不明で、第5地区に対応する溝は無い。S D 1 c は幅170cm×深さ60cmの逆台形を呈し、第5地区的 S D 3 と連結すると考えられる。遺物は覆土よりかわらけ・珠洲焼が出土しているが、a～cのいずれに伴うかは不明である。

S D 2 第27・32図

第6地区的東部に位置し、北北東～南南西方向に走向する。S E 5 を切る。断面形は幅54cm×深さ17cmの逆台形となる。遺物は覆土中より珠洲焼が出土している。

S D 3 第27・32図

第6地区的西半部の南側に位置し、西北西～東南東方向に走向する。S K 8・9 に切られる。幅85～165cm×深さ32cmとなり、底面が二段となることから2本の溝の重複の可能性がある。遺物は覆土よりかわらけ・天目が出土している。

S D 4 第27・32図

第6地区的南半部を北北東～南南西方向に走向する。S D 3 と重複するが新旧不明である。断面形は幅100cm×深さ18cmの鍋底状となる。遺物は覆土中より陶器片が出土している。

S D 5 第27・32図

第6地区の南半部を北北東～南南西方向に走向する。SK 11と重複するが新旧不明である。断面形は幅35cm×深さ6cmの皿状となる。遺物の出土は無い。

S D 6 第27・32図

第6地区の南半部を北北東～南南西方向に走向する。SD 3と重複するが新旧不明である。断面形は幅35cm×深さ7cmの皿状となる。遺物の出土は無い。

S D 7 第27・32図

第6地区的南半部を西北西～東南東方向に走向する。SK 11と重複するが新旧不明である。断面形は幅24cm×深さ10cmの逆台形となる。遺物の出土は無い。

S D 12 第27・32図

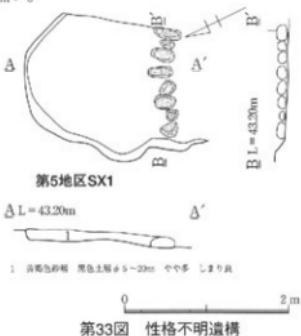
第6地区的東部を北東～南西方向に走向する。断面形は幅24cm×深さ6cmの皿状となる。遺物の出土は無い。

S D 13 第27・32図

第6地区的東部をほぼ南北方向に走向する。断面形は幅14cm×深さ2cmの皿状となる。遺物の出土は無い。

S D 14 第27・32図

第6地区的東部を北東～南西方向に走向する。断面形は幅22cm×深さ12cmの逆台形となる。遺物の出土は無い。



性格不明遺構

第5地区

S X 1 第33図 P L 8 - 4

第5地区的東端に位置する。石列と埋め戻された掘り方より構成される遺構である。石列は河原石を1列1段で直線的に外壁に当たる小口を揃えて並べており、裏側は黄色砂と黒色土の混合層により埋め込まれている。石列の南側は一段低く、平坦な前庭となる。掘り方は東西長170cm以上×南北長170cmの不整形を呈し、深さが22cmとなる。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。遺物はかわらけと不明鉄製品が前庭部分の覆土中より出土している。

出土物

井戸

第5地区

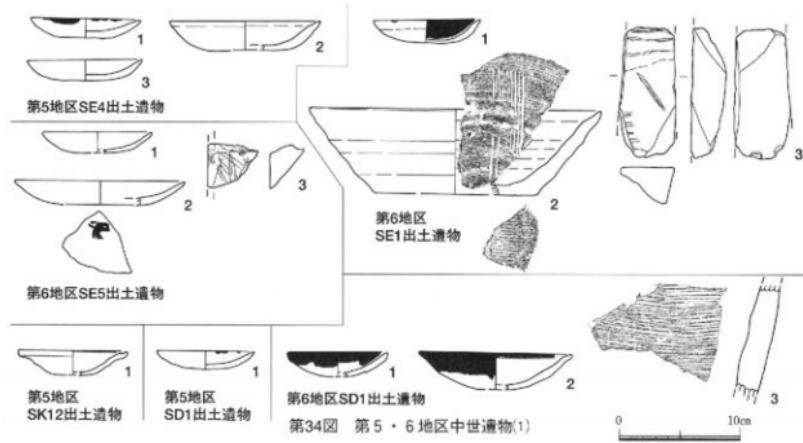
S E 4 出土遺物 第34図

1は赤かわらけである。口縁部に煤が付着する。胎土に赤色粒を含み、色調は明橙色である。2は赤かわらけである。胎土に赤色粒を含み、色調は明橙色である。3は赤かわらけである。胎土に赤色粒を含み、色調は明橙色である。

第6地区

S E 1 出土遺物 第34図

1は、白かわらけである。色調はにぶい橙褐色である。2は珠洲焼片口である。粗い鉢目を施す。胎土は



疊を多く含み、色調は灰色である。3は流紋岩製の砥石である。

S E 5出土遺物 第34図

1は、赤かわらけである。色調は淡赤橙色である。2は白かわらけである。底部に馬のような絵の墨書きがある。色調は浅黄橙色である。3は流紋岩製の砥石である。

穴

第5地区

S K 12出土遺物 第34図

1は、白かわらけである。口縁部が内彫する。色調は橙褐色である。

溝

第5地区

S D 1出土遺物 第34図

1は、赤かわらけである。赤色粒を含み、色調は淡赤橙色である。

第6地区

S D 1出土遺物 第34図

1・2は、白かわらけである。口縁部に煤が付着している。色調は淡棕褐色である。3は珠洲焼甕脛部片である。外面に叩き目、内面に無文當て目を施す。胎土に疊を含み、灰色である。



第35図 第5・6地区中世遺物(2)

S D 2 出土遺物 第35図

1は、珠洲焼甕である。外面は叩き目、内面は無文當て目を施す。胎土は煤を多く、灰色である。

S D 3 出土遺物 第35図

1は、白かわらけである。口縁部に煤が付着している。色調は淡橙褐色である。2は白かわらけである。色調は淡橙褐色である。3は赤かわらけである。胎土に赤色粒を含み、色調は淡赤橙色である。4は赤かわらけである。口縁部に煤が付着している。胎土に赤色粒を含み、色調は淡赤橙色である。5は瀬戸美濃の天口である。内外全面に鉄釉が施されている。6は流紋岩製砥石である。

S D 4 出土遺物 第35図

1は、青磁片である。丸彫りの線が施されている。2は瀬戸美濃片である。全面に灰釉が掛かる。

性格不明遺構

第5地区

S X 1 出土遺物 第35図

1は、赤かわらけである。色調は淡赤橙色である。2は不明鉄製品である。細長い板状を呈し、基部は欠損する。

遺構外中世遺物 第35図

第5地区

1は越中瀬戸の袴腰形香炉である。脚は退化し、粘土塊が貼り付けられている。口縁部内外面に鉄釉が掛かる。

IV 吉岡遺跡（第2次調査）

はじめに

吉岡遺跡は、第7地区から第12地区・調整池地区の計7地区で調査が実施されているが、各地区的関連性により第7・8地区と調整池地区、第9・10地区、第12地区的3地区にまとめて報告し、第11地区は第1次調査分に含めて報告する。

1 第7・8・調整池地区

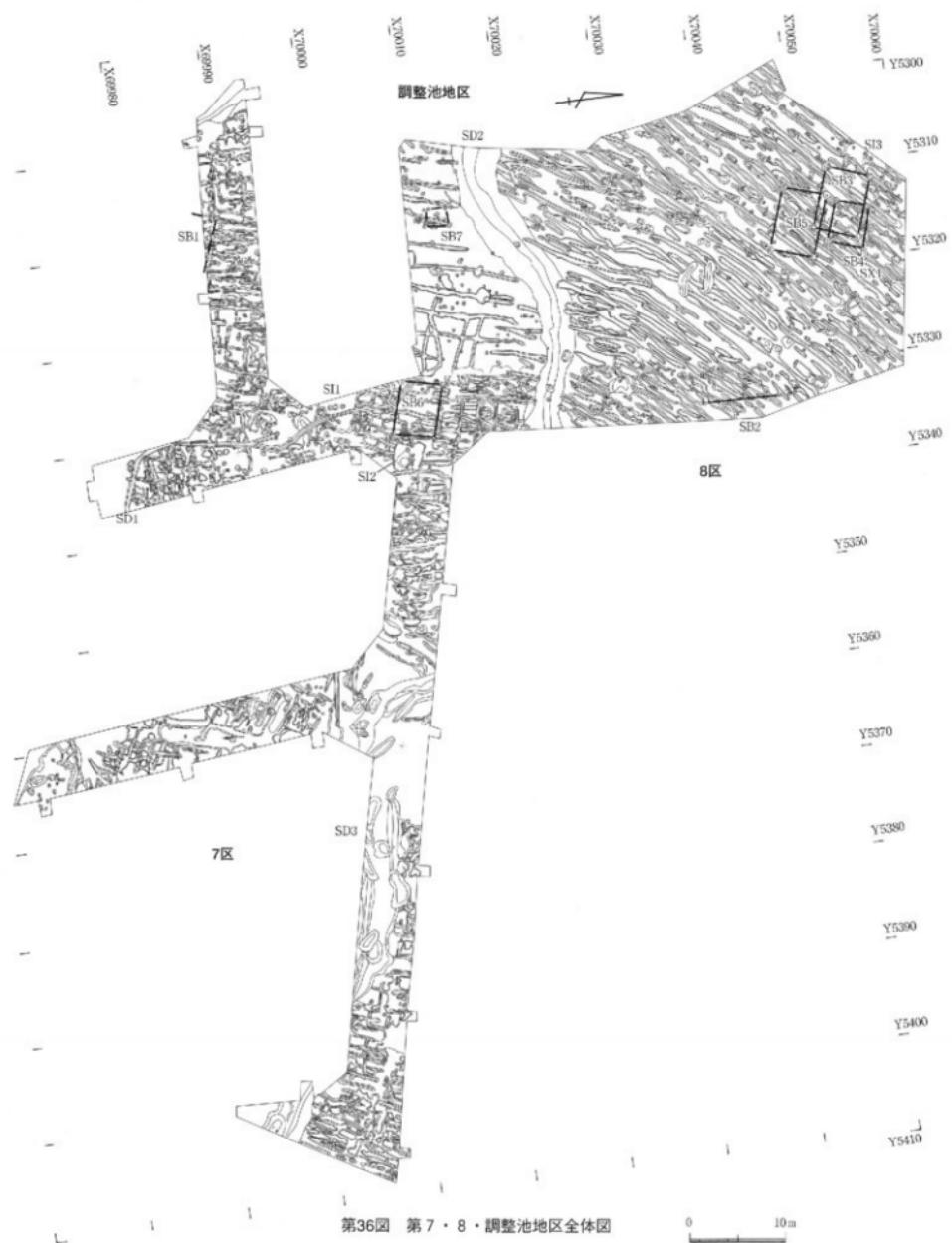
概要

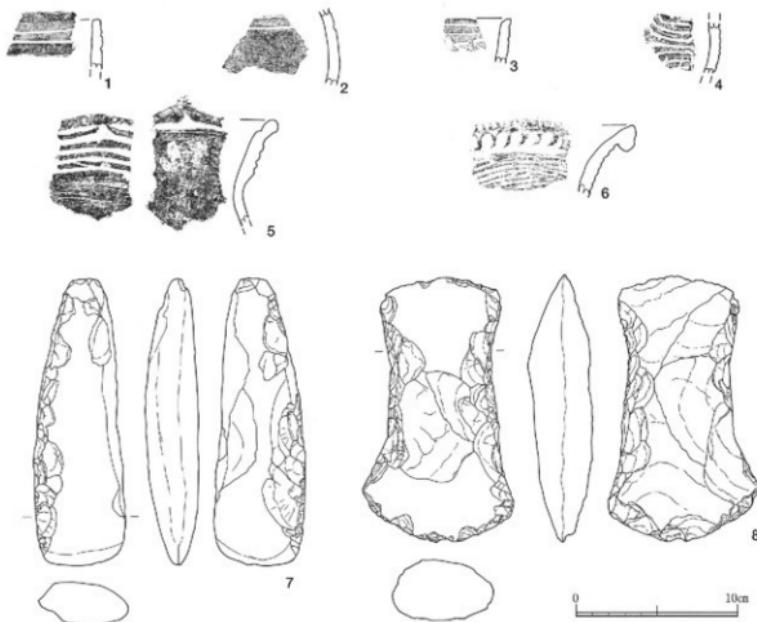
第7・8・調整池地区は経力遺跡の西端に位置する。各地区は連続した調査区であるため、遺構番号等は連番となっている。本地区は調査区の西～南部に接して低崖が存在し、調査区内東部～調査区北側に接して東南から西北に流れる近世の川跡が認められる。調査では縄文～弥生・古墳時代・古代・中近世の遺構・遺物が検出されている。

縄文末～弥生初頭

遺構の検出はなく、遺物の出土だけである。

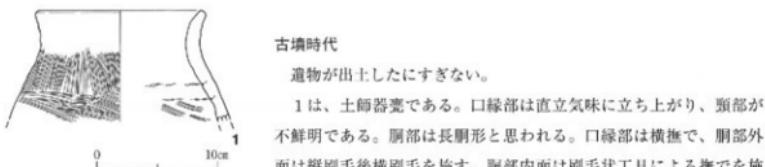
1～3は、縄文時代晚期の土器である。1・2は細縄文を沈線により区画した磨消縄文が施される。3は





第37図 第7・8・調整池地区縄文～弥生遺物

細縄文を地文とし、平行沈線文と矢作文を施す。4・5は柴山出村式の土器である。4は波状の口縁部を有し、内外面に沈線文を施す。6は口唇部外面に棒状工具による押圧突帯を貼り付け、内外面に粗い櫛状工具により櫛目文を施している。7は磨製石斧の未製品である。角閃石デイサイトで、定角式の作成途中と思われ、416gとなる。側面の剥離を終了し、敲打段階で、刃部は一部磨きが開始されている。8は打製石斧である。角閃石デイサイトで、撥形を呈し、622gとなる。



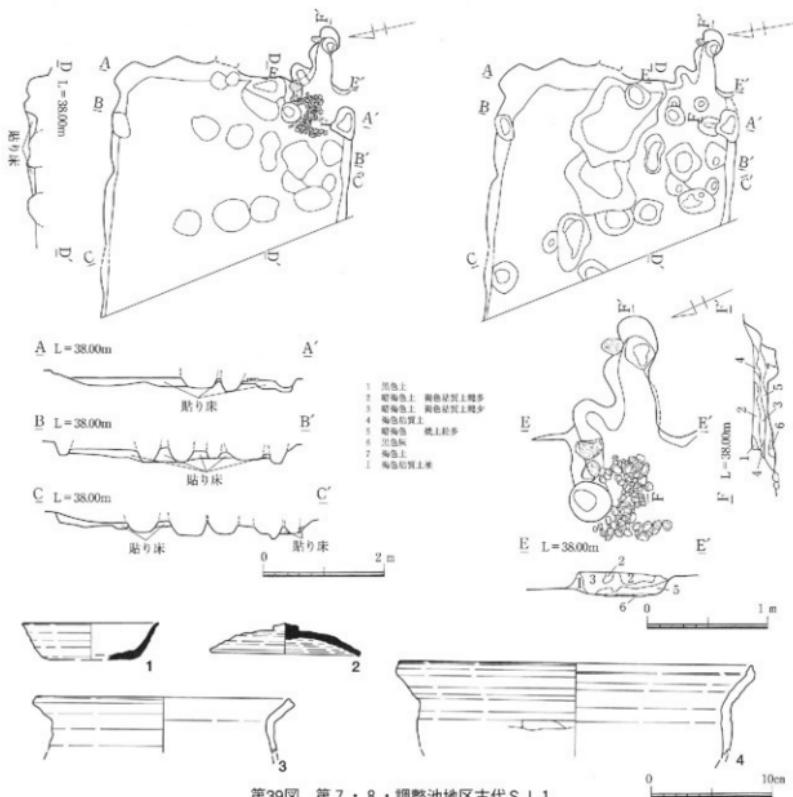
第38図 第7・8・調整池地区
古墳遺物

古代

調査区全面から烟址と調査区西部より集落跡が検出されている。

烟

調査区全面より烟の構が検出されている。構の方向は複数認められ、重複や構間の距離が狭いことから長期にわたり耕作が繰り返されたと考えられる。

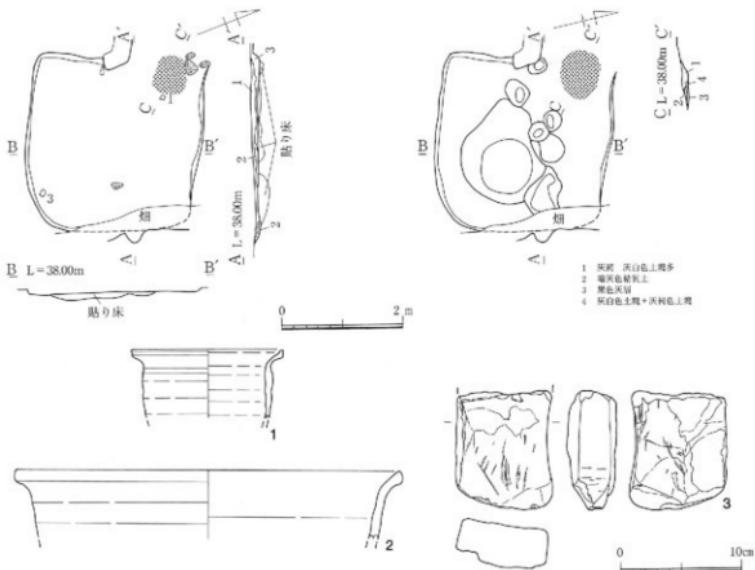


第39図 第7・8・調整池地区古代S-11

住居跡

S-11 第39図 PL 8-5-6

第7地区の西部に位置する。古代の畠址により床面がピット状に掘削されていることより本遺構が古くなる。本遺構の西部は調査区分となるため一部不明な点があるが、長軸長430cm以上×短軸長400cmの長方形を呈する。壁はほぼ直立し、最も高い部分で20cmである。床面は貼床で、竈前面～中央部がやや縮まる。貼床は黒色土塊を含む黄褐色砂により構築され、床下は中央部～南西部が深くなるように掘り込まれている。貯蔵穴は竈北脇に存在し、形状は長軸長70cm×短軸長40cmの不整形を呈し、深さが20cmとなる。竈南脇には灰捨坑が存在し、形状は長軸長55cm×短軸長40cmの不整形を呈し、深さが25cmとなり、覆土下層には灰の堆積が認められている。竈は東壁の南部に位置し、西南部の袖は煙により削平されている。袖は河原石の立石と褐色粘質土で構築されている。焚口から燃焼部前面の床面には灰層に覆われた小砾の配石が存在する。煙道部は幅35cm×長さ100cmの細長いトンネル状を呈していたと思われる。遺物は土師器・須恵器が出土している。1は須恵器蓋で、底部は回転箝切り、胎土は砾を微量に含み、色調は灰色である。2は須恵器蓋で、扁平な鉢を有し、胎土に黒色粒を含み、色調は灰色である。3は土師器窓で、ロクロ調整、色調は橙褐色である。4は土師器縁で、口縁部横撫で、胴部外側削りが施され、色調は橙褐色である。



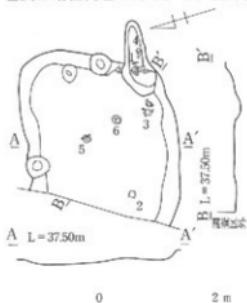
第40図 第7・8・調整池地区古代S 12

S 12 第40図 PL 9-1

第7地区の西部に位置する。古代の烟址により切られている。平面形は一辺288cmの方形を呈する。壁は遺存良好な部分で高さ10cmである。床面は貼床で、直上に黒色灰層が覆っている。貼床は黒色土塊を含む黄色砂により構築され、床下は中央部に皿状の穴が存在する。竈は西壁の北部に位置し、煙により削平されているため焼土分布が確認できただけでない。周囲には白色粘質土塊が散在していることから袖の構築材と思われる。遺物は土器等が覆土中より出土している。1は土器壺で、ロクロ調整、胎土に赤色粒を含み、色調は暗橙褐色である。2は土器鍋で、口縁部横撫で、色調は橙褐色である。3は流紋岩製瓦石である。

S 13 第41・42図 PL 9-2

第7地区的西北部に位置する。古代の烟址を切る。本造構は西部が調査区外に延びるため不明点が多いが、平面形は長軸長265cm以上×短軸長250cmの長方形を呈す。壁はほぼ直立し、高さ18cmとなる。床面は地山の黄色砂層である。竈は東壁南端に位置する。袖は竈南東部に立石が存在することより石材により構築されていたと思われる。煙道部は幅34cm×長さ75cmの細長いV字形状を呈し、緩やかに立ち上がる。燃焼部には支脚に使用されたと思われる立石が存在する。遺物は土器等が出土しており、1・4が竈内より、2・5・6が覆土中より、3が床面より出土している。1～6はロクロ土器の环で、いずれも底部は回転条切り無調整である。1は色調が明橙褐色で、内外面に黒色付着物がみられる。2・3・5は色調が明橙色となる。4は色調が明橙色で、外面に黒色付



第41図 第7・8・調整池地区
古代S 13(1)



第42図 第7・8・調整池地区古代S 1-3(2)

着物がみられる。6は大型で、底部に焼成後穿孔された孔が存在する。色調は明橙色である。

掘立柱建物跡

S B 1 第43図 P L 9 - 3

調査区の西端に位置する。重複する烟址より新しい。直線的に並ぶ柱穴が3基検出されただけで、建物跡の大部分が調査区外となるため規模・形状は不明である。柱間距離は210cmとなり、柱穴は方形基調となる。遺物の出土は無い。

S B 3 第43図 P L 9 - 4

調査区の北西部に位置する。重複する烟址より新しい。規模・形状は桁行き650cm×梁行き480cmの2間3間の建物跡で、西部の梁行きの真中の柱穴を欠いている。柱間距離は桁行きで200~240cmとなり、西辺を除く梁行きで230~240cmとなる。柱穴は平面形が楕円形~方形を呈し、深さにおいては四隅のものがその他よりも深くなる傾向が認められる。遺物の出土は無い。

S B 4 第43図 P L 9 - 4

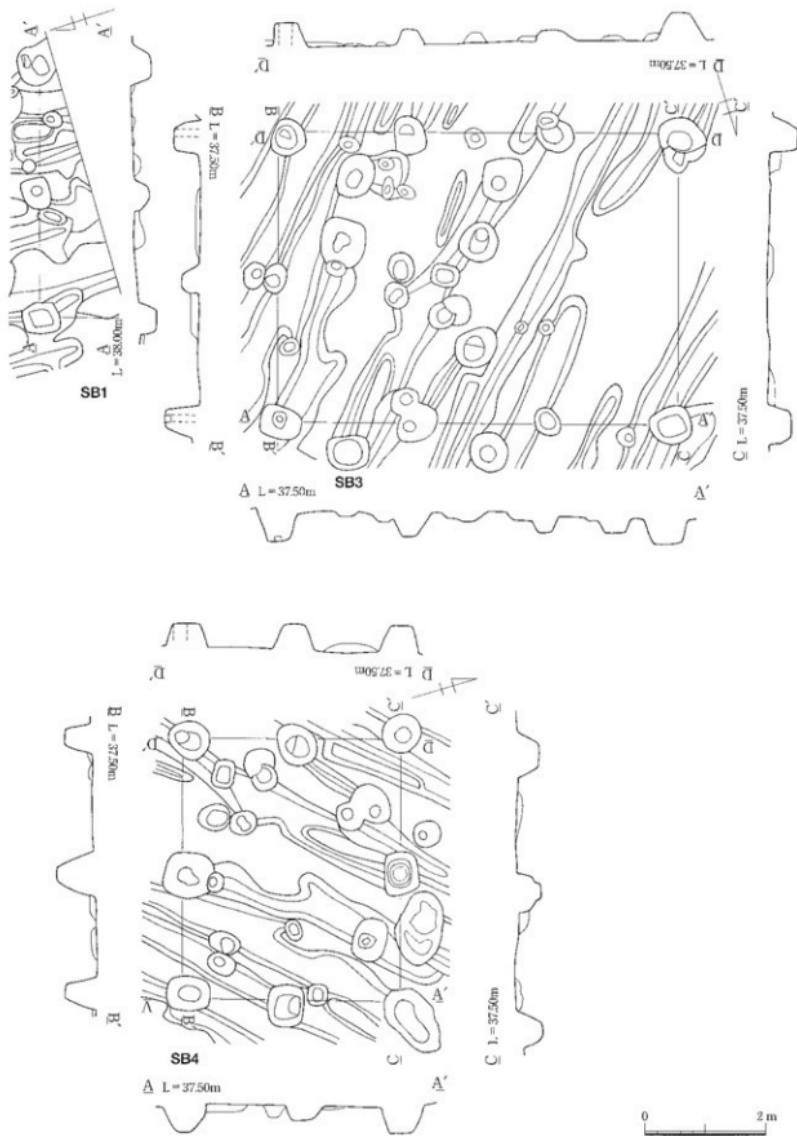
調査区の北西部に位置する。重複する烟址より新しい。規模・形状は桁行き430cm×梁行き355cmの2間2間の建物跡である。柱間距離は桁行きで200~230cmとなり、梁行きで170~185cmとなる。柱穴は平面形が円形~方形を呈する。遺物の出土は無い。

S B 5 第44図 P L 9 - 5

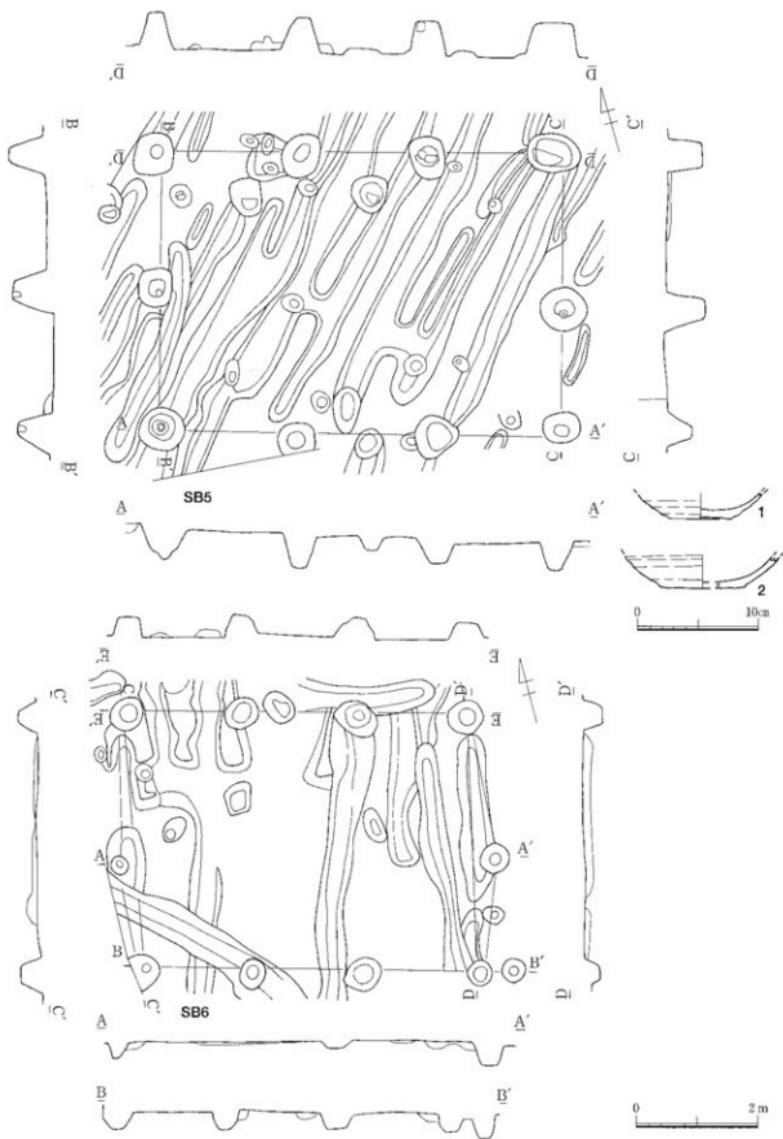
調査区の北西部に位置する。重複する烟址より新しい。規模・形状は桁行き650cm×梁行き460cmの2間3間の建物跡である。柱間距離は桁行きで200~250cmとなり、梁行きで200~230cmとなる。柱穴は平面形が円形~楕円形を呈する。遺物は東辺の中央部は柱穴内より土師器壺が出土している。

S B 6 第44図 P L 9 - 6

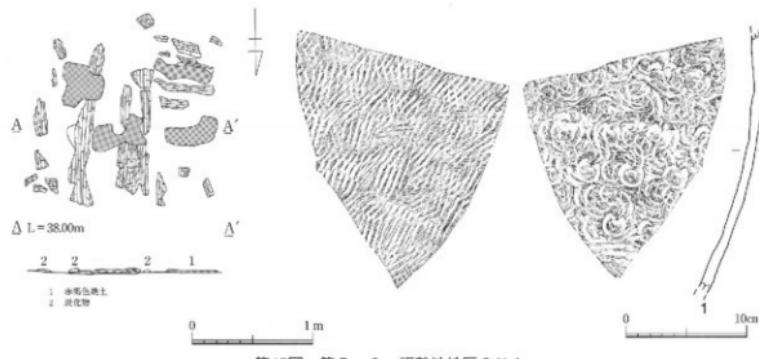
調査区の西部に位置する。重複する烟址との新旧関係は不明である。規模・形状は桁行き610cm×梁行き420cmの2間3間の建物跡で、柱穴は六角形に配置され、棟持柱が壁外にあったと思われる。柱間距離は桁行きで170~190cmとなり、梁行きで170~250cmとなる。柱穴は平面形が円形~楕円形を呈する。遺物の出土は無い。



第43図 第7・8・調整池地区古代掘立柱建物跡(1)



第44図 第7・8・調整池地区古代掘立柱建物跡(2)



第45図 第7・8・調整池地区 S X 1

S B 5 出土遺物 第44図

1・2はロクロ土器器坏で、底部は回転糸切り無調整である。色調は明赤橙色である。

性格不明遺構

S X 1 第45図

調査区の北西部に位置する。烟址・S B 4よりも新しい。炭化材と焼土が一辺150cmの方形の範囲で検出されている。炭化材は厚さ1cmと薄く、木材の焼けた表面のみ炭化・遺存している。焼土は厚さ数cmで、炭化材の直上を覆っている。遺物は焼土直上より須恵器が出土している。1は須恵器壺である。外面に叩き目、内面に同心円當て目が施される。

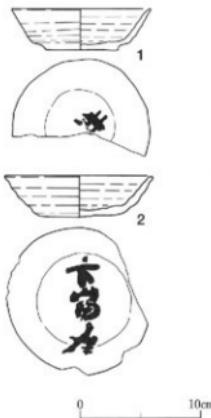
溝

S D 2 第36図

調査区西部に位置する。烟址よりも古い。断面形は幅100cm～210cm×深さ26～35cmの皿状を呈し、東北東から西南西へと蛇行する自然河川である。

遺構外古代遺物 第46図

1・2は、須恵器環である。1は回転糸切り無調整、底部に「#」の墨書がある。胎土に微量含み、色調は灰色である。2は回転へら切り無調整、底部に「下山田口」の墨書がある。胎土に釋を含み、色調は灰褐色である。



第46図 第7・8・調整池

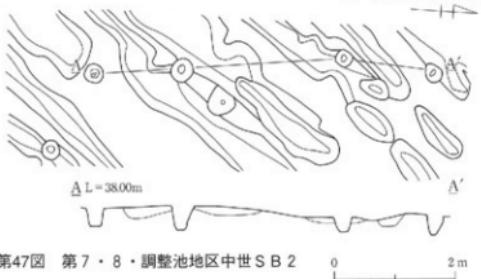
地区遺構外古代遺物

中・近世

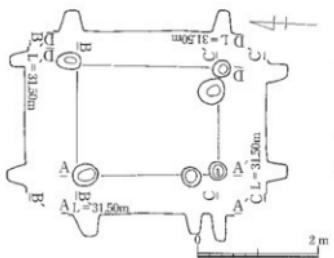
掘立柱建物跡

S B 2 第47図 P L 10-1

本地区の西部に位置する。本遺構は1列に並ぶ4本の柱が検出できただけである。柱穴は小規模で、やや乱雑な配列となり、両端が狹くなる。遺物の出土は無い。覆土の様相より



第47図 第7・8・調整池地区中世 S B 2



第48図 第7・8・調整池地区中世S B 7

S D 3 第36図

調査区の東部に位置する。東西方向を蛇行しながら走向し、東方は第9地区の北壁のある溝と、西方は本地区の北西に現状でも確認できる流路が存在している。断面形は幅350~600cm以上×深さ50cmの皿状を呈する。底面には砂層を埋土とする小溝やポット・ホールが認められる。遺物は覆土中より青磁・越中瀬戸・染付が出土している。近世の溝と思われる。

溝出土遺物

S D 3 出土遺物

1は龍泉窯系青磁碗I~5類の鍋連弁文碗である。2は越中瀬戸の皿で、見込に弁菊がある。

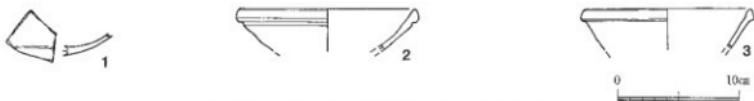
3は染付の皿である。



第49図 第7・8・調整池地区S D 3出土遺物

遺構外中世遺物

1は、青磁碗で、内面に丸彫りの線が施されている。3・4は白磁IV類の碗である。太い玉縁口縁部で、器肉はやや厚い。

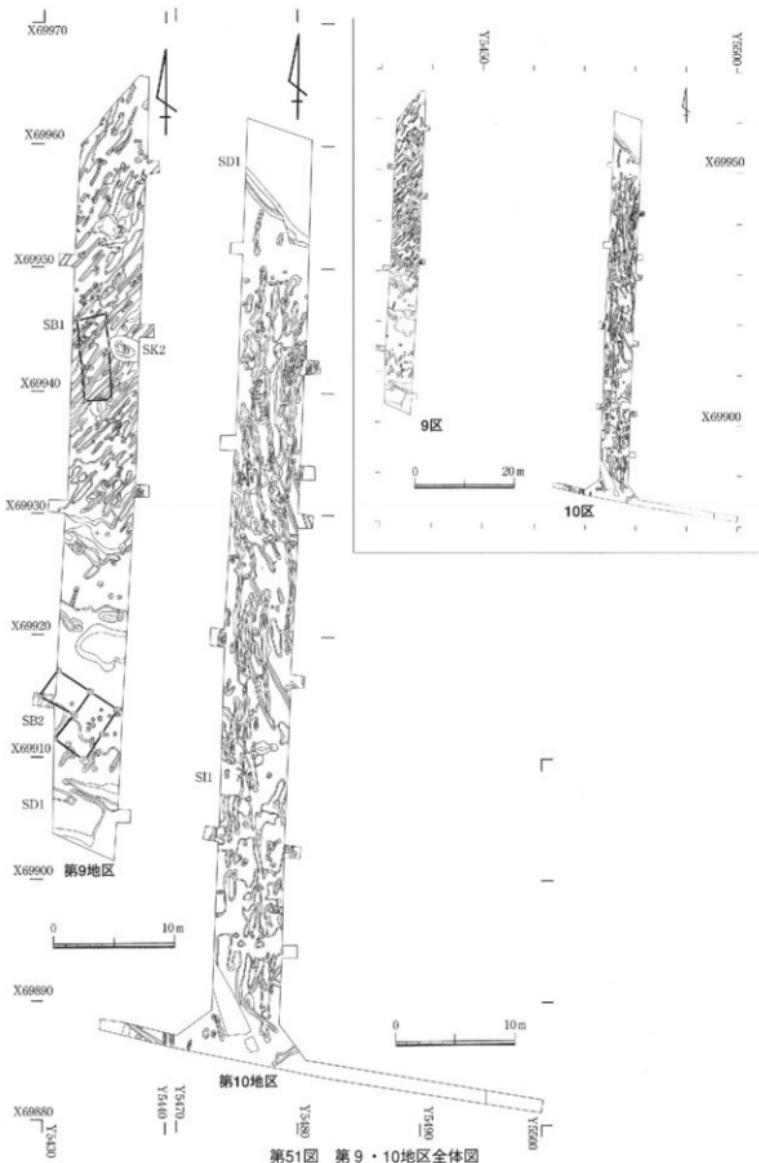


第50図 第7・8・調整池地区遺構外中世遺物

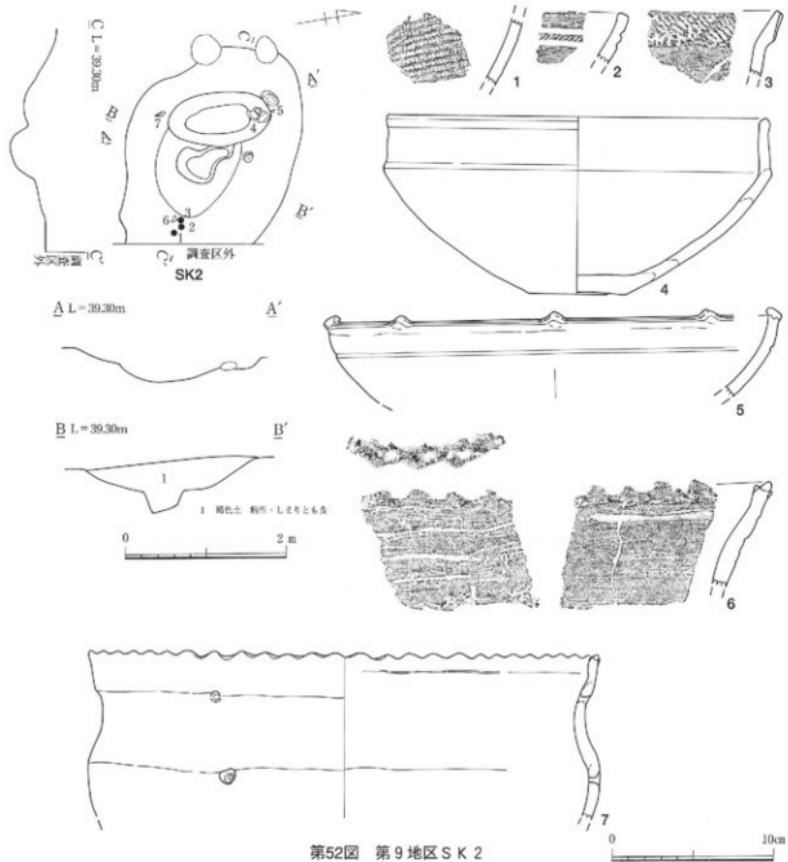
2 第9・10地区

概要

第9・10地区は吉岡遺跡の東部に位置し、両地区的間は37mの距離が離れている。第9・10地区の周辺はほ



第51図 第9・10地区全体図



第52図 第9地区SK2

は平坦であるが、第9地区的西方には低い崖が存在する。遺構確認面は黄色砂層上面となるが、南端では疊層となる。調査では縄文の穴1基・中世の掘立柱建物跡2棟・古代の畑址・近世の溝が検出されている。

縄文時代

穴

第9地区

SK2 第52図 PL10-3

第9地区的中央部に位置する。東南部の一部が調査区外となるため不明だが、長軸長260cm以上×短軸長207cmの不整梢円形を呈す。深さは最深部で70cmを測る。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は4が壁に密着して、1～3・5～7は壁際の覆土下層より出土し、この他に河原石が2個が壁に密着し

て検出されている。1は斜繩文が施され、胎土は白色粒を含み、色調は褐灰色である。2は平行沈線の間に細繩文が施され、胎土は白色粒・糠を含み、色調は橙色である。3は深鉢で、口縁部直下が外反し、口縁部に撫状工具の押圧を施す。胎土は白色粒を含み、色調は灰黄色である。4は浅鉢で、口縁部直立し、底部は上げ底となる。全体に磨きが施され、胴部外面に黒色付着物がある。胎土には白色粒を含み、色調は黒褐色である。5は浅鉢で、山形の小突起が付けられている。内外面に磨きが施されており、口唇の小突起間に沈線、口縁部下に沈線を施す。口縁部外面～内面に赤彩痕、胴部に黒色物を塗布している。胎土には白色粒を含み、色調は灰黄色である。6は深鉢で、口唇部に連続圧痕を加え小波状とする。胴部外面は条痕を施す。7は深鉢で、口唇部に連続圧痕を加え小波状とし、口縁部は直立気味となり、口縁部直下は凹状に強くくびれる。外面は全体に撫でが施されるが、くびれ部では丁寧に行われている。胎土に白色粒・雲母を含み、色調は黒褐色である。くびれ部の上下に焼成後の穿孔がある。本穴の構築時期は底面に近い壁面に密着して出土した4の時期である後期後半と思われる。

古代

両地区全面から畠址が、第10地区中央部から住居跡が検出されている。

畠 第51図

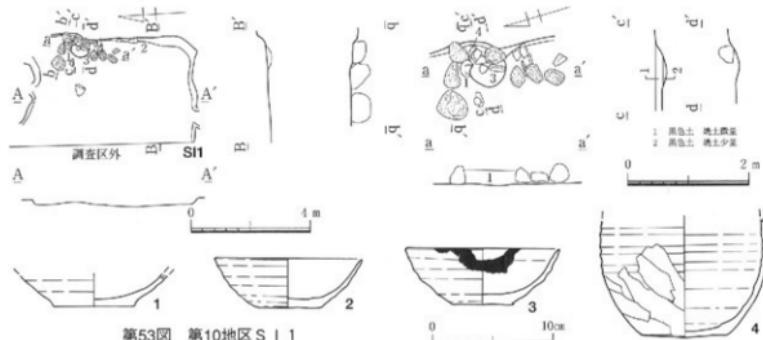
両地区全面より細い溝状の畠柵址が検出されている。第9地区では中央部から北部にかけて集中して検出されており、柵の方向が北北東～南南西となる。第10地区では新旧関係は不明だが、柵の方向がほぼ南北を示すグループと北北西～南南東を示すグループが重複している。

住居跡

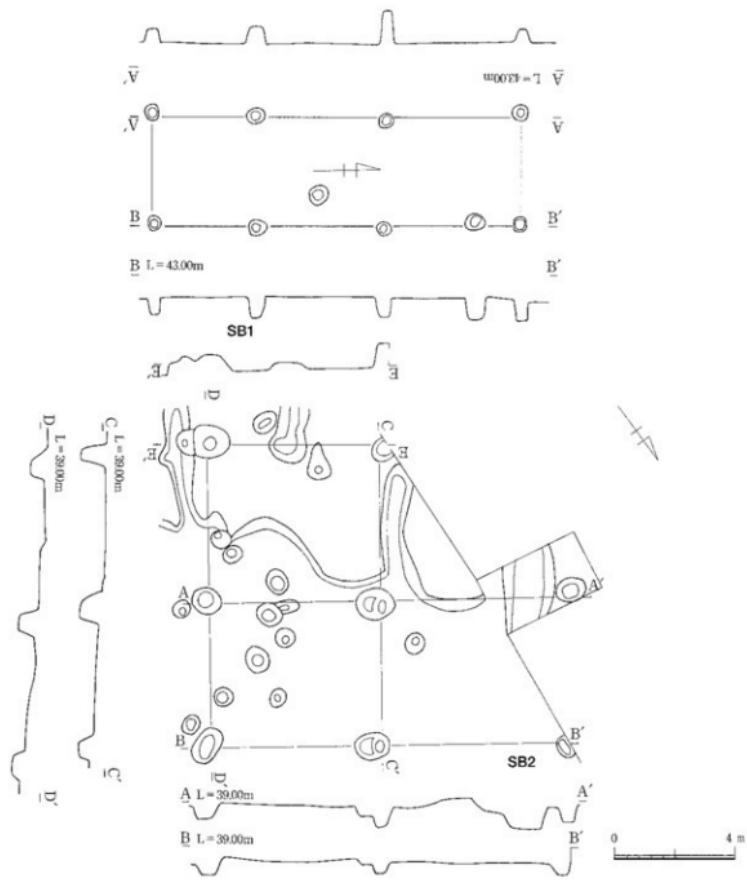
第10地区

S I I 第53図 P L 10-4

第10地区の中央部に位置する。住居西部が調査区外となるため不明な点があるが、南北長280cm×東西長170cm以上の方形基調である。壁はほぼ直立し、高さ8cmである。床面はほぼ平坦で、黄色砂層面となる。竈は東壁北部に存在する。袖は河原石の立石より構築されている。南側の袖石は4石で構成されるが、3石は竈より南へ移動させられている。北側の袖石は3石より構成される。燃道部の壁外への掘り込みは未確認で、竈端部はほぼ直立する。遺物は土師器が出土している。1・3・4は竈内より、2は東壁際の覆土中より出土している。1～3はロクロ土師器壺で、回転糸切り無調整、明橙色を呈する。3には黒色付着物が見



第53図 第10地区 S II



第54図 第9地区掘立柱建物跡

られる。4はロクロ土師器甕で、胴部下部～底部は削りが施され、暗橙褐色を呈する。本住居は遺物より平安時代と考えられる。

中・近世

本時代では、掘立柱建物跡2棟・溝2条が検出されている。

掘立柱建物跡

第9地区

S B 1 第54図 P L10-5

第9地区的北部に位置する。平面は長軸長600cm×短軸長225cmの1周3間の建物跡を確認したが、調査区外に延びる可能性があり、本来の規模・形状は不明である。柱は円形の小規模なもので、柱間距離は長軸側で170～220cm、短軸側で225cmとなる。遺物の出土は無いが、覆土の様相より中世と考える。

S B 2 第54図 P L10-6

第9地区の南部に位置する。平面は桁行き595cm×梁行き493cmの2間2間の総柱建物跡である。柱は円形～楕円形で、柱間距離は桁行きで280～300cm、梁行きで230～260cmとなる。遺物の出土は無いが、覆土の様相より中世と考える。

溝

第9地区

S D 1 第51図

第9地区の南部に位置し、現行河川と一致する。上部は近世以降と思われ、近現代河川改修により埋没したものと思われる。

第10地区

S D 1 第51図

第10地区の北部に位置し、東南から西北へと流れる。第7・8・調整池地区のS D 3に繋ると思われ、近世以降の所産である。

3 第12地区

概要

第12地区は、吉岡遺跡の南部に位置する。調査区は地目を水田とするが、本来の地形は調査区の西部～北部～東部にかけて低い崖が存在する舌状形の台地先端部となる。この台地下には谷が存在し、湿地状となる。調査では中世の壙、縄文時代の配石・石組炉・穴、弥生時代の穴が検出されている。

縄文時代

遺物包含層にともない石組炉・配石・穴・溝状の凹地を検出しているが、穴・溝状の凹地は自然要因のものと思われる。遺物包含層は上下2層存在し、上層は晩期末葉、下層は後期～晩期前葉となる。

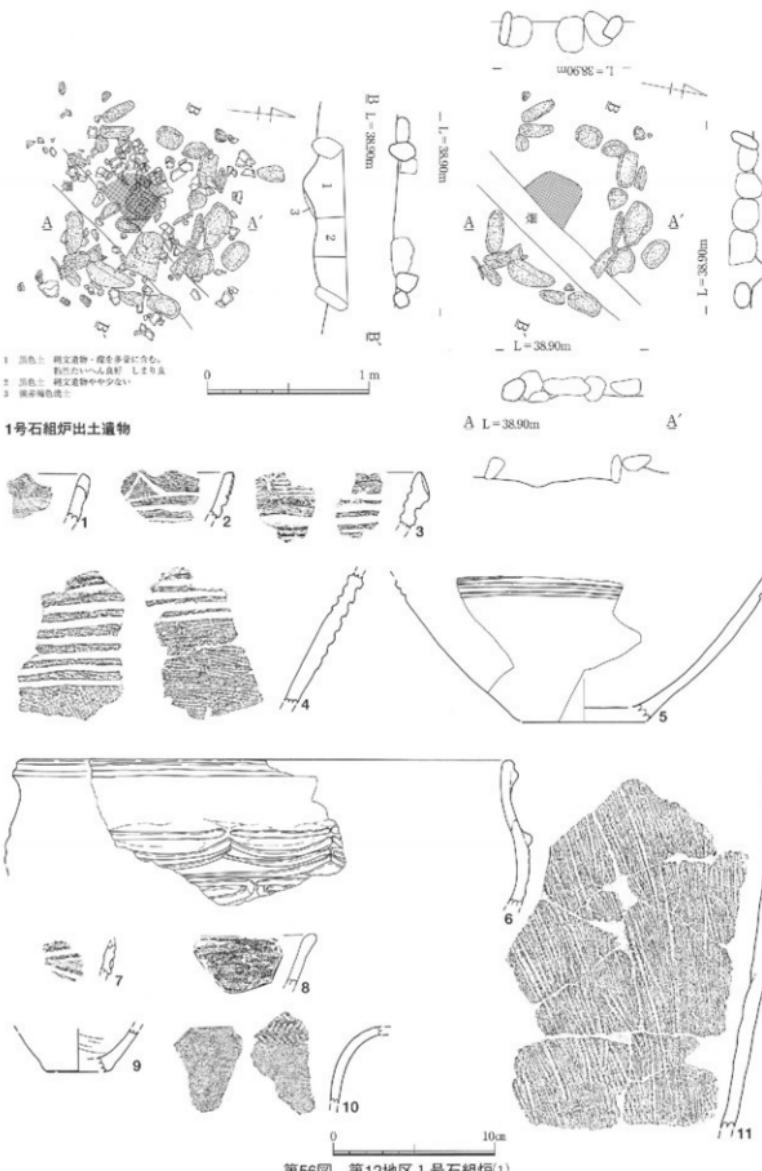
石組炉

1号石組炉 第56・57図 P L11-1・2

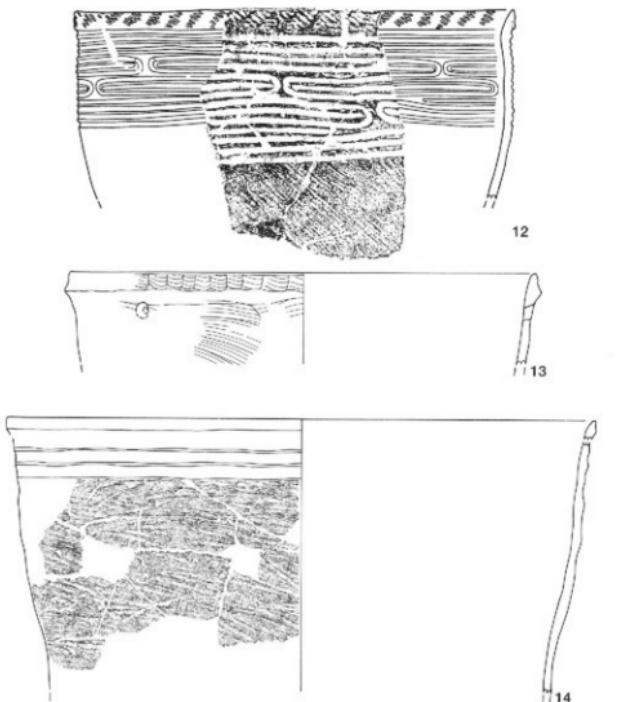
調査区の中央部や西寄りに位置する。晩期末葉の包含層下より検出されている。炉は平坦な旧地表面に河原石を長軸長110cm×短軸長97cmの長方形に配置し、構築している。石組は北辺が91cm、東辺が80cm、南辺が91cmに、西辺が75cmとなり、各辺は4～5石の河原石の立石より構成されているが、北辺・南辺・西辺の各辺では中世の壙により立石の一部が移動し、抜けている。立石は埋め込まれた状態では無く、地表面に突き刺すように立てられており、北辺においては立石の外方に控えとして石が設置されているため二重構造になっている。焼土は中央部に認められるが、焼土は厚さ5mm程度で、色調が淡赤褐色を呈し、焼土化は弱い。遺物は炉内より多量の土器が出土している。

遺物は、縄文時代晩期末葉の土器が出土している。1は小波状突起を持つ浅鉢である。小波状突起は2波1組であったと思われ、口縁部下に凹状線を施す。2は小波状突起を持つ浅鉢である。小波状突起は2波1組で、沈線により平行線文と三角文を施す。3・4は浅鉢で、接合はできなかったが同一個体と思われる。口縁部に櫛による押し引き文、口縁部下の内外面に平行沈線文と条痕文を施す。5は浅鉢である。口縁部下に平行沈線文を施す。6は口縁部が窄まる甌である。口唇部が肥厚し、沈線を有す。肩部に瘤と沈線により工字文風の文様を施す。7は浮線文の工字文風の文様と思われる。8は無文で粗い磨きを施す。9は小型



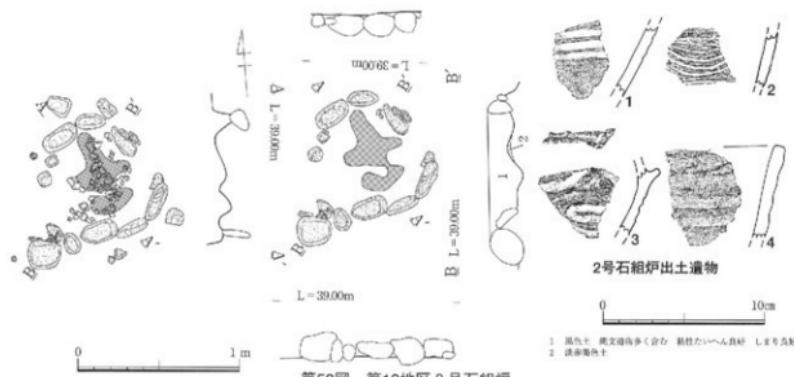


第56図 第12地区 1号石組炉(1)



第57図 第12地区 1号石組炉(2)

0 10cm

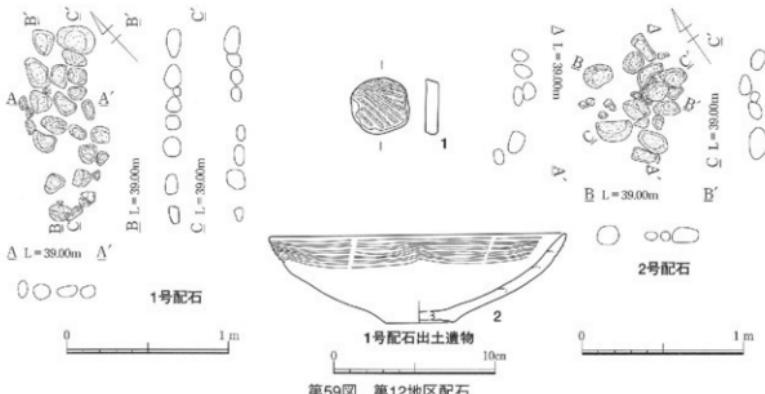


第58図 第12地区 2号石組炉

土器の底部で、無文である。10は弥生の小松式で、口縁部片である。内面に櫛による羽状の刺突文がある。混入と思われる。11は甕で、条痕文を施す。12は口縁部が肥厚する甕である。口縁部に絡条体压痕、口縁部下に沈線による工字文、胴部に条痕文を施す。13は口縁部が肥厚する甕である。口縁部に櫛による押し引き文、口縁部下に不鮮明な凹線、胴部に条痕を施す。口縁部下に焼成後の穿孔がある。14は口縁部が肥厚する甕である。口縁部は無文、口縁部下は3条の凹線、胴部は条痕である。口縁部と胴部は接合できないが、図上復元している。

2号石組炉 第58図 P L12-1・2

調査区の中央部やや東寄りに位置する。晩期木葉の包含層より検出されている。炉は平坦な旧地表面に河原石を長軸長80cm×短軸長77cmの円形に配置し、構築している。石組は河原石の立石より構成されているが、北東部と西部では中世の畑により立石の一部が移動し、抜けている。立石は埋め込まれた状態では無く、地表面に突き刺すように立てられている。焼土は中央部に認められるが、焼土は厚さ5mm程で、色調が淡赤



第59図 第12地区配石

褐色を呈し、焼上化は弱い。遺物は炉内より多量の土器が出土している。

遺物は、繩文時代晩期末葉の土器が出土している。1は平行沈線文を有す浅鉢である。2は連弧状沈線文を有す深鉢である。3は口縁部が帯なる甕と思われる。胴肩部に瘤と沈線により工字文風の文様を施す。4は口縁部が小波状となる甕である。口縁部～口縁部下に凹状線を施す。

配石

1号配石 第59図 P L12-3

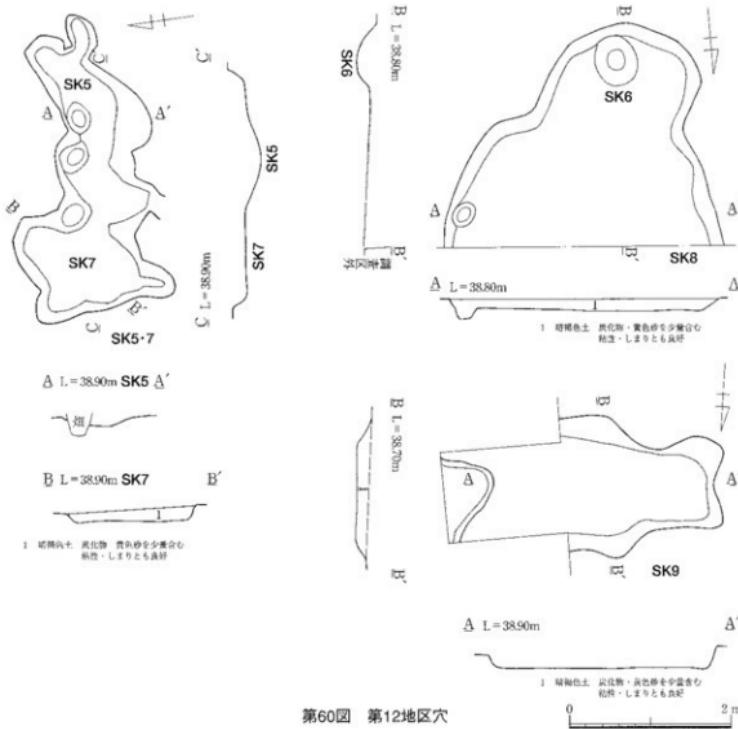
本遺構は、調査区中央部のやや東寄りに位置する。河原石が集中して検出されており、確認を欠くが人為的に並べられた可能性も考えられるため配石として取り扱う。平面的には中世の畑により石が移動しているため不明瞭であるが、南北長121cm×東西長50cmの南北に長い長方形に見える。各石は10~25cm大の河原石を包含層の黒色土下層中に同一レベルで、平の面を水平にして設置されている。遺物は明確に作出するものは無いが、配石中より土製円盤と晩期の土器が出土している。

出土遺物

1は土器片再利用の円盤である。2は浅鉢で、上げ底である。口縁部に連弧状の沈線文を施す。

2号配石 第59図 P L 12- 3

本遺構は、調査区中央部のやや東寄りに位置する。河原石が集中して検出されており、確認を欠くが人為的に並べられた可能性も考えられるため配石として取り扱う。平面的には中世の畠により石が移動しているため不明瞭で、南北長77cm×東西長63cmの不整形となる。各石は10~25cm大の河原石を包含層の黒色土下層中に同一レベルで、平の面を水平にして設置されている。遺物は明確に伴出するものは無い。



第60図 第12地区穴

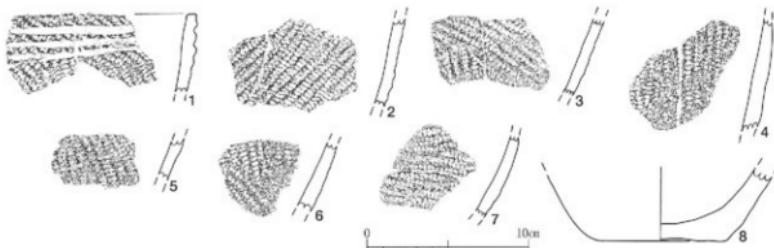
穴

SK 5・7 第60図

調査区中央部に位置する。2基の穴が重なる形状を呈していたため別々の名称を付したが、ひとつの穴として捉えられる可能性が高く、ここではひとつの穴として記す。形状は東西長365cm×南北長205cmの不整形を呈し、深さが15cmとなる。壁等は明確に検出されたとは言い難く、本穴は自然的成因の窪地であった可能性が高い。本穴の時期は覆土より後期後半と思われる。

SK 6・8 第60図

調査区中央部に位置する。2基の穴が重なる形状を呈していたため別々の名称を付したが、ひとつの穴と



第61図 第12地区SK 6・8出土遺物

して捉えられる可能性が高く、ここではひとつの穴として記す。形状は北部が調査区外となるが、東西長345cm×南北長273cm以上の不整形を呈し、深さが15cmとなる。壁等は明確に検出されたとは言い難く、本穴は自然的成因の窪地であった可能性が高い。本穴の時期は遺物より後期後半と思われる。

S K 9 第60図

調査区北西部に位置する。形状は東部が調査区外となるが、東西長345cm以上×南北長195cmの不整形を呈し、深さが15cmとなる。壁等は明確に検出されたとは言い難く、本穴は自然的成因の窪地であった可能性が高い。本穴の時期は覆土より後期後半と思われる。

穴出土遺物

SK 6・8 出土遺物 第61図

1は斜縄文と口縁部下に平行沈線文を施す。2・3は斜縄文を施す。4～6は縦位の縄文を施す。7は横位の縄文を施す。8は無文の上げ底である。

包含層出土遺物

包含層より多量の縄文土器と石器・土製品が出土している。

縄文土器

縄文土器は、後期～晩期にかけての所産で、I～IV群に分けられ、各群単位に記す。1・2号石組の例も含める。

I群 後期に属する土器群を一括する。量的には少量で、調査区の西北部の下層に集中して出土している。
a類（1・2） 沈線文を有す土器で、1は櫛状工具の小波状文、2は平行沈線文と小波状文が見られる。
b類（3） 浅鉢を一括する。3は口唇部が屈曲して直立する。口唇部と屈曲部に刻目、その内部に凹線を縱横に入れ、区画文状にしている。

c類（4） 4は加曾利B式並行すると思われ、内面に5条の凹線を施し、口唇部は内屈する。

d類（5～12） 斜縄文を施する深鉢である。5・6は口唇部から斜縄文が施文されている。7～9は口縁部に無文帶、その下位より斜縄文を施す。10は斜縄文を施する肩部片である。11は斜縄文を施する底部片で、底部には網代痕が存在する。12は斜縄文を施する底部片で、底部は無文である。

II群（13・14） 晩期前半の土器群を一括する。13は地文を細縄文とし、沈線により三叉状の文様を施す。14は地文を細縄文とし、三叉文を彫り込む。

III群（15～35） 下野式の系譜に連なる土器群である。

a類（15・16） 条痕文地文に幾何学的沈線文を施す。部分的に磨り消している。

b類（17・18） 突起を有す口縁部で、条痕文地文に沈線文を施文する。

c類（19～23） 列点文と沈線文を施す上器群である。19は条痕文を地文とし、平行沈線文と押引き気味の列点文を施文する。20は口唇部に縦条体圧痕文、口縁部下に列点文と沈線文を施文する。21～23は列点文と平行沈線文を施文する。

d類（24～35） 押引列点文を施す土器群である。24・26～29・31は沈線文と押引列点文を施文する。24・30・33は外面に赤彩痕がある。31は28と同一個体と思われる。25は条痕文を地文とし、沈線文と押引列点文を施文する。30・31は浅い押引列点文が集合して施文され、32は内面に凹線が存在する。33～35は口縁部に押引列点文、口縁部下に沈線による連弧文に近い三角文が施される。35は列点文がないが本類と思われる。

IV群 浮線文の土器、浮線文系文様の土器である。

a類（36～43） 工字文が施文され、口縁部が肥厚し、肩上部が口縁部に向かい窄まる形状を呈す深鉢を一括する。36は口縁部に沈線を有し、口縁部下は無文帯となり、肩肩部に瘤を起点とする浮線文の沈線文による工字文が施される。39～43は36と同一タイプの土器の肩肩部片と思われ、瘤を起点とする浮線文系文様による工字文が施されていたと思われる。41は工字文に列点文が加えられている。

b類（44～48） a類以外の工字文が施文される深鉢の胴部片を一括する。44・45・47・48は丁寧な浮線文であるが、46は雑な浮線文で、幅のある工具による浅い沈線文に近い。

c類（49～51・54） 工字文が施文される浅鉢を一括する。49は浮線文が太めの雑な調整で、口縁部内面に四線を施す。50は沈線文に近く、工字文の三角形部を抉る技法が認められ、本群の中でも古いと思われる。51は雑な浮線文で、幅のある工具による浅い沈線文に近い。54は内面に凹線が施される。

d類（52・53・55・56） 浮線文状の降起線が見られる浅鉢で、口縁部が小波状の突起を有し、口唇端部が凹線状となる。52・56は内外面全面に赤彩、52・53は外面～内面口縁部に赤彩、54は無彩である。

V群 沈線による工字文が施文される上器を一括する。

a類（57～60） 工字文の楕円形や弧状に区画された部位において内部に1条の沈線が施される土器群で、口縁部下に工字文の文様帶を持ち、それ以下に条痕文を施す粗製と精製の中間的な深鉢を一括する。57は口縁部が肥厚し、縦条体圧痕文が施文され、それ以下に工字文が配されている。58は口縁部が欠損するが、割れ口より肥厚するものと思われる。59は口縁部が肥厚し、沈線文が施文され、それ以下に工字文が配される。60は口縁部から工字文が施文されている。

b類（61～66） 工字文の楕円形や弧状に区画された部位において内部に1～2条の沈線が施される精製の小型深鉢である。61・63・64・66は楕円形の区画内に1条の沈線が入る。62は楕円形の区画内に2条の沈線が入る。65は弧状の区画内に1条の沈線が入る。65・66は外面に赤彩の痕跡がみられる。

c類（67～71） 深鉢で、工字文の楕円形や弧状に区画された部位において内部に沈線が無い例である。67・68・71は地文に条痕文が施される粗製と精製の中間の深鉢である。69・70は工字文部分だけで、条痕文の有無は不明である。

d類（72～76） 沈線による変形工字文が施文され、口縁部が肥厚し、肩上部が口縁部に向かい窄まる形状を呈す深鉢である。72は口縁部に沈線を有し、口縁部下は無文帯となり、肩肩部に瘤を起点とする沈線により工字文が施文される。工字文の弧状の区画内には1条の沈線が施されている。73～76は口縁部を欠損するが、72と同形状と思われる深鉢の破片である。73は瘤を起点とする工字文部分である。74は無文帯と工字文が見られる。75は工字文の楕円形区画内に沈線が無い例で、外面が赤彩されている。76は工字文の楕円形区画内に2条の沈線を持つ例である。

e 類 (77~79・81) 沈線による変形工字文が施文され、口縁部に小波状の突起を持つ浅鉢を一括する。77は口縁部の小波状突起の頂部が上方より押えられ、肥厚する。工字文は太い沈線で施文されており、内面には凹線が施されている。78は内外面に赤彩がみられる。79は口縁部の小波状突起が外反して伸び、内面に屈曲の稜を有す。工字文は沈線であるが、やや浮線文状である。外面～口縁部内面に赤彩の痕跡が認められる。81は口唇部端部と外端部に沈線を有す。

f 類 (82) 沈線による変形工字文が施文され、平縁口縁部の浅鉢である。口唇部に押引列点文、口縁部にU字文と連弧状の平行沈線文を施文する。沈線は短い単位で止められ、押し引きの延長のような施文技法である。

g 類 (80・83~87) 口縁部形状が不明の浅鉢を一括する。80・83は工字文の楕円形区画内に沈線が無い例である。84~87は工字文の楕円形あるいは弧状の区画内に1~2条の沈線が入る例である。

VI群 (88・89) 工字文と三角形～連弧文の中間と言える文様の土器群である。88は平縁の浅鉢で、口縁部下に2つの小孔が焼成前に穿たれている。文様は沈線の工字文が変形し、連弧状～三角形状となる。外面～口縁部端部内面に赤彩が塗布されている。89は浅鉢の胴部片と思われ、沈線の工字文はかなり崩れているが、太い工具により施文され、部分的に浮線文的様相となる。

VII群 沈線により三角文が施文される土器群である。

a 類 (90~92) 下野式に近い文様で、三角沈線文と刺突文が施文される土器群である。90は精製の小型深鉢で、口縁部に2条の沈線、口縁部下に無文帯、胴部は集合沈線により三角形の区画が構成し、その内部を刺突文により充填している。91は精製の浅鉢と思われ、横位の平行沈線間に刺突文を施す。92は精製の小型深鉢と思われ、斜位の平行沈線間に刺突文を施す。

b 類 (93~99) 集合沈線による三角文が施される土器群である。93は三角文が深い沈線により施文され、三角形の内方の無文部は抉り取られ、器肉が薄くなる。94は深い沈線により施文され、連弧文に近い三角文となり、最小の三角形の内方には横位の沈線を充填している。95は細くて深い沈線により施文され、連弧文に近い三角文となり、下端には平行沈線が見られる。底部には網代痕が薄く認められる。96・98・99は外面に集合沈線による三角文が、内面に凹線が施文される浅鉢である。沈線文は太くて浅く、細いへら状工具を用いており、やや浮線文的となる。96は口縁部は押圧による痕跡的な小波状突起を有す。97は外面に三角沈線文が、内面に凹線が施文される浅鉢である。三角文は組状となり、最小三角形の内方には縦位の沈線を充填している。沈線は断面が丸い棒状工具により施文される。

c 類 (100) 単純な沈線により区画された三角形内が周辺よりも抉られ、器肉がやや薄くなり、半肉彫状となり、三角文下に平行沈線文が施文され、2波1組の小波状突起を有す浅鉢である。

d 類 (101) 平行沈線間に1条の沈線による三角文を施文する浅鉢である。

VIII群 連弧文が施文される土器群である。

a 類 (102・103) 連弧文を沈線により表現するが、沈線の外周を極く僅か凹めて浮線文状としている。102は外面にX字状文と連弧文の複合した文様が、内面に凹線文が施される浅鉢である。外面全面に赤彩の痕跡が見られる。103は平行沈線文と連弧文が施され、外面に赤彩痕が認められる。

b 類 (104・110~112・114) 集合沈線による連弧文が施文される土器群である。104は集合沈線により連弧文を施し、連弧文下の無文部は抉り込まれ、器肉が薄くなる。110は平行沈線間に連弧文を配置している。111・112は瘤を持ち、その上位に集合沈線の連弧文を施す浅鉢である。114は連弧沈線文が施文される浅鉢である。

c 類（105・106） 沈線による連弧文と刺突文により構成される土器群である。105は刺突文の中にやや太めの沈線により連弧文を施文する。沈線は2条となるが、2本が重なるように施文されるため2本の境は僅かに稜状として残るにすぎない。赤彩を施す。106は連弧文の各沈線が独立している。

d 類（107・109・113） 半肉彫りの連弧文が施文される土器である。107は沈線の連弧文を施文した後、連弧文下を削り浮線文状に仕上げている。109は沈線を連弧状に施した後その直下を底部まで削り取って半肉彫りの連弧文としている。連弧文～底部に赤彩を施す。113は弧を上方に向ける連弧文を半肉彫りで表現している。外間に赤彩を施す。

e 類（108・115） 平行沈線文とも連弧文とも、いづれとも取れる沈線文を有す土器群である。108は部分的に弧状を成す部分と平行沈線文となる部分が存在する。115は平行沈線の一部が僅かにくびれ緩い連弧状を成している。

IX群（116～118） 他類よりも細くて鋭い沈線によって連弧文等が施文される土器群である。柴山出村式の範疇に入るかもしれない。116・117は連弧文が施文される。118は工字文の終末の形態と思われる。

X群 平行沈線文が施文される土器群である。

a 1 類（119） 口縁部に押引刺突文、口縁部下に平行沈線文、地文に条痕文が施される粗製土器である。

a 2 類（120～123） 口縁部に絡状体圧痕文、口縁部下に平行沈線文、地文に条痕文が施される粗製土器である。

a 3 類（124・125） 口縁部は口唇部に絡状体圧痕文を施して小波状とし、口縁部下に平行沈線文、地文に条痕文が施される粗製土器である。

a 4 類（126） 口唇部に押引刺突文、口縁部下に平行沈線文、地文に条痕文が施される粗製土器である。

a 5 類（133） 口縁部に短線沈線文、口縁部下に平行沈線文、地文に条痕文が施される粗製土器である。

a 6 類（128・129・131・132） 口縁部に平行沈線文、地文に条痕文が施される粗製土器である。

a 7 類（134） 口縁部が不明の平行沈線文と地文に条痕文が施される粗製土器である。

b 類（127・130） 口縁部に平行沈線文、口縁部下に無文帶、胴上部に平行沈線文となる精製土器である。127は胴上部より強く内側する深鉢と思われる。130は胴上部より強く内側する浅鉢で、外面胴上部～内面口縁部に赤彩が施される。

c 類（135～137） 精製の小型深鉢で、胴下端に平行沈線を有す土器である。135は外面に赤彩が施される。136・137は無彩である。

d 類（138～143） 口縁部下に平行沈線を有し、小波状突起を有す口縁部の浅鉢である。138は口唇部に沈線、外面～内面口縁部に赤彩が施される。139は凹線状の沈線が見られる。140は内面に凹線と降起線が見られる。141は2波1組の小波状突起が非対称となる。142は小波状突起の下に焼成前に2孔1組の小孔が穿たれており、外面～内面口縁部に赤彩の痕跡が認められる。143はきわめて小さい小波状突起で、頂部が双子山状となり、内面口縁部に凹線が見られる。

e 類（144～149） 口縁部下に平行沈線を有し、口縁部形状不明の浅鉢を一括する。144～146・148は大きく聞く形状の浅鉢と思われ、145の外面には赤彩痕が認められる。147は内面に凹線が見られる。148は胎土・色調が異質で、弥生式土器の可能性がある。149は口縁部の平行沈線が乱雑で、部分的に途切れたり、沈線条数の増減が見られる。口縁部形状は不明だが、平縁では無いと思われる。口縁部に赤彩が施されている。

f 類（150・151） 口縁部下に平行沈線を有す粗製の鉢である。150・151は接合しないが、同一個体である。口縁部が肥厚し、押引圧痕が施され、内外面とも地文に条痕文と口縁下の平行沈線文が見られる。

g類（152・153） 平行沈線を有す精製の浅鉢底部片を一括する。152は太めの沈線を施すことにより胴部下端が段状を成す。153は平行沈線が稚で、部分的に途切れる。外面は赤彩が施される。底部表面は剥落している。

XI群（154～158） 無文の土器を一括する。154は痕跡的な小波状突起が見られ、口唇部は内外面を交互に押印しており、口縁部内面に凹線、外面に磨きを施す。155は口縁部がやや肥厚し、口縁部下に凹線が見られる。外面は赤彩が施される。156は浅鉢で、外面は粗い削り、内面は口縁部に凹線、胴部が削り後磨きを施す。157・158は無文の底部片である。

XII群 粗製の深鉢を一括する。

a 1類（159・160） 肥厚した口縁部に押引文を施文し、口縁部下に磨きが施された無文帯を配置し、胴部に条痕を施す。159は無文帯に赤彩が施され、押引文は横位、条痕文は縱位に施される。160は押引文は横位、条痕文は横位に施される。

a 2類（161～165） 肥厚した口縁部に押引文を施文し、口縁部下に2条以上の凹線を配置し、胴部に条痕を施す。161は口縁部下に4～5条の凹線が施され、押引文は横位、条痕文は横位に施される。162は口縁部下に3条の凹線が施され、押引文は横位、条痕文は縱横に施される。163は口縁部下に4条の凹線が施され、押引文は横位、条痕文は斜位に施される。164は口縁部下に2条の凹線が施され、押引文は乱雜で、条痕文は縱位に施される。165は口縁部下に2条以上の凹線が施される。

a 3類（166） 肥厚した口縁部に押引文を施文し、口縁部下に1条の凹線を配置し、胴部に条痕を施す。166は口縁部下に無文帯に近い凹線が施され、押引文は斜位、条痕文は斜～横位に施される。

a 4類（167） 口唇部に押印状の押引文を施文して小波状口縁部とし、口縁部下に1条の凹線を配置し、胴部に条痕を施す。167は口縁部下に無文帯に近い凹線が施され、押引文は斜位、条痕文は縱位に施される。

b 1類（168） 肥厚した口縁部に絡条体圧痕文を施文し、口縁部下に磨きが施された無文帯を配置する。168は絡状体圧痕文を斜位に施文する。

b 2類（169～183・185） 肥厚した口縁部に絡条体圧痕文を施文し、口縁部下に2条以上の凹線を配置し、胴部に条痕文を施す。169は口縁部がほとんど肥厚せず、口唇部に斜位の絡条体圧痕を施す。条痕文は縱位である。170は口縁部の絡条体圧痕を斜位に施文し、口縁部下に4条以上の凹線が施される。171～178は口縁部の絡条体圧痕を斜位に施文し、口縁部下に3条以上の凹線が施される。179は口縁部の絡条体圧痕を斜位に施文され、口縁部下に3条の凹線が、胴部は縱～斜位の条痕文が施される。180は口縁部の絡条体圧痕を斜位に施文し、口縁部下に2条以上の凹線が施される。181～183・185は口縁部の絡条体圧痕を斜位に施文し、口縁部下に2条の凹線が、胴部は縱～斜位の条痕文が施される。

b 3類（184・186～190） 肥厚した口縁部に絡条体圧痕文を施文し、口縁部下に1条の凹線を配置し、胴部に条痕文を施す。184・186・188は胴部条痕文が斜～縱位に施される。187・189・190は胴部条痕文が斜～横位に施される。

b 4類（191・192） 肥厚した口縁部に絡条体圧痕文を施文し、口縁部下から条痕文が施される。

c 類（193） 肥厚した口縁部に刺突文を施文し、口縁部下に5条の凹線を配置、胴部に条痕文を施す。口縁部～凹線部に赤彩を施す。

d 類（194） 肥厚した口縁部に櫛目文を施文し、胴部に条痕文が施される。194は口縁部下に2条の凹線が配置され、胴部には横位の粗い条痕が認められる。

e 類（195） 肥厚した口縁部に2条の短線の沈線文を施文し、口縁部下に3条以上の凹線を配置する。内

面に雜な櫛目が施される。

f 類 (196～199) 口縁部は口唇部を押圧して小波状とし、胸部に条痕文を施す。196は口縁部が肥厚する。197は口縁部下に2条の凹線を施す。198・199は口縁部より条痕が始まる。

g 類 (200) 口縁部は凹線のように凹むが、無文ではなく、ここより条痕文が始まる。

h 類 (201) 口縁部は肥厚し、口縁部より条痕が施される。

i 類 (202・203) 口縁部は肥厚し、口縁下が無文帯となる。202は外面は赤彩が施され、精製土器と考えるべきかもしない。203は無彩である。

j 類 (204～208) 口縁部は無文で肥厚し、口縁下に数条の凹線が配置される。204は4条の凹線が施される。205は3条以上の凹線を有す。206・207は口縁部の肥厚が痕跡的となり、3条の凹線を有す。208は口縁部の肥厚が痕跡的で、凹線状となる。

羣群 口縁部が「く」の字状に外反する甕である。

a 1 類 (209) 平縁の口縁部の口唇部に櫛目を押引文を施し、外面は口縁部より条痕が施される。

a 2 類 (210～213) 口唇部に櫛日の押引文を施して小波状の口縁部とし、口縁部より条痕文を施す。

b 類 (214～216) 口唇部に縦条体圧痕文を施して小波状の口縁部とし、口縁部より条痕文を施す。

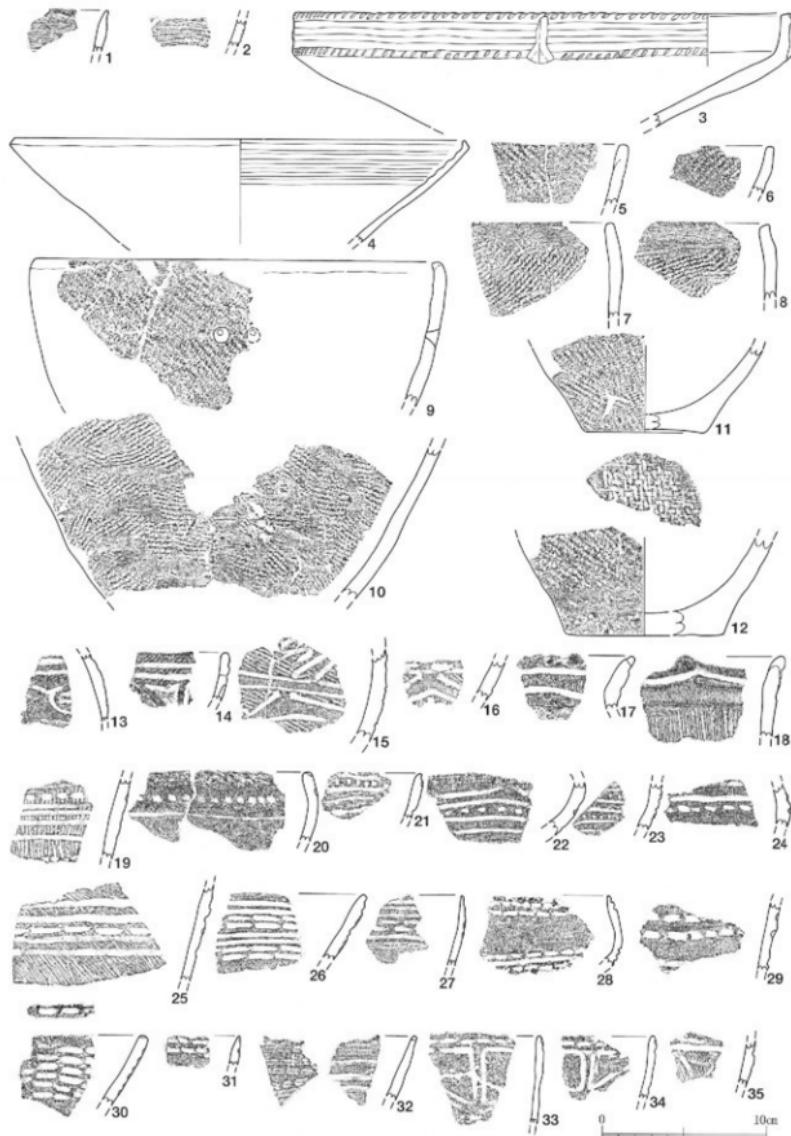
c 類 (217) 施文技法不明だが、口唇部が小波状となる。

d 類 (218・219) 平縁の無文口縁部である。218は胸部に縦条体圧痕らしきものが見られる。219は口縁部に粗い磨きが施される。

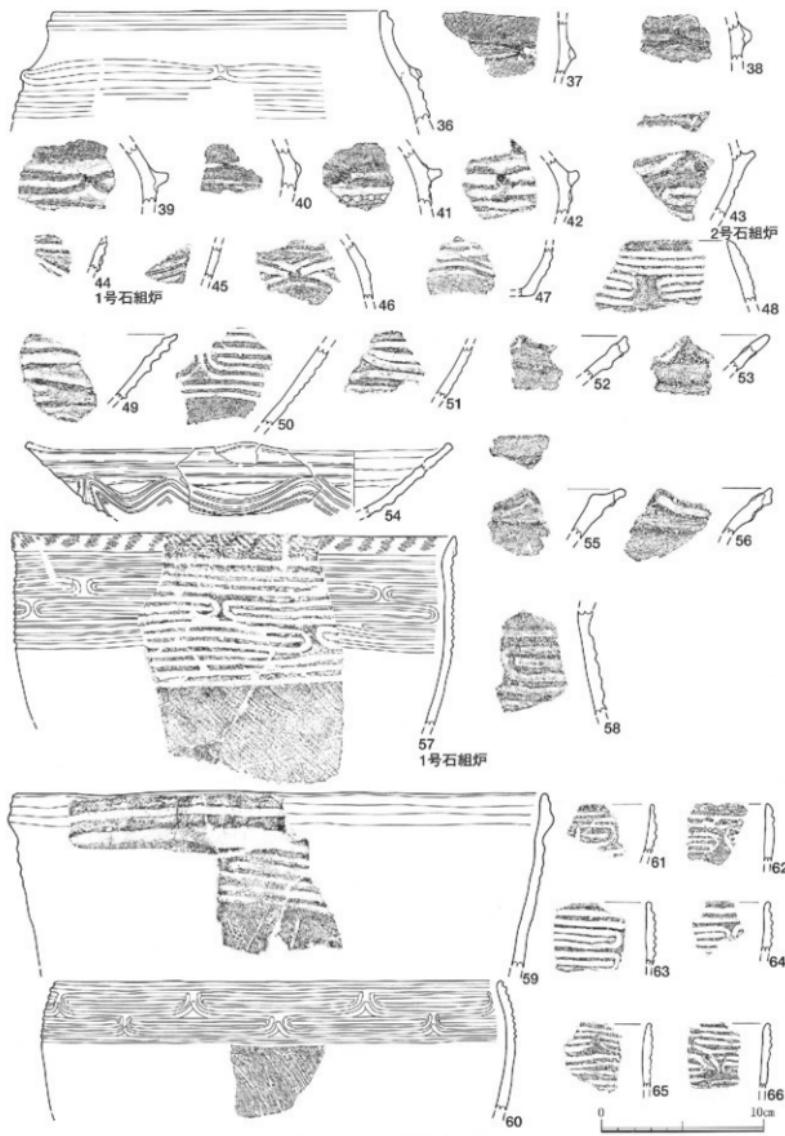
羣群 (220～229) 紗代底を一括する。

土製品 第72図

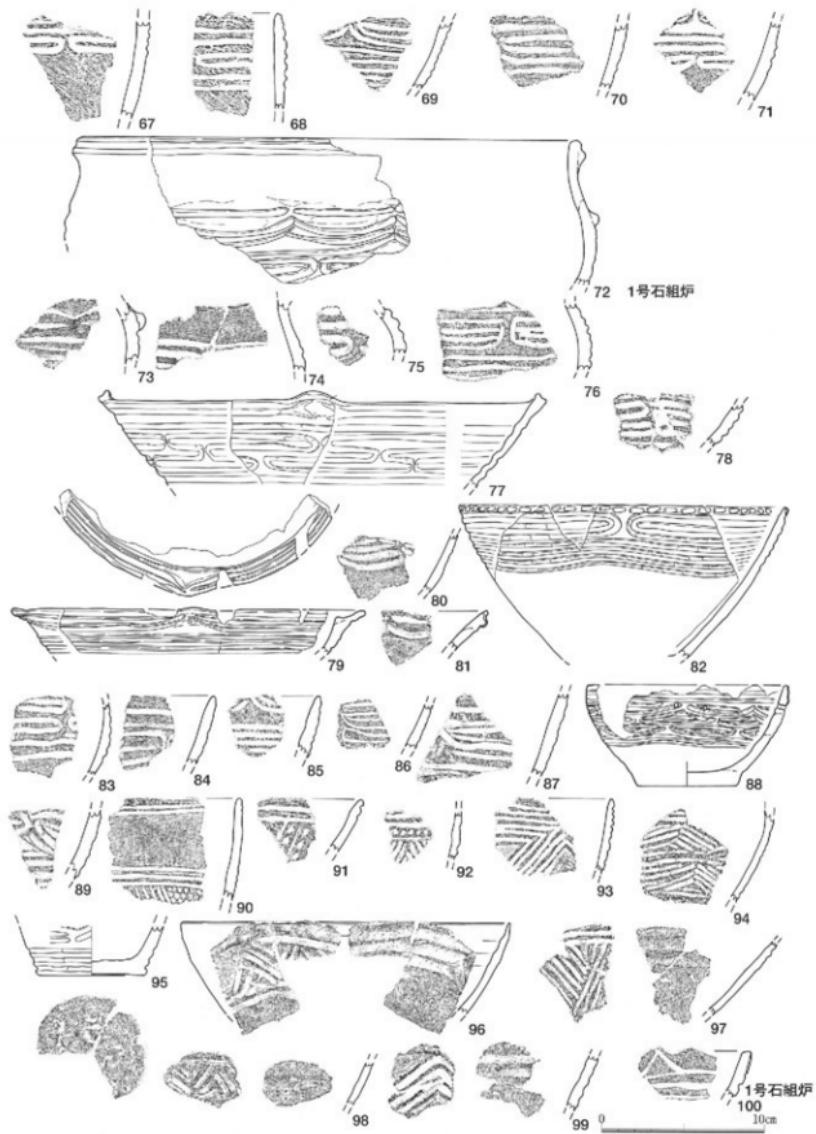
1～8は上器片を再利用した円盤で、側縁は打ち欠かれている。9は棒状の上製品で、断面形は円形の棒状を呈するが、両端は欠損するため形状不明である。



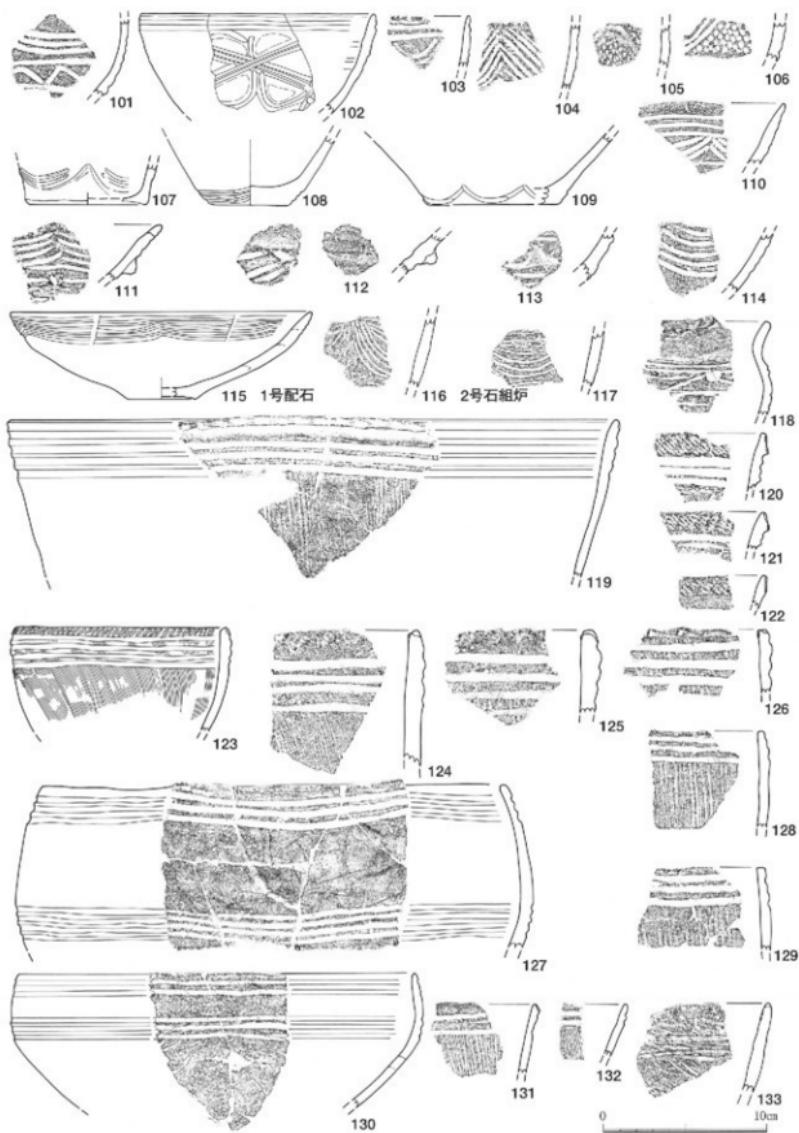
第62図 第12地区縄文土器(1)



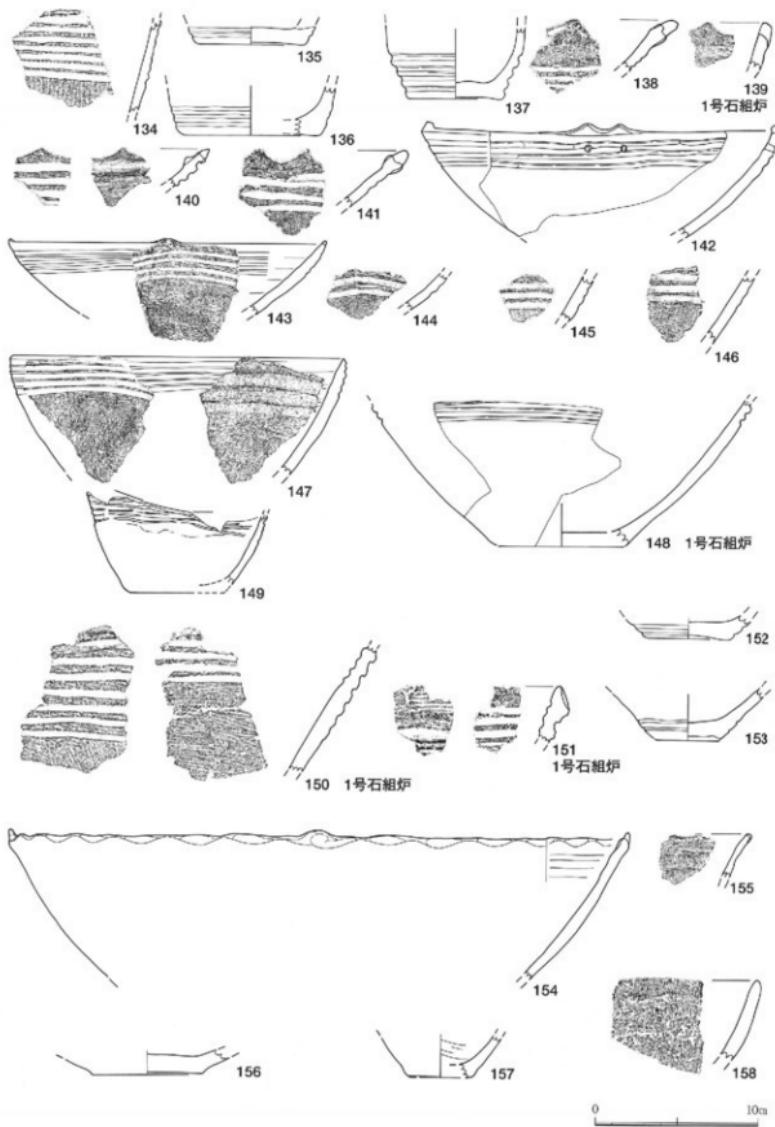
第63図 第12地区縄文土器(2)



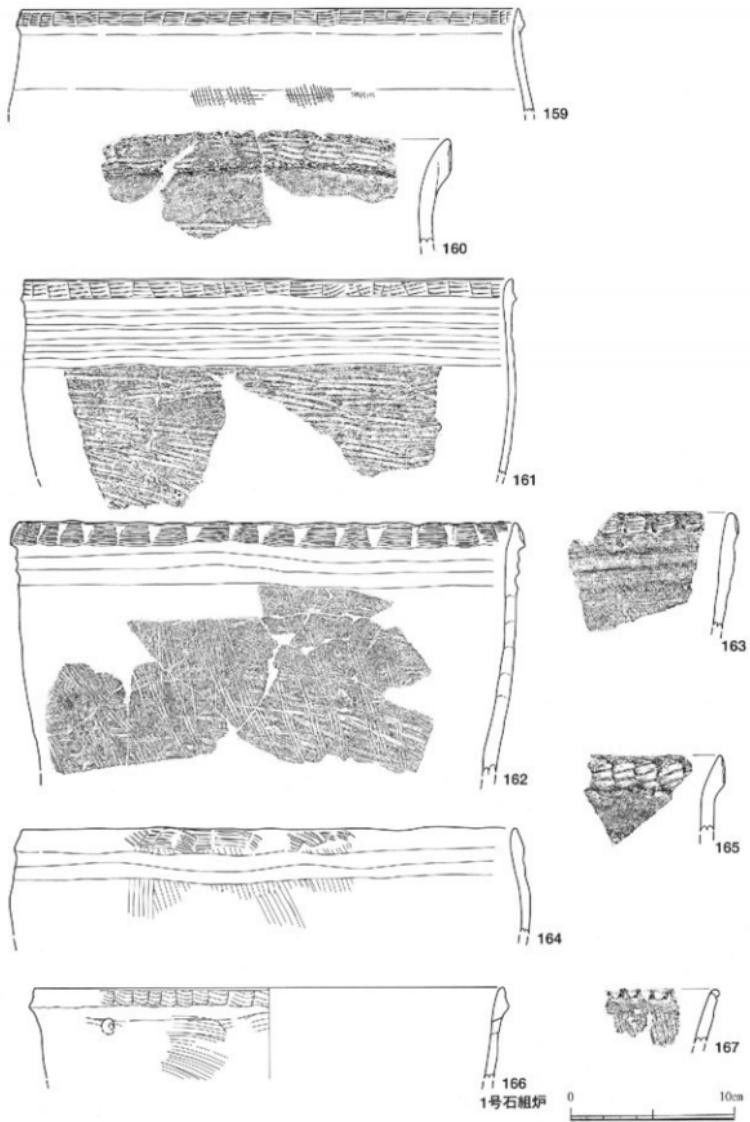
第64図 第12地区縄文土器(3)



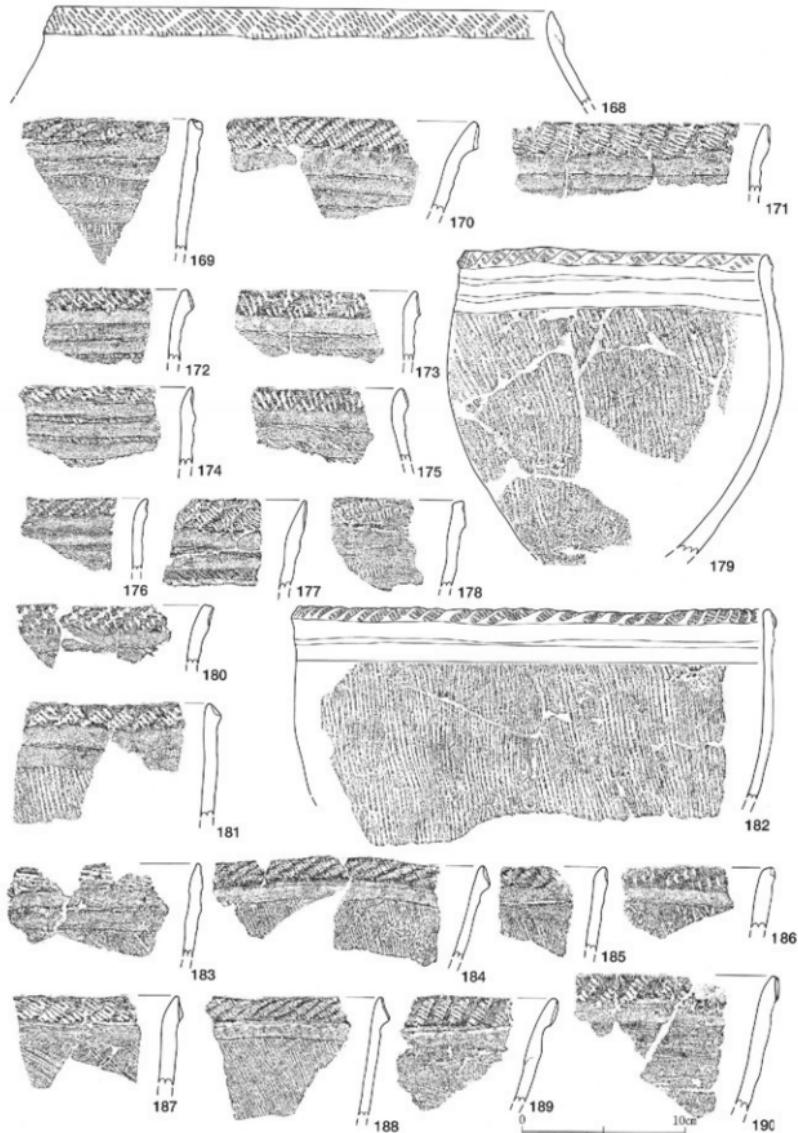
第65図 第12地区縄文土器(4)



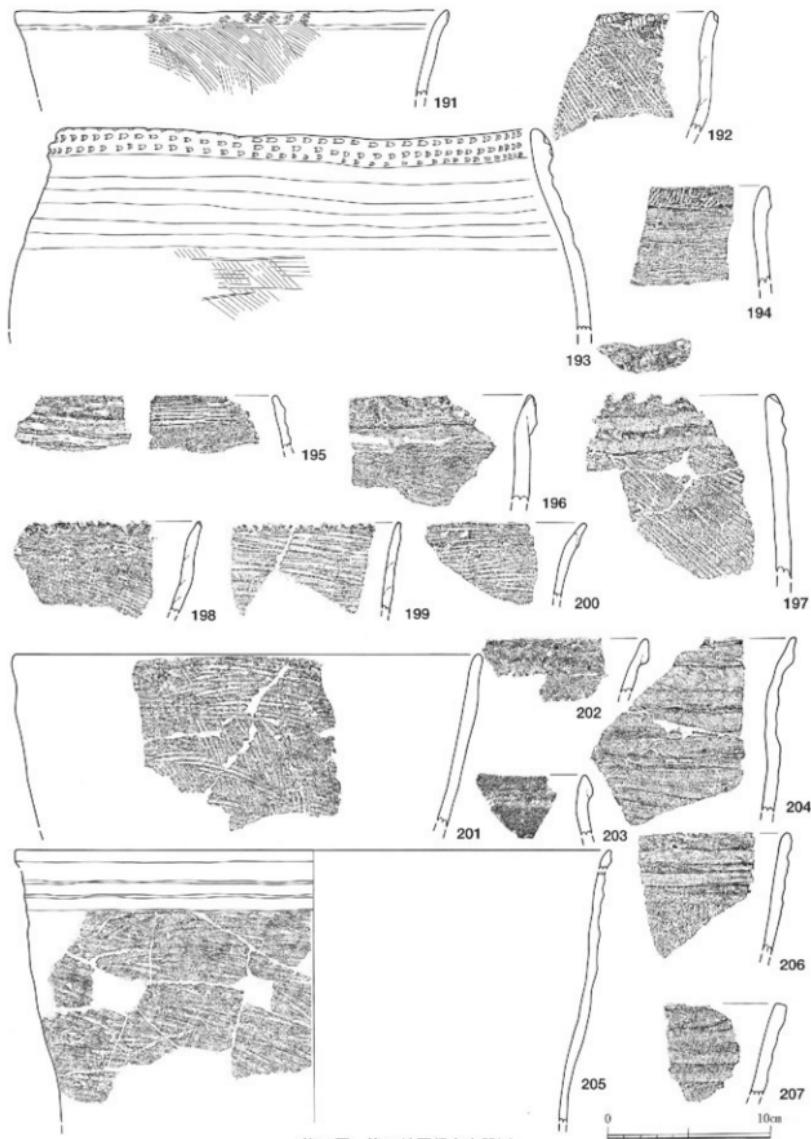
第66図 第12地区縄文土器(6)



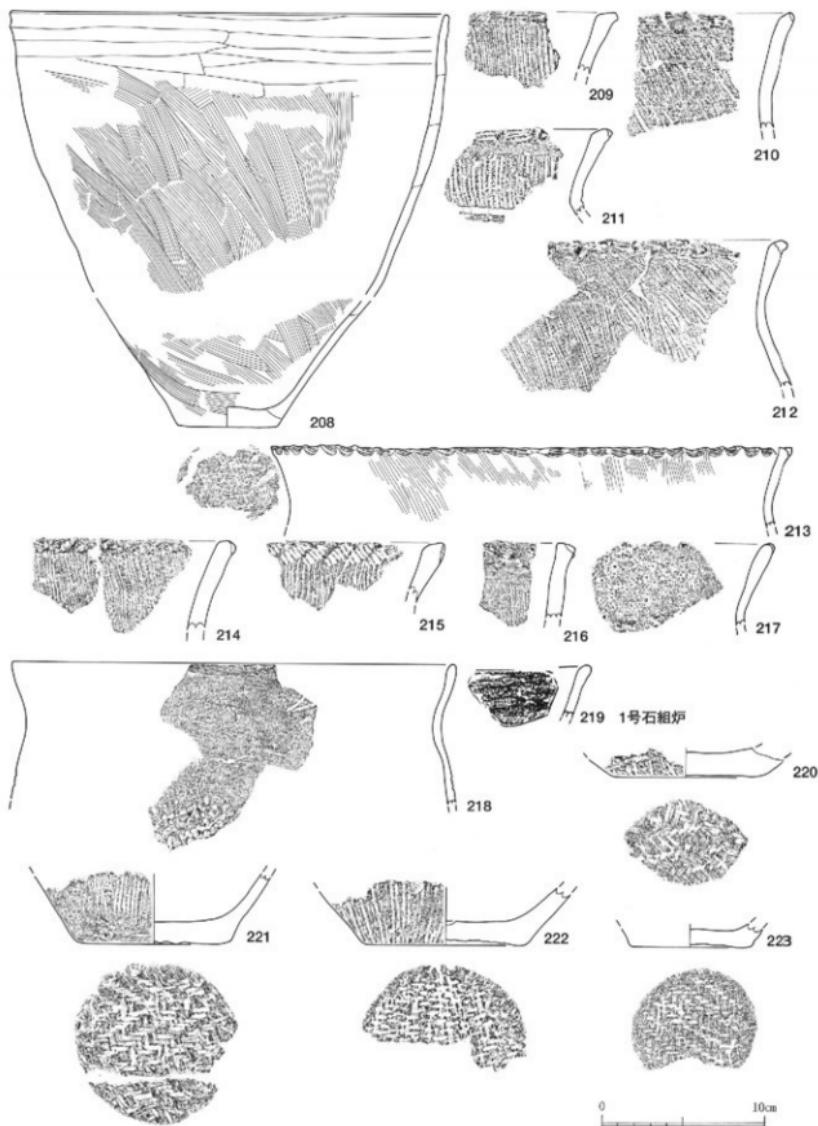
第67図 第12地区縄文土器(6)



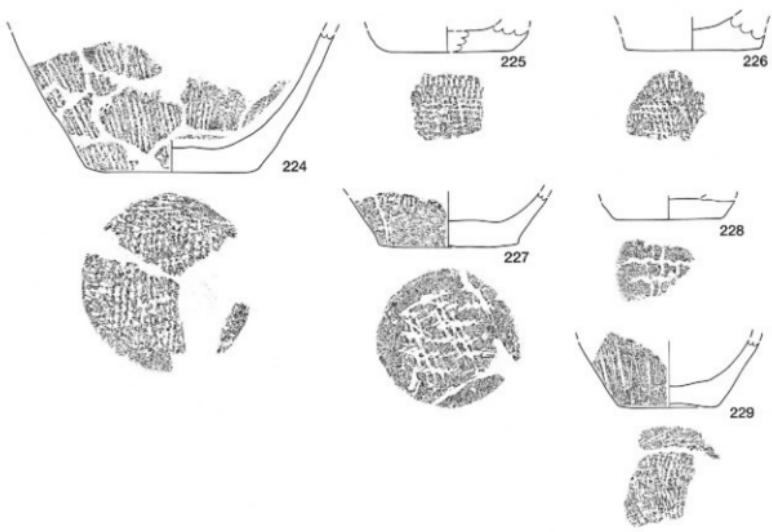
第68図 第12地区縄文土器(7)



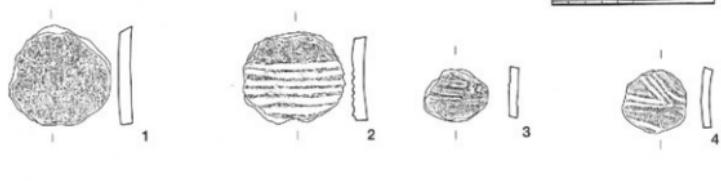
第69図 第12地区縄文土器(8)



第70図 第12地区縄文土器(9)



第71図 第12地区縄文土器(10)



第72図 第12地区土製品

石器

石器は、打製石斧34（内 図示14点）・磨製石斧19・石鎌1・石皿10・凹石4・磨石5・敲打具3・台石1などが出土している。

打製石斧

打製石斧は、全て同じ形状の範疇と言える。形状は全長の2/3に浅い括れにより、頭部側と刃部側に分かれ、頭部は丸みを有す傾向があり、刃部側は短円形～楔形を呈する。1～4はほぼ完形で、1は刃部より1/3の部位で、3は刃部より、4は括れ部で折損していたものを接合し1個体となったものである。2は完形である。5は括れが片側のみである。6は括れが浅く不明瞭である。7は片面が自然面のままである。8は頭部が欠損している。9は括れ部より折損しており、接合により1個体となった資料である。同様に10・12は頭部が欠損している。11は中央部や刃部寄りの部位で折損しており、接合により1個体となった資料で、頭部が粗削り状態となっており、製作途中での放棄を思わせる。13は摩耗痕が広い範囲に認められるが、刃部及び頭部は剥離面が比較的新しく、再加工時に刃部を欠損し、製作放棄したものと思われる。14は刃部を欠損している。

磨製石斧

磨製石斧は、定角式が認められ、未製品も多い。15～19は定角式の完成品と完成品の破片と思われる。15は完成しているが、刃部側で折損しており、接合により1個体となっている。16・17は刃部側を欠損する。18は刃部片である。19は刃部片で、切断面の一部に剥離痕が見られ、楔等の再利用の可能性がある。20は定角式で、刃部以外は磨き段階まで完成しており、刃部は剥離痕と敲打痕が残る段階であることから完成品の刃部が欠損した後、再加工途中で製作放棄したものと考えられる。21は定角式で、剥離・敲打を終了し、磨き工程時の未製品である。22・23は磨き工程を開始する段階の未製品である。24～27は剥離を終了し、敲打工程の未製品である。28～31は最初より敲打工程で製作されている未製品である。32は片面が不鮮明であるが、中型の定角式で、部分的に剥離面を残すが完成品と思われる。33は小型の定角式で折損している。石質が他のものと明らかに異なり、別の場所で製作された可能性がある。

敲打具

34～36は、自然礫の尖頭状になる端部に剥離・敲打痕が認められ、磨製石斧製作時の敲打段階における製作用具の可能性が考えられる。36は平の両面がやや摩耗している。

石鎌

37は、二等辺三角形で、基部に抉りが入る。

剥片石器

38・39は、剥片の背の部分に細かな剥離を施す。38は刃部に摩耗痕が認められる。39は比較的大型の剥片の背の部分に細かな剥離が認められる。性格不明である。

凹石

40～43は、凹石である。40は表裏両面に各2孔存在する。41は表裏両面と長軸側面の計4面に各1孔計4孔存在する。42は1面1孔である。43は表裏両面に各2孔存在する。

台石

44は、自然礫表面にある若干の凸凹の凸部が擦れて平坦になっている。性格・機能不明である。

磨石

45は、表裏両面が滑らかに磨かれており、凹石としても利用されている。46・49は1面のみ滑らかに磨か

れている。47・48は表裏両面が滑らかに磨かれている。

石皿

石皿は、縁の有無により 2 種類の分けられる。50は縁無しで、側面が面取り状に加工されている。51は縁無しで、中央部が僅かに凹み、磨石状に滑らかに摩耗している。52は本来縁部が存在したものと思われるが、縁部は平坦に磨かれて痕跡が見られるだけである。53・54・56は縁無しで、磨石状に滑らかに摩耗している。55は縁の有無不明の石皿片で、中央部がやや凹む。57は有縁の石皿片で、2 点が接合している。表裏両面ともに使用されている。縁部を中心に金属製刃物の可能性の高い削痕が認められ、本地区に中世遺物が出土していることより中世段階で再利用・再加工しているらしい。58は縁の有無不明の石皿片で、4 点が接合している。59は縁を有し、両面が凹む。縁部の一部に敲打痕が見られる。

不明石器

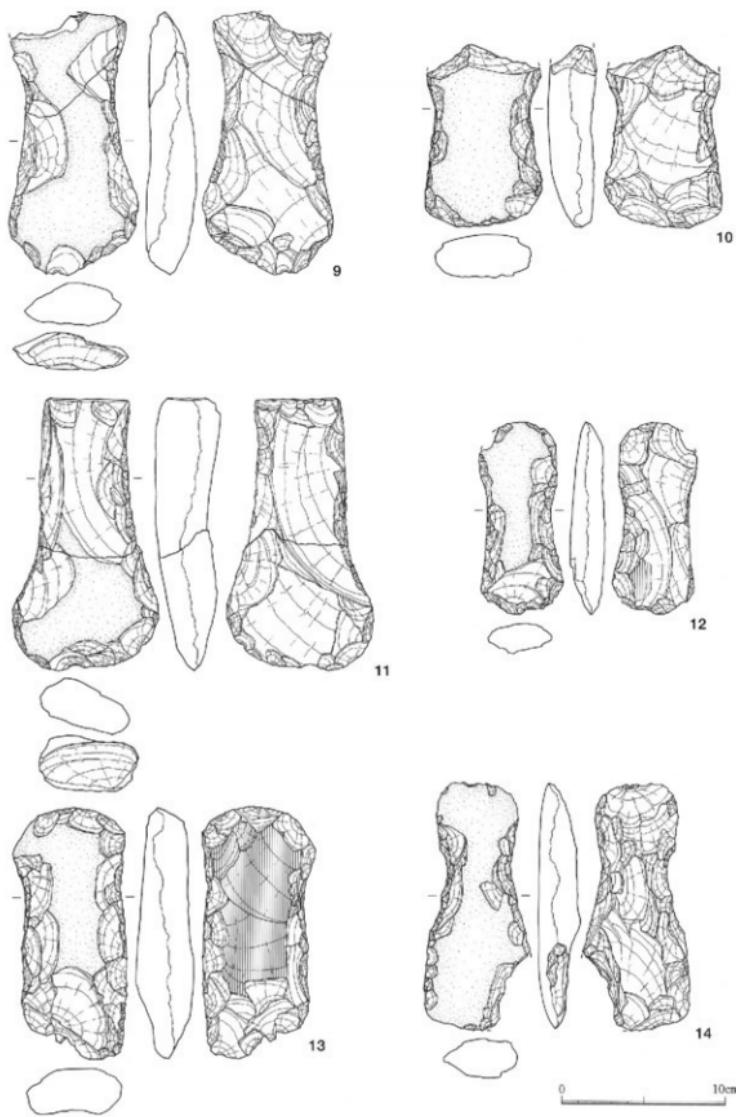
60は、平の部分に自然面を残し、側面全面が粗く摩耗している。中世の遺物かもしれない。

表 2 石器観察表

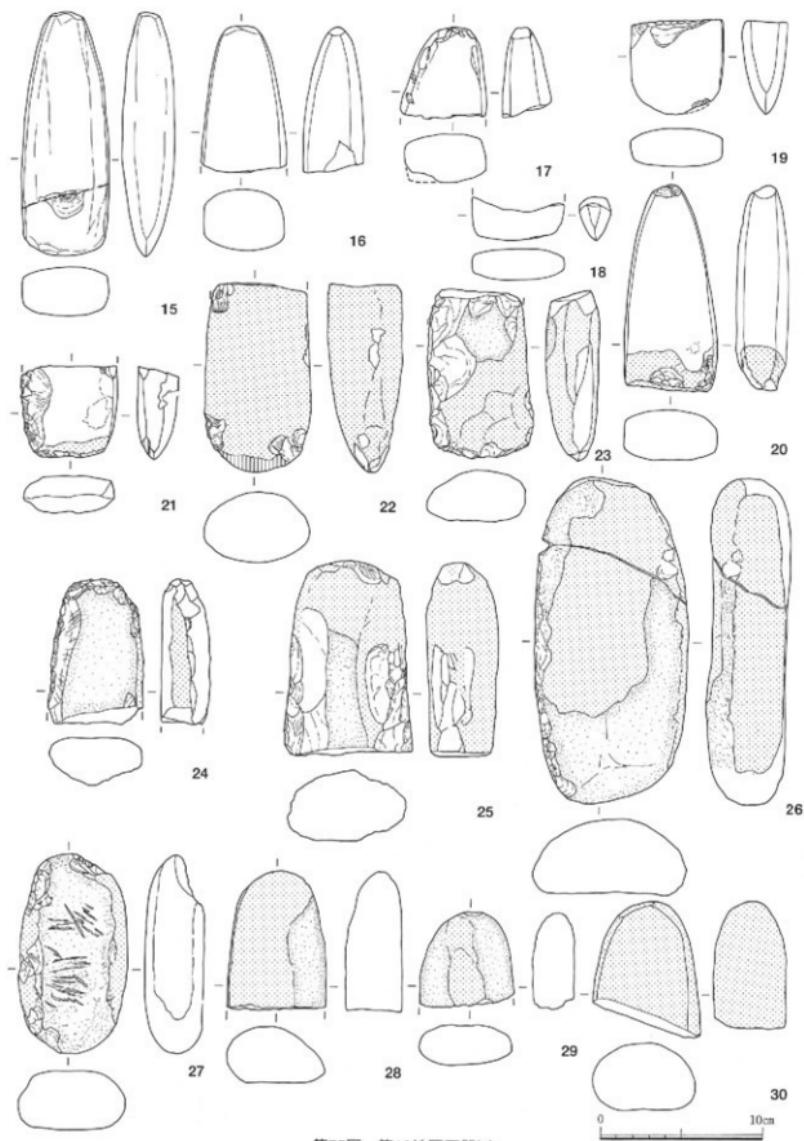
| No. | 器種 | 長軸長 | 最大幅 | 重 量 | 石 質 | 備考 |
|-----|---------|------------|------------|-----------|----------------|-------------|
| 1 | 打製石斧 | 23.4cm | 7.8cm | 950g | 角閃石ダイサイト | 括れ部削削合。 |
| 2 | 打製石斧 | 19.6cm | 7.8cm | 765g | 角閃石ダイサイト | |
| 3 | 打製石斧 | 12.1cm | 6.1cm | 205g | モリブデン石青閃石ダイサイト | 削削合。 |
| 4 | 打製石斧 | 14.0cm | 6.7cm | 260g | 角閃石輝石安山岩 | 研磨部欠損。 |
| 5 | 打製石斧 | 10.0cm | 4.8cm | 150g | 角閃石輝石安山岩 | 研磨部・裏面欠損。 |
| 6 | 打製石斧 | 11.7cm | 4.4cm | 115g | ひん岩 | 括れ部削削発達。 |
| 7 | 打製石斧 | 14.3cm | 6.5cm | 327g | ディサイト | 片側未調整。 |
| 8 | 打製石斧 | 11.5cm | 6.2cm | (172g) | 角閃石輝石安山岩 | 頭部欠損。 |
| 9 | 打製石斧 | 16.2cm | 8.9cm | (407g) | 角閃石輝石安山岩 | 頭部欠損。 |
| 10 | 打製石斧 | (13.0cm) | (11.2cm) | (150g) | ディサイト | 頭部欠損。 |
| 11 | 打製石斧 | 16.0cm | 9.2cm | 600g | ディサイト 黄銅斑岩 | 頭部小調整。 |
| 12 | 打製石斧 | 12.0cm | 5.2cm | (155g) | モリブデン石青閃石ダイサイト | 頭部欠損。 |
| 13 | 打製石斧 | (15.7cm) | 7.1cm | (486g) | モリブデン石青閃石ダイサイト | 頭部の素面欠損。 |
| 14 | 磨製石斧 | 15.5cm | (6.5cm) | (261g) | ディサイト 黄銅斑岩 | 月部大欠損。 |
| 15 | 磨製石斧 | 14.9cm | 5.3cm | (370g) | 輝石安山岩 | 月部欠損接合。 |
| 16 | 磨製石斧 | (9.5cm) | (5.2cm) | (236g) | 角閃石輝石安山岩 | 月部大欠損。 |
| 17 | 磨製石斧 | (6.7cm) | (6.2cm) | (115g) | 輝長岩 | 縫合部片。 |
| 18 | 磨製石斧 | (6.6cm) | (6.6cm) | (125g) | ディサイト | 月部欠損。 |
| 19 | 磨製石斧 | (5.6cm) | (5.7cm) | (125g) | 角閃石輝石安山岩 | 月部片、裏に再利用。 |
| 20 | 磨製石斧 | (12.5cm) | (5.7cm) | (334g) | 輝石安山岩 | 月部削落・月部片。 |
| 21 | 磨製石斧 | (5.6cm) | (5.8cm) | (116g) | 輝長石 | 剥離、崩打、研磨。 |
| 22 | 磨製石斧 | (11.5cm) | (6.5cm) | (478g) | ディサイト | 剥離、崩打、研磨。 |
| 23 | 磨製石斧 | (10.4cm) | (6.4cm) | (125g) | モリブデン石青閃石ダイサイト | 剥離、崩打。 |
| 24 | 磨製石斧 | (8.9cm) | (5.7cm) | (220g) | 砂岩 | 剥離、崩打。 |
| 25 | 磨製石斧 | (11.8cm) | (7.8cm) | (610g) | ひん岩 | 剥離、崩打。 |
| 26 | 磨製石斧 | (10.9cm) | (9.4cm) | (1475g) | 流紋岩 | 剥離、崩打。 |
| 27 | 磨製石斧 | (12.1cm) | (6.6cm) | (430g) | ディサイト | 剥離、崩打。 |
| 28 | 磨製石斧 | (8.5cm) | (6.0cm) | (250g) | 角閃石ダイサイト | 崩打。 |
| 29 | 磨製石斧 | (5.8cm) | (5.7cm) | (111g) | 砂岩 | 崩打。 |
| 30 | 磨製石斧 | (8.3cm) | (6.4cm) | (320g) | 達長石 | 崩打。 |
| 31 | 角閃石斧 | (17.3cm) | (6.3cm) | (750g) | ひん岩 | 破打。 |
| 32 | 磨製石斧 | (9.9cm) | (4.7cm) | (98g) | 輝石安山岩 | ほぼ完成品。 |
| 33 | 老熟石斧 | (4.6cm) | (2.7cm) | (26g) | 砂岩 | 月部欠損。 |
| 34 | 石 | 11.0cm | (7.7cm) | (740g) | 輝石安山岩 | 丸善部に剥打・磨削。 |
| 35 | 剥 破 打 具 | (11.9cm) | (7.2cm) | (326g) | ディサイト | 先端部に磨打・剥離。 |
| 36 | 破 打 具 | (10.5cm) | (9.0cm) | (388g) | 輝石安山岩 | 手の面を磨石に削削。 |
| 37 | 破 打 具 | 3.4cm | 1.7cm | 0.4g | 珪質岩 | |
| 38 | 剥片石斧 | 3.4cm | 7.9cm | 20g | ディサイト 黃銅斑岩 | 一部摩耗している。 |
| 39 | 剥片石斧 | 17.7cm | 15.6cm | 483g | ディサイト | 一部摩耗している。 |
| 40 | 円 石 | 8.9cm | 7.4cm | 373g | 輝石安山岩 | 2 面に凹み |
| 41 | 圓 石 | 8.6cm | 6.1cm | 375g | 輝石安山岩 | 4 面に凹み |
| 42 | 圓 石 | 11.3cm | 9.6cm | 1290g | 輝石安山岩 | 1 面に凹み |
| 43 | 圓 石 | 9.9cm | 7.6cm | 340g | 輝石安山岩 | 2 面に凹み |
| 44 | 圓 石 | 15.5cm | 8.7cm | 865g | 流紋岩 | 剥離後の摩耗度。 |
| 45 | 圓 石 | 15.5cm | 8.7cm | 866g | 砂岩 | 2 面に凹み |
| 46 | 圓 石 | (12.2cm) | (9.0cm) | (800g) | 花崗斑岩 | |
| 47 | 圓 石 | 11.6cm | 9.2cm | 805g | 砂岩 | |
| 48 | 圓 石 | 11.7cm | 8.5cm | 732g | 閃綠岩 | |
| 49 | 圓 石 | 14.8cm | 11.3cm | 1600g | 安山岩 | |
| 50 | 圓 石 | (9.8cm) | (9.3cm) | (670g) | 安山岩 | |
| 51 | 石 | (17.5cm) | 26.3cm | (4600g) | 花崗斑岩 | |
| 52 | 石 | (17.2cm) | (19.2cm) | (1250g) | 合角閃石ダイサイト | 剥離部被覆されている。 |
| 53 | 石 | (16.0cm) | (13.0cm) | (2000g) | ディサイト | |
| 54 | 石 | 20.5cm | (10.3cm) | (1150g) | 輝質砂岩 | |
| 55 | 石 | (12.5cm) | (11.0cm) | (950g) | ディサイト 黃銅斑岩 | |
| 56 | 石 | (13.6cm) | (9.3cm) | (850g) | 合角閃石ダイサイト | |
| 57 | 石 | (13.6cm) | (18.0cm) | (890g) | 砂岩 | |
| 58 | 石 | (17.6cm) | (15.0cm) | (2900g) | 合角閃石ダイサイト | |
| 59 | 石 | (13.7cm) | (5.6cm) | (2900g) | 合角閃石ダイサイト | 側面が凹む。 |
| 60 | 不明石器 | (10.1cm) | (9.9cm) | (805g) | 輝石安山岩 | 側面が削られている。 |



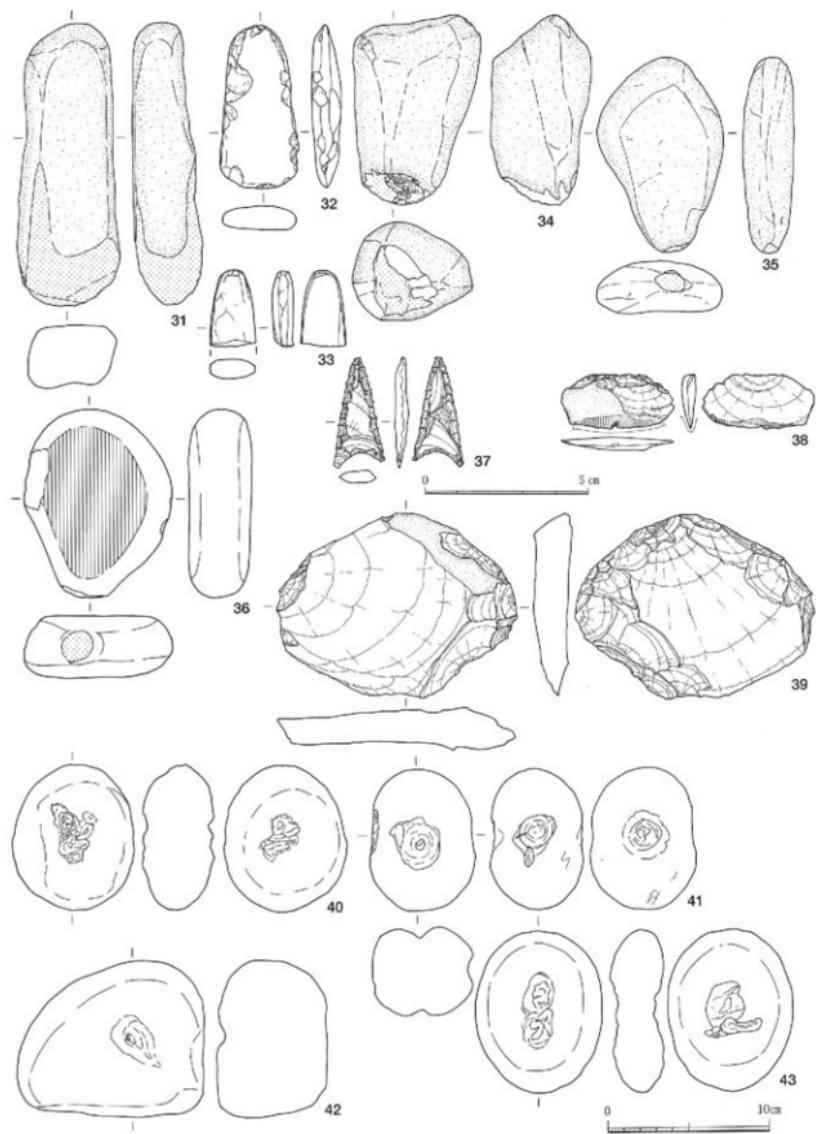
第73図 第12地区石器(1)



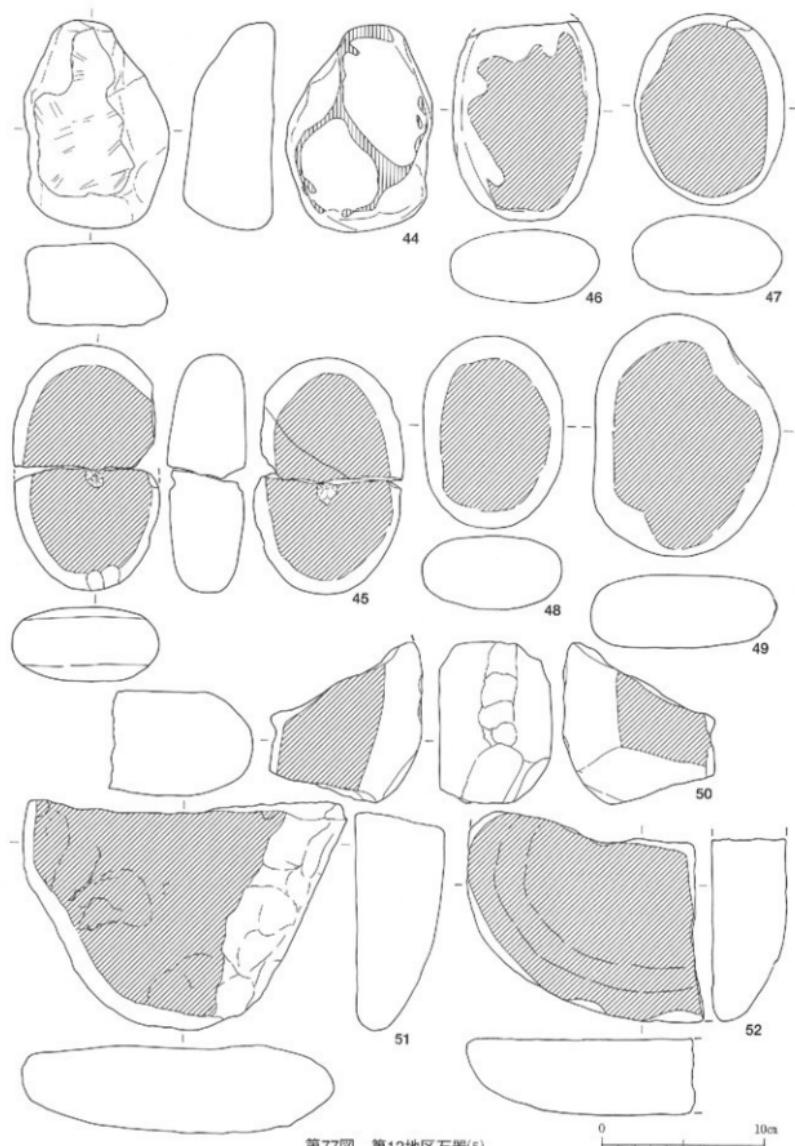
第74図 第12地区石器(2)



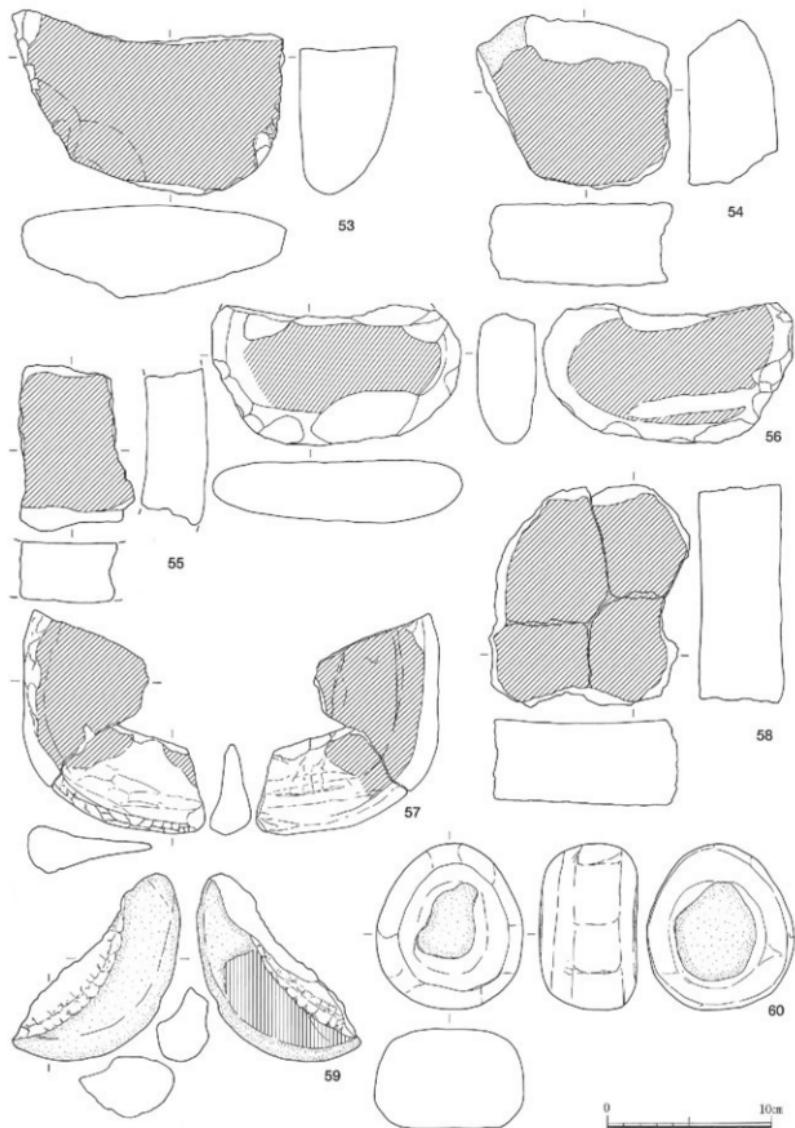
第75図 第12地区石器(3)



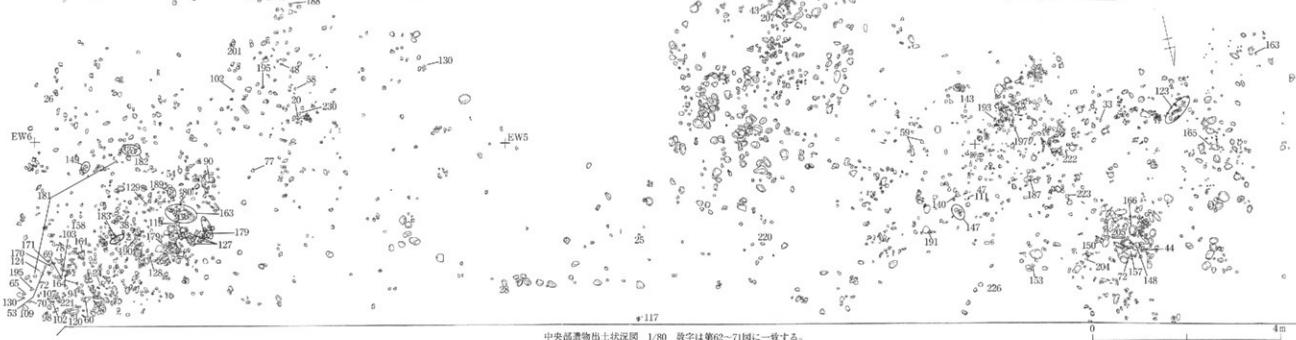
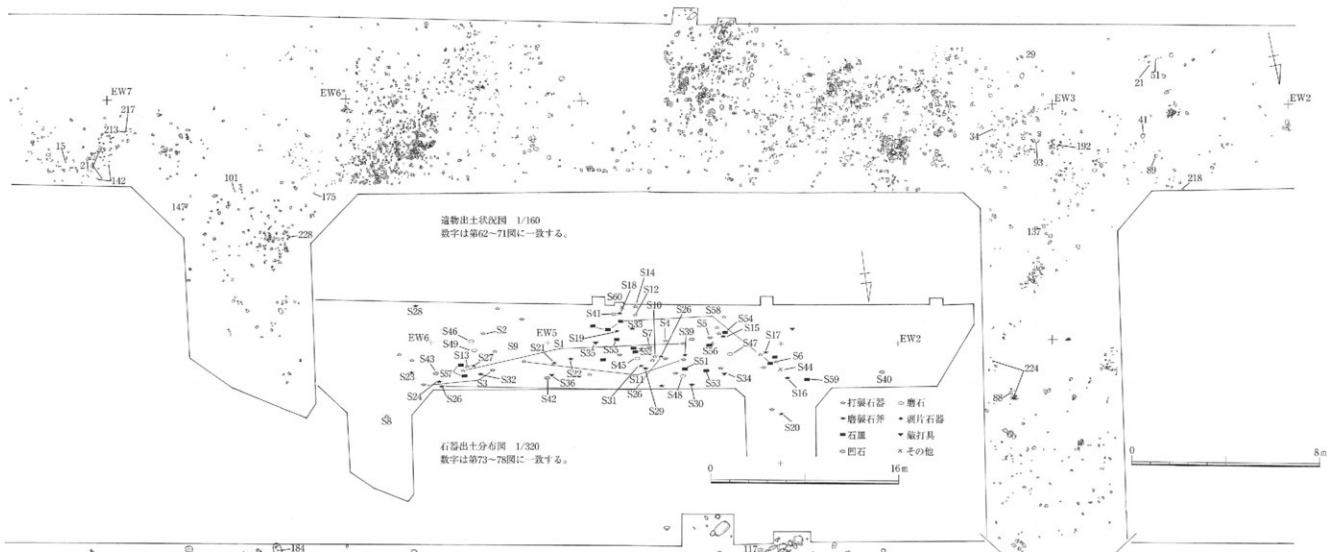
第76図 第12地区石器(4)



第77図 第12地区石器(5)



第78図 第12地区石器(6)



第79図 第12地区縄文包含層遺物分布図



第80図 第12地区 SK 1

弥生時代

調査区西部より穴が検出されている。

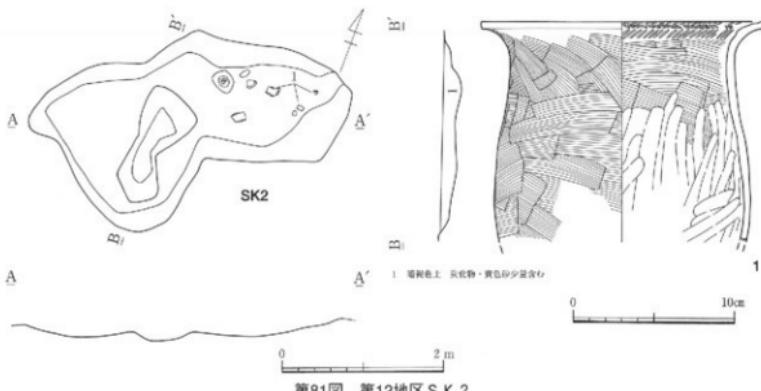
穴

SK 1 第80図

調査区の西部に位置する。長軸長180cm×短軸長163cmの不整形を呈する。深さは最深部で52cmを測り、底面は凹凸が著しい。遺物は覆土中より弥生式土器が出土している。弥生式土器はSK 2のものと接合し、土器の大部分はSK 2より出土しているためSK 2において記す。

SK 2 第81図

調査区の西部に位置する。中世の窯に東壁の一部が切られる。長軸長400cm×短軸長210cmの不整形を呈す。深さは最深部で28cmを測る。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は覆土中より弥生式土器が出土している。1は小松式の甕である。



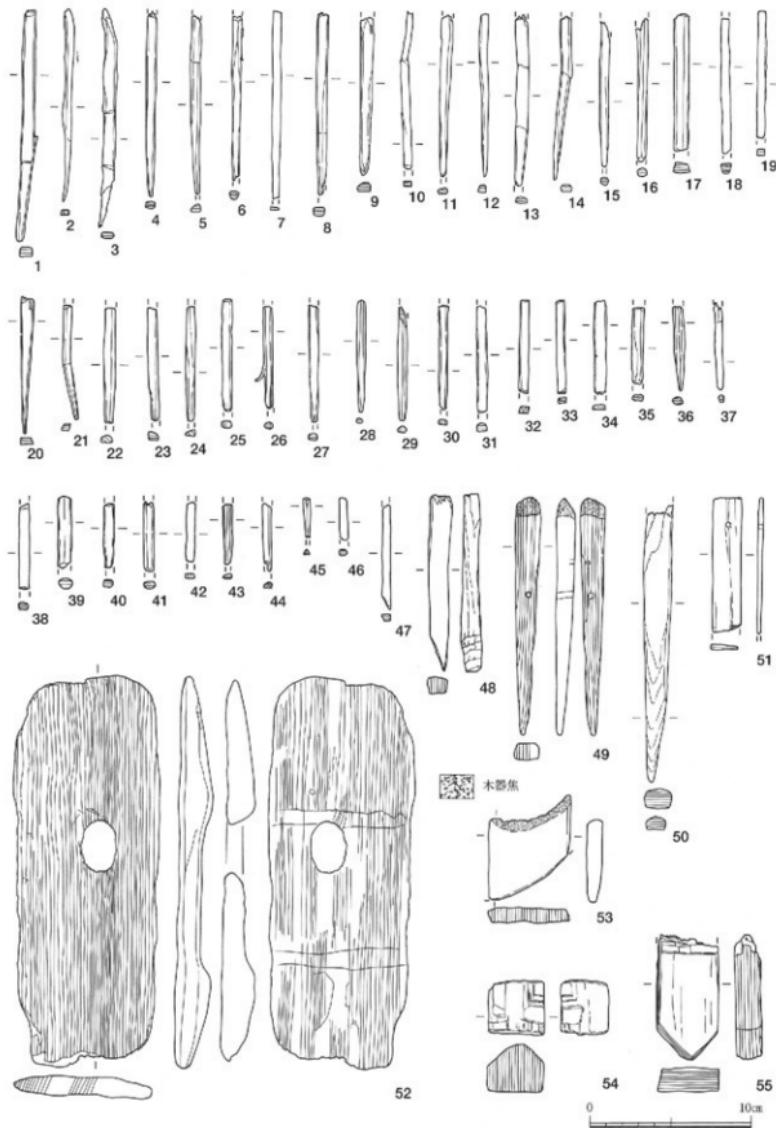
る。外面は刷毛目が施される。内面は刷毛目後、胴中位以下に撫で、口縁部に櫛目による刺突が施される。胎土は白色粒を含み、色調は褐灰色である。SK 1より口縁部片の一部が出土している。本穴は弥生時代中期の所産と思われる。

中世

烟跡が検出されており、包含層中より木製品が出土している。

烟址

調査区の中央部～西部に存在し、北東～南西方向に向かっている。縄文時代包含層の黒色土層上面より掘り込まれていると思われるが、上面では遺構確認はできず、縄文時代遺構確認面で初めて平面形状が明らかとなっている。



第82図 第12地区中世木製品

包含層出土遺物

1～46は、箸で、いずれも欠損している。47・48は不明木製品で、角材の先端を斜めに削っている。49は釘穴のある木材を再利用して先端部を削った尖頭棒である。上部には焼け焦げがある。50は先端部を削った尖頭棒である。51は不明木製品で、板目の長方形板材の端に孔を有す。52は下駄である。前壺のみで、後壺は無く、前壺は右寄りのため左足用と思われる。歯は低く、台は中央部が歯の前後よりも薄くなる。53は曲物底板である。カキイレ底で、一部焼けこげている。54は不明木製品である。直方体の一辺に斜めに両側から削り込みをいれている。55は不明木製品で、板目の板材の先端を圭頭状に削っている。

V 吉岡遺跡（第1次調査地区）

1 調査の概要

第1次調査地区（A～C地区）は吉岡遺跡のほぼ中央部に位置し、今回の住宅団地造成工事では南からの進入道路部分に該当する。当初は、進入道路を一括して調査予定にしていたが、調査区域内に農道・用水があり、3地区に分けて調査することとした。地区は北からA地区・B地区・C地区とした。調査は富山市教育委員会が担当した。A地区の西側は、山武考古学研究所が担当したII地区と接している。

2 基本層序（付図1）

1層 浅黄色土（表土）15cm。 2層 灰黄褐色土12cm。 3層 黒褐色土（遺物包含層）10cm。 4層 黄灰色土（遺物包含層）13cm。 4層下に、黄褐色土の遺構検出面に至る。A地区は、表土直下が遺構検出面である。

3 遺構

古代

A地区とB地区で烟址と穴などを確認した。

烟址（第84回） 烟址はX69904～69944、Y5518～5534で集中して検出した。SD05の東岸と中世溝SD04の南東岸にある。烟址は調査区外東方に伸びる。烟址の走行方向は切り合い関係などから大きくわけて5期の変遷があると考えられる。

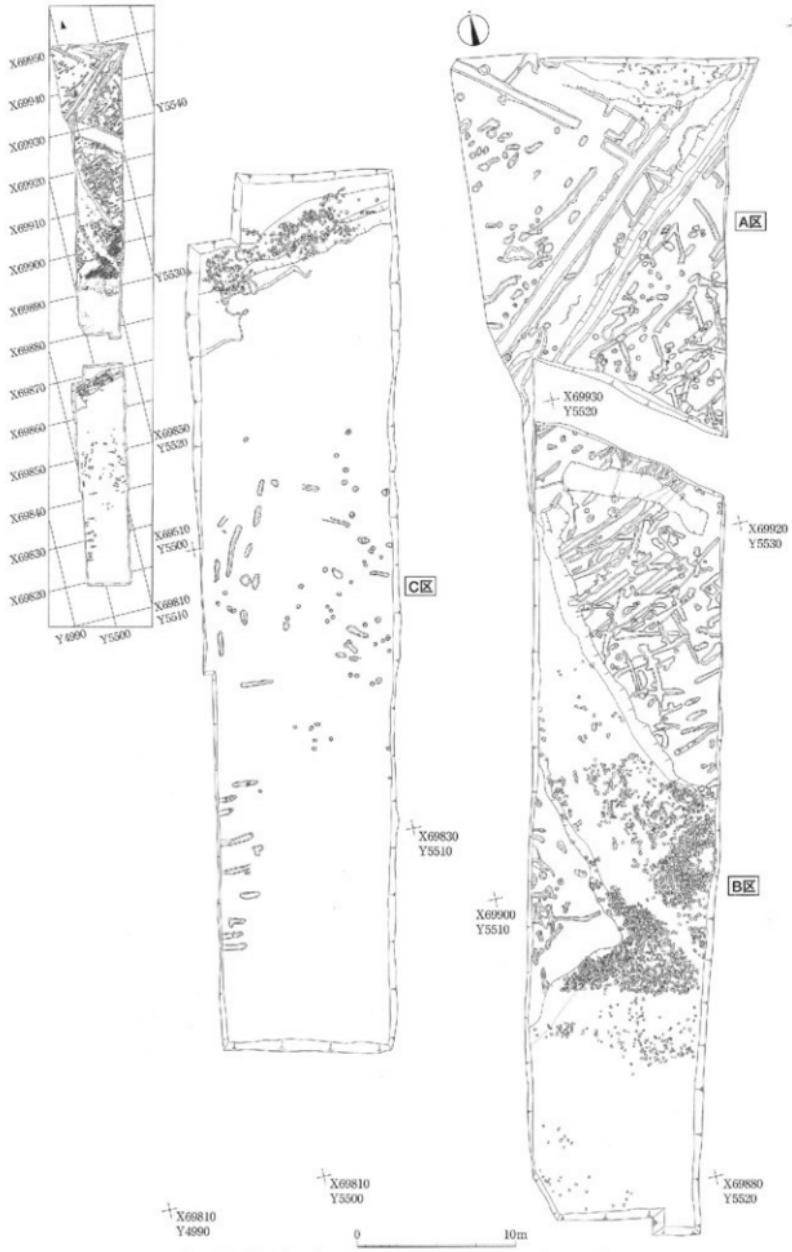
1期 SD36 (N-72°-E) ·37 (N-70°-E) ·44 (N-70°-E) ·50 (N-70°-E) ·52 (N-73°-E) ·59 (N-76°-E) ·60 (N-70°-E) ·61 (N-75°-E) ·65 (N-80°-E) ·66 (N-79°-E) ·67 (N-70°-E) ·69 (N-80°-E) ·71 (N-70°-E) が該当する。走行方向がN-70°～80°-Eの方位のなかに収まる。これらのほとんどは2期以降の溝に切られており、最も古いものと考えられる。幅は25～60cmで、深さ26～58cmである。

2期 SD32 (N-25°-E) ·72 (N-27°-E) ·73 (N-27°-E) が該当する。走行方向はN-25°～27°-Wの方位でA地区・B地区にまたがって検出された。この溝と対応するものが検出されていない。幅は約36cm、深さ約11cmである。

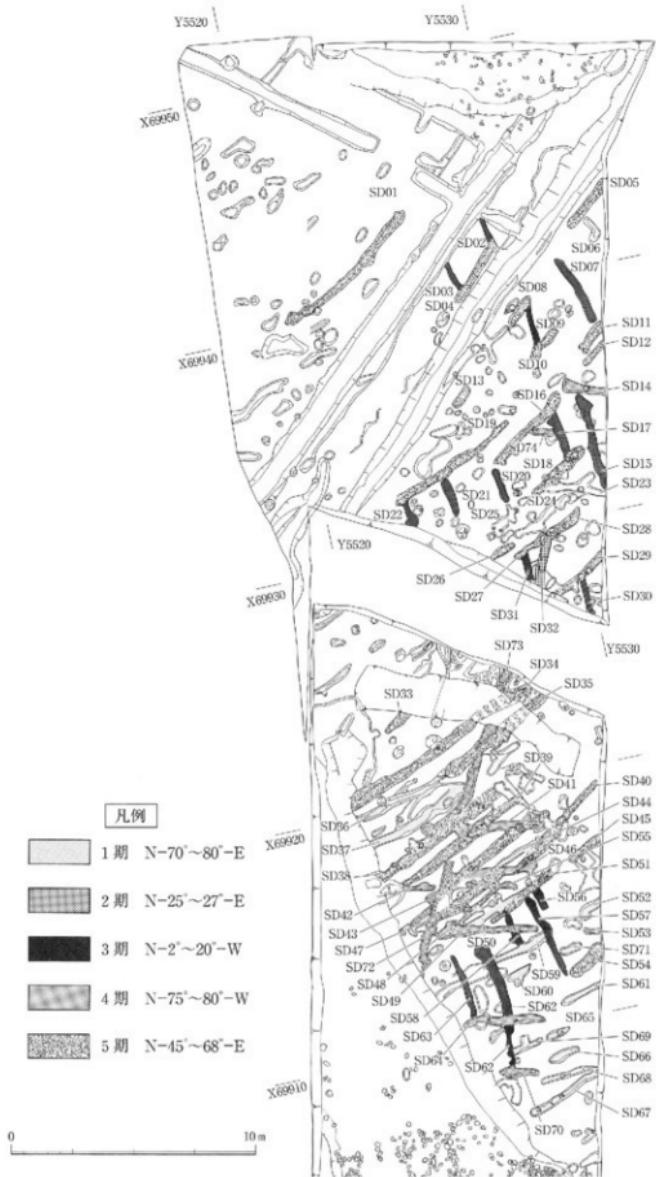
3期 SD09 (N-2°-W) ·15 (N-5°-W) ·17 (N-7°-W) ·20 (N-6°-W) ·21 (N-7°-W) ·22 (N-5°-W) ·30 (N-3°-W) ·31 (N-6°-W) ·57 (N-3°-W) ·58 (N-10°-W) ·62 (N-3°-W) ·63 (N-3°-W) が該当する。走行方向がN-1°代-Wの方位のなかに収まる。1・2期とともに、東に傾いていたのに対して、西に傾いている。幅は24～40cm、深さ14～32cmである。

4期 SD14 (N-70°-W) ·41 (N-80°-W) ·42 (N-76°-W) ·46 (N-82°-W) ·49 (N-80°-W) ·53 (N-75°-W) ·55 (N-76°-W) ·64 (N-80°-W) ·70 (N-78°-W) ·74 (N-75°-W) が該当するとと思われる。走行方向はN-70°～80°-Wに収まる。4期の溝も3期同様に西に傾いている。幅は27～48cm、深さ12～20cmである。

5期 SD01 (N-54°-W) ·04 (N-45°-W) ·05 (N-52°-W) ·08 (N-47°-W) ·10 (N-53°-W) ·11 (N-54°-W) ·12 (N-55°-W) ·13 (N-55°-W) ·16 (N-55°-W) ·18 (N-60°-W) ·19 (N-60°-W) ·26 (N-69°-W) ·27 (N-68°-W) ·28 (N-68°-W) ·29 (N-60°-W) ·33 (N-



第83図 第1次調査A区・B区・C区遺構配置図 (1:300)



第84図 第1次調査柵址 (1:200)

58° - W) · 34 (N - 68° - W) · 35 (N - 62° - W) · 38 (N - 64° - W) · 39 (N - 65° - W) · 40 (N - 55° - W) · 43 (N - 64° - W) · 45 (N - 65° - W) · 47 (N - 67° - W) · 48 (N - 60° - W) · 51 (N - 63° - W) · 54 (N - 63° - W) が該当すると思われる。走行方向はおおよそ N - 50°代 - 60°代 - W に収まる。3・4期で西に傾いた溝が、この時期には再び東に傾く。最もよく残るSD34で、8.4m分確認した。幅は30~50cmで、深さ約20cmである。断面形態はU字状で、黒褐色土が堆積する。

遺物は、縄文土器・須恵器・土師器が出土している。B地区に集中している。

S K 0 1 (付図2) X 69900、Y 5515で検出し、SD05の西岸にあたる。長軸78cm、短軸35cm、深さ45cmを測る。1~3層から遺物が出土しており、上面から土師器碗が出土している。

S K 0 2 · 0 3 (付図1) X 69905、Y 5513~5514で検出し、SD05の西岸にあたる。SK02はSK03に切られている。SK03は調査区外北方に伸びる。SK02は長軸45cm、短軸38cm、深さ21cm、SK03は長軸43cm、短軸23cm以上、深さ46cmを測る。SK03からは土師器が出土している。

中世

A・B・C地区で溝跡を検出した。

S D 0 1 (付図1) X 69946~69952、Y 5523~5537、A地区の北端で検出した。調査区の北方に伸びる。S D 0 3 を切っている。付図1では、SD01の最終の掘り上がりの側面を掲載しているが、埋没後に、2度掘り直している。

S D 0 2 (付図1) X 69942~69952、Y 5518~5532で検出した。調査区外北西方向に伸びる。SD03に接続していると考えられる。12.5m分を検出した。溝は北西から8.7m地点で、1.8m間があいており、土橋が設けられている。幅は約80cm、深さは約20cmである。

S D 0 3 (付図1) X 69923~69947、Y 5518~5533で検出した。溝の北端はSD01に切られている。南端は南西方向に伸びる。SD02を切っている。24.2m分を検出した。幅は最も広いところで1.8mである。

深さは遺構検出面から約38cmである。溝の断面形態は逆台形状を呈する。

溝の東側には、北端から3m地点から南端にむかって14.7mの長さで、幅20~50cmの段をもっている。また、北端部分では溝底が7cmほどがっている。底部のレベルは、若干ではあるが南部分の方が低いため、北から南に向かって流れているものと想定され、ほぼ直線状である。

遺物は、土師器・珠洲焼・木片・炭化物が出土している。

S D 0 4 (付図1) X 69932~69969949、Y 5520~5538で検出した。A地区を貫流し、調査区外北東方向に伸びる。南西端部はその延長がI1地区では検出されていないため、A地区とB地区の間で終わっていると考えられる。22.6m分を検出した。幅は最も広いところで1.6m、深さは遺構検出面から約35cmである。

底部のレベルは北東、南西端とも差はない。やや西側に蛇行する。

遺物は、須恵器・土師器・珠洲焼・木片・青磁・中世土師器・炭化物が出土している。

SD03とSD04はほぼ平行して流れしており、両溝の中心間の距離は3~3.5mである。

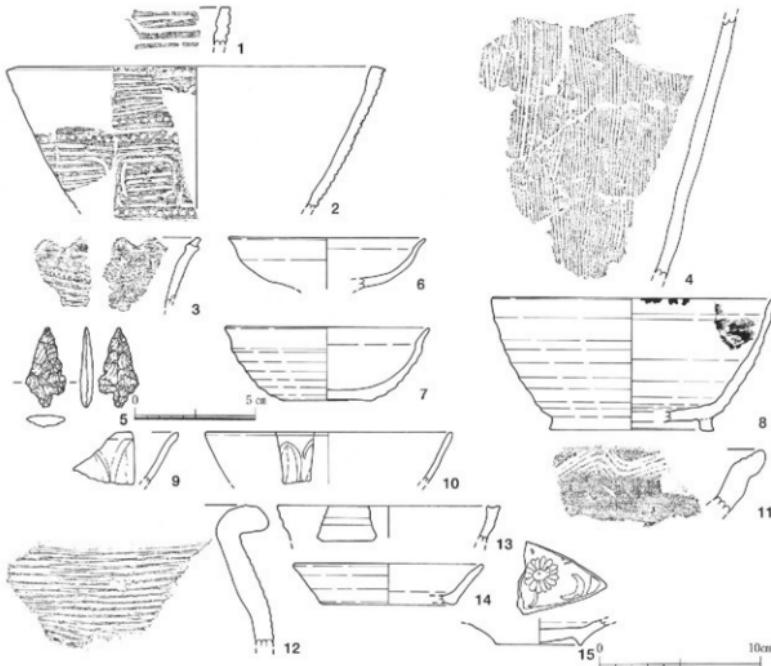
S D 0 5 (付図2) B地区・C地区にまたがって検出した。検出した部分は、東方向から西方向に流れるものと南方向から北方向に流れるものとの合流地点にある。溝底面のレベルは東西南北地点ともそれほど高低はないが、地形的見てそのような流れを想定した。東西方向の溝は、幅約25m。深さは遺構検出面から80cmである。南北方向の溝は、幅約7.5m。深さは遺構検出面から約70cmである。

溝の南肩・東肩・合流地点には人頭大の礫が集中して見られる。その礫中と南北溝の西肩から4m部分に

堆積した砂礫層に遺物が大量に含まれていた。

また、砂礫層の上およびには溝底部の東側部分には灰オーリープの砂が堆積しており、ある程度水量があったことを伺わせている。この層の上層には、黄灰色や灰白色を基調とした粘質の土が堆積しており、水量が乏しくなったことを窺わせている。

遺物は、縄文土器・石鏃・須恵器・土師器・内黒土器・珠洲焼・越前焼・古瀬戸・青磁・八尾焼・越中瀬戸焼・肥前焼・漆椀が出土している。



第85図 第1次調査出土遺物

4 遺 物

第1次調査出土遺物

1～5は、縄文時代晩期の遺物である。1は沈線による工字文が施文される浅鉢で、口縁部が小波状突起を有し、内面に太い沈線が見られる。B区遺物包含層から出土。2は口縁部が肥厚し、口唇部が面を成す深鉢で、C字状文具による刺突列点文と沈線文が施文され、沈線文は平行沈線を充填した方形区画文が見られる。外面に黒色付着物がある。B区SD37・39から出土。3は内外面に条痕が施される粗製の深鉢で、口唇部が棒状工具により押圧され小波状となる。B区SK04から出土。4は粗製の深鉢で、外面に条痕、内面に磨きが施される。B区SD48より出土。5はメノウ製の石鏃で、有舌の長三角形を呈し、重さは19gである。B区SD05から出土。

6～8は、古代の遺物である。6はロクロ土師器坏の口縁部片である。B区SK05から出土。7はロクロ土師器坏で、底部は回転糸切りである。B区SK01から出土。8は須恵器高台付坏で、高台部は外端接地し、回転糸切り痕が僅かに残る。口縁部内面に黒色付着物が認められる。B区遺物包含層から出土。

9～16は、中・近世の遺物である。9・10は青磁I～5類の篠造弁文碗である。9はA区SD04、10はC区遺物包含層から出土。11は珠洲焼片皿で、皿縁部内面に波状櫛目文が施文される。12は珠洲焼壺で、外面に平行叩目を施す。11、12ともにB区SD05から出土。13は瀬戸美濃の皿で、内面に灰釉が掛かり、外面が露胎となる。14は瀬戸美濃の皿で、灰釉が内外面に掛かる。15は越中瀬戸折縁皿で、見込に介菊文を施す。14、15ともにA区SD01から出土。